

1578（天正6）～80年にかけ、三木別所氏が信長に反旗を翻した時、別所氏方の淡河氏と有馬氏は対立することになったが1579年、淡河定範が三木城に敗走したため、有馬則頼は淡河城攻略の功として、淡河城を賜り城主となった。これにより、萩原城は廃城となっている。以上から、萩原城は1276年から1579年までの約300年間の長期にわたり歴史の舞台に登場した中世城郭であったことがわかる。

**2. 調査の概要** 今回の調査地区は、本丸（主郭）の北側に広がるいわゆる式の丸部分（Ⅱ郭）の東北部に相当する。

現在までに確認された遺構は、掘立柱建物・柵列・溝・土坑・木棺墓・土坑墓・集石遺構・階段状遺構及び縄文時代または弥生時代の円形堅穴住居等がある。

また、東及び南側斜面には横矢（横矢掛け）とよばれる小平坦面が付設されている。

#### 掘立柱建物

	長さ(m)	幅(m)	面積(m <sup>2</sup> )	坪数(坪)		長さ(m)	幅(m)	面積(m <sup>2</sup> )	坪数(坪)
SB 01	5.0	2.0	10以上	3.0以上	SB 08	9.0	6.3	56.7	17.2
SB 02	9.0	4.6	41.4	12.5	SB 09	7.5	5.0	31.8	9.6
SB 03	6.0	4.0	24.0	7.3	SB 10	7.0	5.0	35.0	10.6
SB 04	8.5	6.2	52.7	16.0	SB 11	5.4	4.1	22.14	6.7
SB 05	9.0	4.0	36.0	11.0	SB 12	3.5	2.3	8.05	2.4
SB 07	6.7	5.4	36.18	11.0	SB 13	7.9	5.5	43.45	13.2

**土 坑** 今回検出された多くの土坑の内、SK 33は長さ約2m、幅1.3m、深さ約30cmのもので、計6個体の一石五輪塔が投棄されていた。これらの中には、16世紀に遡ると思われるものも含まれている。

**集石遺構** 集石遺構 SX 04は、深さ約20cmを測る2m四方のもので、拳大程度の小石が集積され

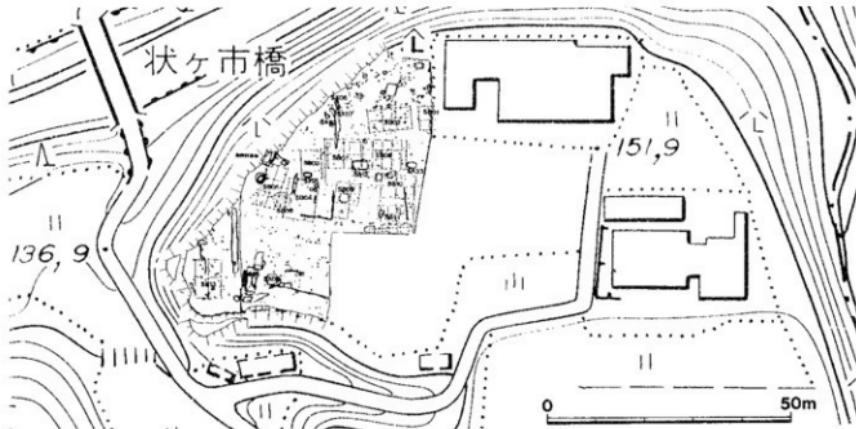


fig.107 調査区全体図



fig.108 遺構平面図

ていたが、その性格（使用目的）は不明である。

**階段状遺構** 階段状遺構は東縁部の中央付近で検出したもので、幅約3.5m、長さ約2.5mを測り、4段分残っていた。

**土坑墓** 土坑墓SX06は長さ2m、幅0.8m、深さ25cmの不整長方形のもので底面近くで、須恵器碗1、須恵器小皿3が出土した。

**竪穴住居** 竪穴住居SB06は、長径約3.5m、短径約3m、深さ約20cmの円形のもので、焼失しており内部には炭化材・焼土が残っていた。遺物はサヌカイトの剥片のみで土器類は全く検出されなかった。

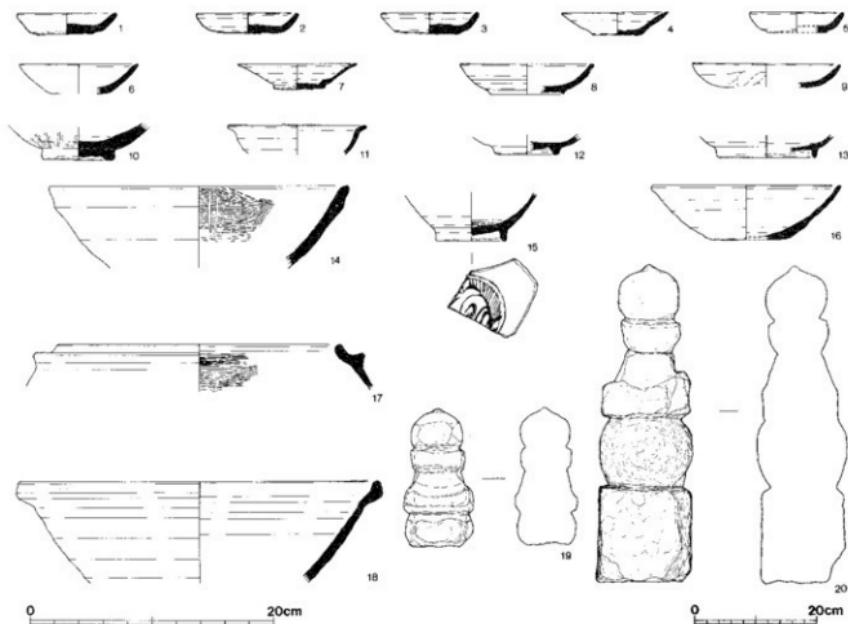


fig.109 出土遺物実測図

### 3.まとめ

この萩原城は、前記のように築城から廃城まで約300年という長期間にわたり使用され続けた城で、その間に何度も作り直しが行われたと考えられる。「横矢」も現在、永禄末年～天正初年に出現すると考えられており、萩原城もこの時点での改変が確認できる。

なお、調査中の段階では、南斜面で検出した石垣を中世のものと考えていたが、断ち割り調査の結果、それより新しいものと判明した。

今回検出した各遺構の年代については、遺物整理が未完の為、決定すること今は避けたいが、13～16世紀に属す遺物が見られる事は事実であり、1276年築城、1579年廃城という記録と合致している。

今年度の調査面積は約1500m<sup>2</sup>で、250m四方と推定される萩原城総面積の僅か2%にすぎないが、多くの遺構が検出され、萩原城の変遷と当時の城内での生活等を知る上で貴重な資料を提示するものであることは疑うことができない。

また、この萩原城は、以前から非常に残りの良好な城として知られていたが、今回の式の丸地区の発掘調査でもその事が改めて認識された。さらに、城の輪郭に関しても凸状をよくこの400年間にわたり残してきており、特に「横矢」や城の出入り部に敵の侵入から守るために、直角に屈曲する通路を設ける「枡形」と呼ばれる施設などが、非常に多く残っている。

## えびすちょう 15. 戻町遺跡 第10次調査

### 1. はじめに

戻町遺跡は妙法寺川左岸の平野部に立地する遺跡で、昭和62年の第1次調査では弥生時代前期後半以前の水田跡が確認され注目された。この調査以降、これまでに9次にわたってこの遺跡の調査が行われ、縄文時代晚期から中世にいたる遺物・遺構が確認されている。



fig.110  
調査地点位置図  
1 : 2500

### 2. 調査の概要

調査の結果、中世～弥生時代前期の4面の遺構面と遺物包含層が確認され、柱穴・土坑・溝などの遺構が検出された。

**第1遺構面** 洪水砂（4層）に覆われる暗褐色紗混じりシルト（5a層）上面で牛の足跡多数・掘立柱建物1（SB 01）・溝が確認された。この遺構面はほぼ水平である。

**SB 01** 掘立柱建物の柱穴8か所（SP 01～05・61～63）と雨落ち溝と思われる浅く細い溝8条（SD 01～06・11・12）が検出されている。柱穴はごく浅く、上部の構造も簡単なものであったことが推定できる。

**足跡** 検出された足跡は、その方向が定まらないものが多いものの、SP 01～SP 02～SP 05とSP 03～SP 04のラインにはさまれる範囲では東西方向に向くものが多く、SD 12の東にある段差の東では南北方向に向くものが多い。このように、建物の柱の位置と足跡の方向が対応することは注意される。また、これらの足跡は一様に存在するわけでもない。SP 03～SP 04の北からSD 12の南付近で段差の上にかけては、足跡が非常に少ない。

足跡の方向性などと柱穴の配置の対応は、この小屋が畜小屋的なものである可能性を推定させる。

4層の洪水砂からは土器が少量出土しており、そのなかで最も新しいものは平安時代のものである。

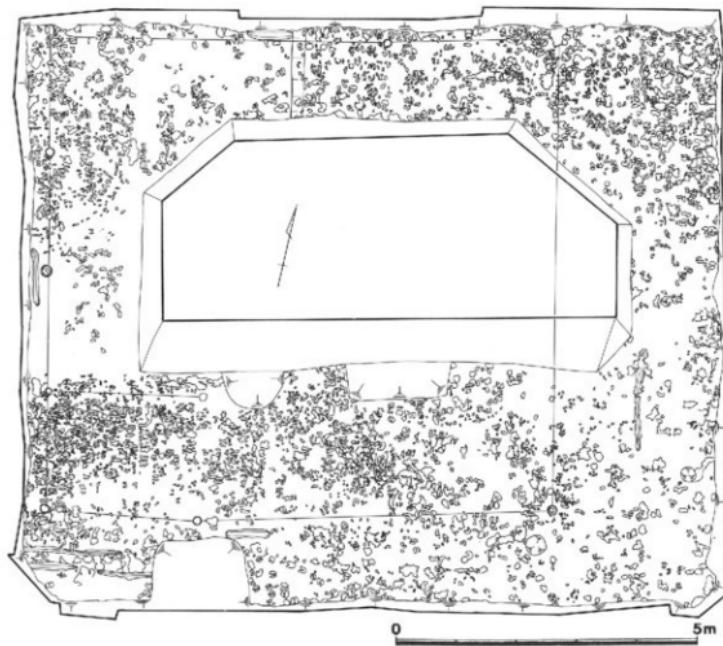


fig.111 第1遺構面平面図



fig.112 第1遺構面足跡



fig.113 第1遺構面足跡

- 第2遺構面** 弥生時代中期の遺物を包含する5a層の下面、5b層上面で確認した。遺構面は南東に向かってわずかに傾斜する。柱穴62か所、土坑2基、溝9条が検出された。
- SX01** 多量の弥生土器が出土した、平面圓円形の土坑で、その東側部分を検出した。南北2.5m、深さ約18cmをはかる。SD12・46と切り合い関係にあり、SX01→SD12→SP46の順で新しくなる。出土した弥生土器は第Ⅲ様式のものである。
- 柱 穴** いずれも平面プラン円形のもの。SP85・79・77は約1.2m間隔で並び、形状も類似しており、掘立柱建物の一部分である可能性が高い。
- 第3遺構面** 縄文時代・弥生時代前～中期の遺物を含む5b層～6a層の下面、6b層上面で確認した。柱穴51か所を検出した。
- 柱 穴** いずれも平面円形の小さなものである。
- 第4遺構面** 6b～6c層は無遺物層である。この下の7a層で弥生時代前期の土器が出土した。ただし、遺物の出土がみられたのは、調査地の東半に限られる。工事の影響を受ける部分について調査をおこなったため、調査範囲がごく限られており、今回の調査では遺構は確認できなかつたが、遺構面を形成すると推定される。
- 7層以下についても断ち割りを行つたが、遺物・遺構ともに確認されなかつた。

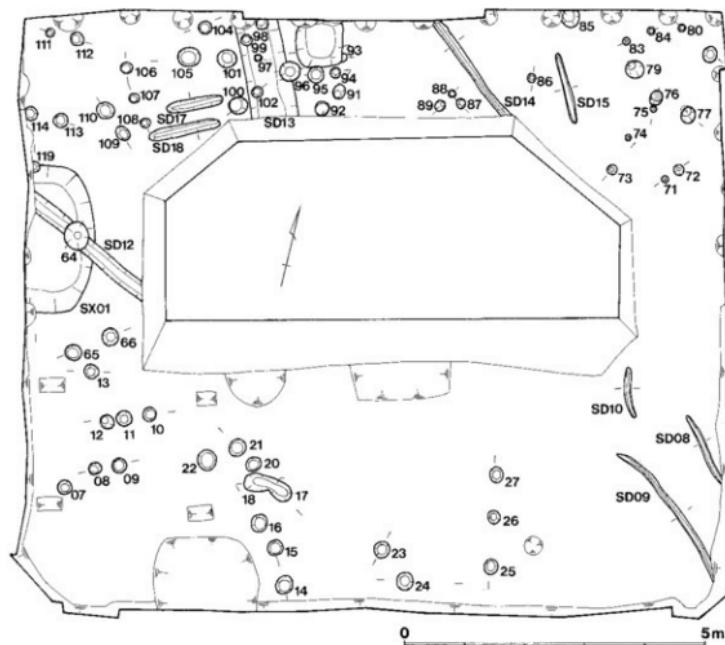


fig.114 第2遺構面平面図



fig.115 第2遺構面 SX 01

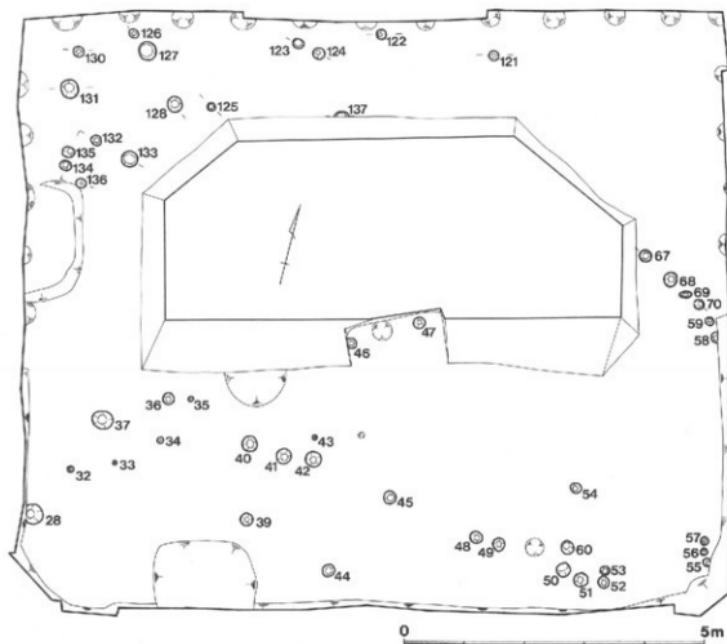


fig.116 第3遺構面平面図

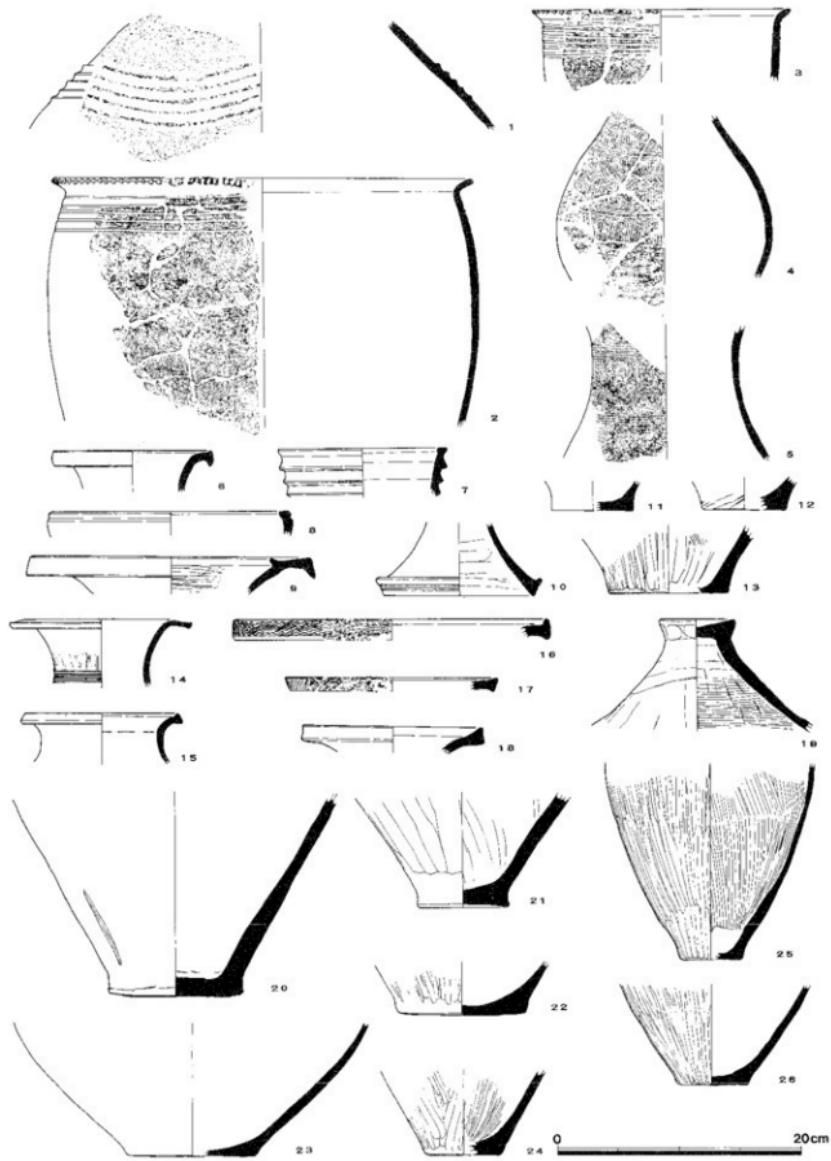


fig.117 出土土器実測図 (1～3 : 第7層 4～13 : 第5層 14～24 : SX 01)

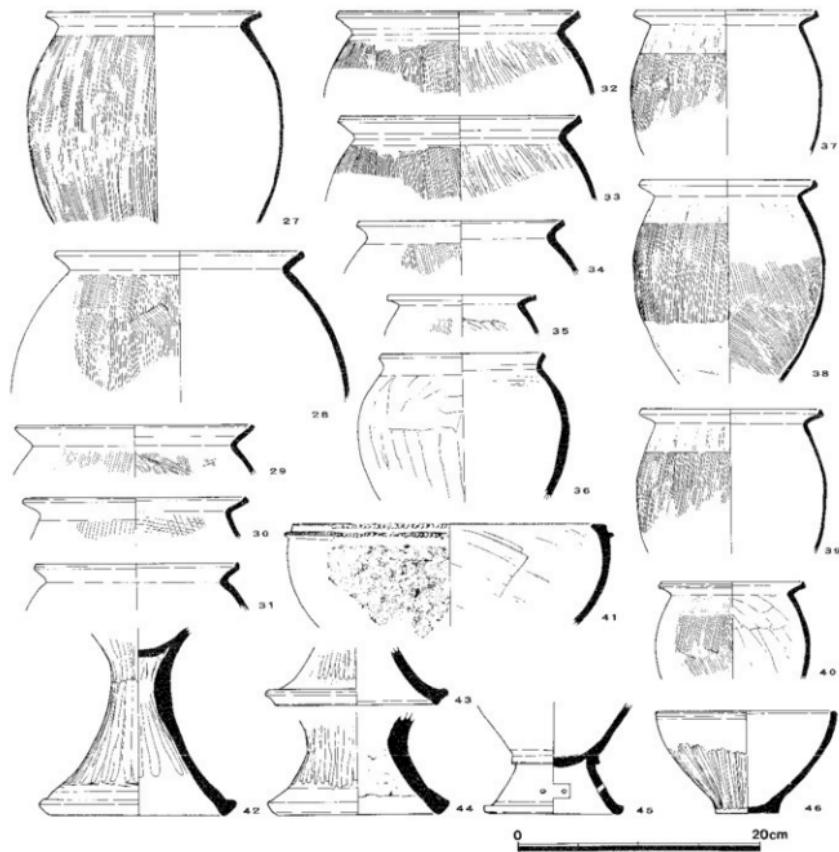


fig.118 SX 01 出土土器実測図

### 3.まとめ

第1遺構面で検出された牛の足跡は、道をはさんで西に位置する第9次調査においても確認されている。第9・10次調査ともに同じような密度で検出されており、両調査地を含む範囲で牛の飼育が行われたことが確認できた。

これらの牛の足跡は、洪水砂によって地表がそのままパックされたために通常、遺構としては残りにくい地表面の微妙な形状が残されたもので、今後周辺の調査がすすめば、当地における中世農村のある日の屋敷地・耕作地等土地利用の状況が具体的、克明に解明される可能性がある。

弥生時代の遺構は第2遺構面～第4遺構面でその存在が確認あるいは推定され、弥生時代を通じて営まれたこの集落がこの地点にも広がることが確認された。

## 16. 垂水・日向遺跡 第9・10次調査

### 第9次調査

#### 1. はじめに

垂水・日向遺跡の発掘調査は1988年にはじまり、今年度で6年次目にはいる。これまでの調査で、縄文時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代の遺構、遺物が明らかにされると共に、その面的な分布状況が把握し得るようになってきた。

当調査区は第8次調査北地区および第5次調査と第8次調査南地区の間にあり、第7次調査の東に接する。調査前までは、鉄筋コンクリート造3階建の建築物があり、建築時に遺構面へ著しい影響を及ぼしている事が予想された。



fig.119  
調査地点位置図  
1 : 2500

#### 2. 調査の概要

##### 平安時代

現地表下50cm前後に存在する平安・鎌倉時代の遺構面は、建築物の基礎掘削で全く失われていた。建築物から外れた僅かの部分で柱穴13基を確認した。この柱穴は、大型の長方形の掘形のものと、小型の円形のそれの2種類が認められる。大型のものは3基2間分が直線上にのるが、その全体規模は不明である。また、小型のものは4基3間分が直線上にのるが、これもまたその規模は不明である。これまでの調査から、大型の掘形は平安時代前半期に、小型の掘形は平安時代末から鎌倉時代に属するものが大部分である。

##### 縄文時代

平安・鎌倉時代の遺構面から約1.5m下に縄文時代の洪水による堆積が存在する。この堆積中に流木・縄文土器が含まれる。縄文土器は全て破片となったものであるが、磨滅はほとんどなく、極近くに存在したものであろう。すべて後期に属するものである。流木は調査区中央、南北方向に径60~70cmの大木が2本並んで出土した。その他は、比較的小型

のものであるが、第7・8次調査に比べると、細かいものは非常に少ない。計701点を確認した。

上記の洪水堆積の下で流路を確認した。この流路は第7次調査で確認したものに続くもので、幅10m、深さ0.8m程度である。流路堆積土と埋没後の層位から流木331点が出土した。土器などの時期決定し得る資料は出土しなかったが、その層位から縄文時代早期に属するものと考えられる。

T.P. 0.6m前後でヒトの足跡を2面で確認した。第1面は上記の流路によって大部分が削り去られており、狭い範囲で11歩を確認したにすぎない。第2面も半分程度が削り去られていたが、70歩を確認した。いずれの足跡も縄文時代早期に属するものである。

### 3.まとめ

第9次調査は狭小な範囲で、しかも攪乱が著しく、平安・鎌倉時代の遺構面は良好なものではなかった。しかし、掘立柱建物がこの範囲にも存在することが判明したことは、今後、遺跡全体の中での建物の分布を考える際に、重要な意味を有するようになると考えられる。縄文時代各時期の流木・足跡等も予想に違わぬ出土状況で、第8次調査北・南地区的成果を結合する意味から重要なものである。

## 第10次調査

### 1.はじめに

第9次調査に引き続き実施した調査で、第7次調査区の西側に隣接する。調査前は自転車駐輪場として利用されていた土地で、構造物が簡便なものであったことから、それによる攪乱は殆どないものと考えていた。しかし掘削してみるとコンクリート基礎が多数埋設されており、また中近世の水田耕作のために深く削平され、調査区北端の約180m<sup>2</sup>を除き殆ど遺構面が破壊されていた。

### 2.調査の概要

#### 鎌倉時代

現地表下約30cmで中近世の水田耕作土が現れる。この層位約20cmを掘り下げると、鎌倉

#### 平安時代

時代の遺構面になる。この遺構面は

#### 掘立柱建物

これまでの調査では第5次調査にお

#### いてのみ確認されていたもので、遺

構の埋土が灰色系を呈する。この遺

構検出面を第I遺構面と呼ぶ。小型

円形の掘形の柱穴約30基と土坑2基、

溝状遺構等を確認した。柱穴のうち、

掘立柱建物(SB 01)として認識で

きたのは2間×3間である。東の第

7次調査には対応する柱穴は認めら

れず、北側の未調査区に広がる可能

性は残る。

#### 土 塹

土坑2基(SK 01・02)は5mの

間隔をおいて同方向を指す同形態の

ものである。北側に大きな突起を、

南側に小さな突起をもつ。埋土は上

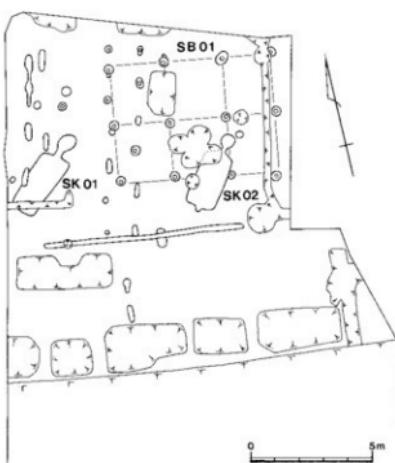


fig.120 第1遺構面平面図

層の中近世の水田と同様のものである。これを取り除くと全面、炭の堆積である。北側の突起と本体の間のくびれた部分は、本来トンネルで結合していたようである。そのくびれた部分から本体に入った付近が最も炭の堆積が厚く、この突起部分が焚き口であったと推測できる。南側の突起は小さくその下の底面は窪んでいる。この付近は炭の堆積がわずかで、おそらく煙出しではないかと考えられる。炭の堆積を取り除くと、底面は固く焼け締まっており、かなりの高温で火が焚かれたと推測される。この焼け締まりも細かく見ると桟木状に焼けの弱い部分が存在し、何らかの構造物が据え置かれていた可能性がある。なお炭層は水洗選別をしたが、土器の小片以外なにものも検出できなかった。

第Ⅰ遺構面の下5~10cmでこれまでの第Ⅰ遺構面に達する。ここではこれを第Ⅱ遺構面と呼ぶ。この第Ⅱ遺構面も北端では良好に保存されていたが、それ以外の地区ではほとんど削平され、南半でわずかに柱穴を確認したにすぎない。柱穴は大型の長方形の掘形を有するものと、小型の円形の掘形を有するものがある。北端地区で長方形掘形の柱穴4基が直線上にのり、それに対応するもの2基を確認した。3×1間以上の掘立柱建物が想定できるが、擾乱でそれ以上は不明である。その北方で木棺墓1基(ST 01)を検出した。掘形は2段掘りで、上段は3×1.7m、下段は2.3×1.4mで深さは約0.5mである。木棺は幅0.5m、長さ1.6mで、北側で幅広く、南側で狭いことから北枕であったと推測される。木棺内部から須恵器小皿、土師器壺が出土した。

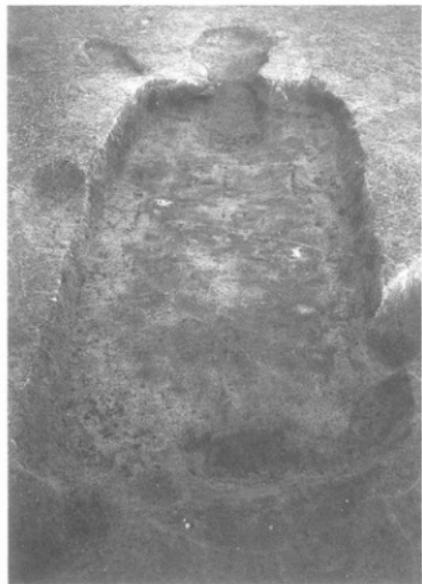


fig.121 SK 01

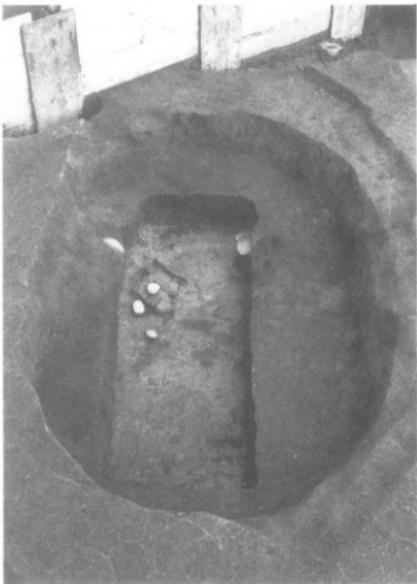


fig.122 ST 01

- 縄文時代** 第Ⅱ造構面下約1.5mで縄文時代後期の洪水層に達する。これまでの調査ではこの洪水層は平均1.5m程度の堆積が認められたが、当調査区では南半で1~2.0m、北半では1m以下との堆積であった。また、流木も南端で集中して認められたが、他の地区ではほとんど出土せず、全体で1472点を確認したにすぎない。南端の流木が集中する部分では、粘土が土手状に堆積しており、その粘土中には無数の木の根が認められた。これは一時期地表となり、樹木が繁茂していたことを表すものと考えられる。幹の直径64cm、根の長さ520cm以上の木がその場で倒れたように出土している。この根は、下の層位を貫いており、おそらくここで生えていたに違いないであろう。
- 土器** 縄文土器は、中・後期に属するもので、約150点出土している。大部分は磨滅もなく大型の破片も含まれることから、付近に堆積していたものが流されたと考えられる。縄文時代の集落は未だ発見できていないが、調査区のごく近辺に存在すると推測できる。
- 火山灰** 調査区北半の洪水堆積が薄い部分は、底面を削り去ることがすぐないため、そのためアカホヤ火山灰層の堆積が広範囲に残存している。また、これまでの調査では確認できなかったアカホヤ火山灰層の上層の堆積もわずかながら残存していた。この層位は堆積層序からみると、潮汐によるものと考えられ、縄文時代前期にはT.P. 2.5m付近まで海水準が上昇していたことが推定される。
- アカホヤ火山灰は厚さ45~50cmの堆積が認められるが、これまでの分析で1次堆積は約10cm程度と考えられ、それ以上は2次堆積と考えられている。この堆積を層位毎に順次下げていく途中で、幅1m前後の溝状の土層変化が認められた。深さは20cm以下で、北から南へ蛇行する。この蛇行は層位上面の最も低い部分を通っており、潮汐の影響を受けた層位であることから「溝筋」であると考えられる。この層位を更に下げると、これまでの調

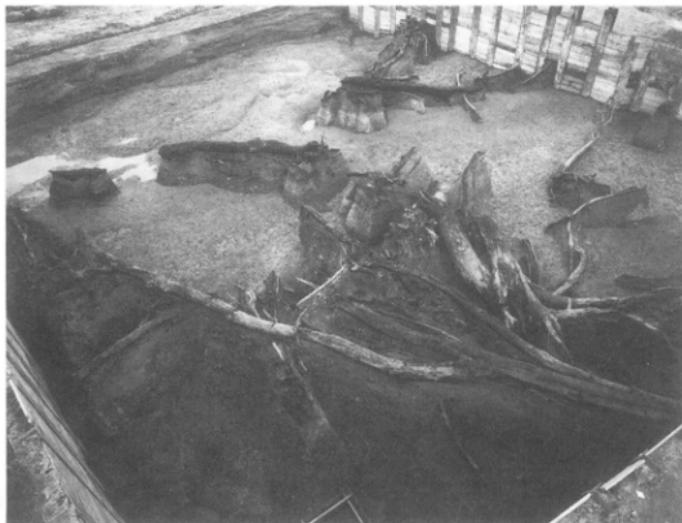


fig.123  
縄文時代流木

**漣痕** 査でも確認されている漣痕(ripple mark)が検出された。これまでには、一層でのみ確認していたが、部分的に3層で確認できた。1・2層は9~11条／10cmと細かいもので、1層目が南北方向、2層目が東西方向の波によって形成されている。小さな水たまりのなかで形成されたものであろうか。3層目の漣痕は、これまでに検出したものと同様のもので、45~56条／2mで南北方向の波によって形成されたものである。方位は正確にはN14~20°Wである。第7次調査で検出した漣痕はほぼ北を指し、第8次調査北地区で検出したものはN30°Eである。原則として、波は岸に平行に打ち寄せるから、当遺跡付近は縄文時代前期頃には、小さな弧を描く入江であったと考えることができる。

漣痕は全面に存在するわけではなく、帯状に消えている部分がある。これは上記の「溝筋」とほぼ重なることから、溝状にはなっていないが水流によって消し去られたものであろう。



fig.124 アカホヤ火山灰中の渾筋

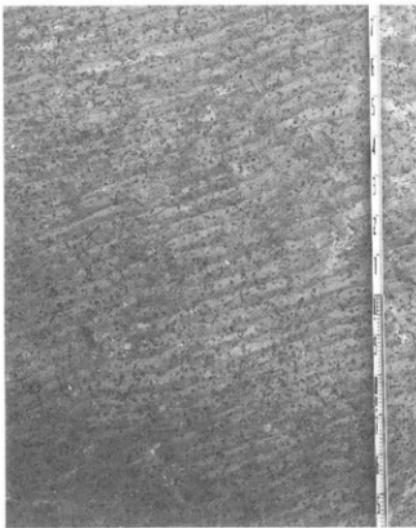


fig.125 アカホヤ火山灰中の渾痕

**流路** アカホヤ火山灰の下には、第7・9次調査で検出した流路を確認した。この流路の堆積は細砂～極粗砂で、小さな層位の連続からなっている。この層位を細かく見ていくと、山側からの堆積によるものと、海側からの堆積によるものが交互に重なっている。これは潮流作用による堆積と考えられ、この流路は海中に存在していたものと考えられる。なお、第7・9次調査では、この流路中にかなりの量の流木が存在したが、今回の検出区域にはほとんど存在しなかった。

T.P. 0.7~0.5mあたりで、これまでの調査同様ヒトの足跡を検出した。計4面で足跡を確認したが、偶蹄類の足跡も検出した。最終の足跡面では数量的にも保存状態からも、これまでで最も良好なものであった。

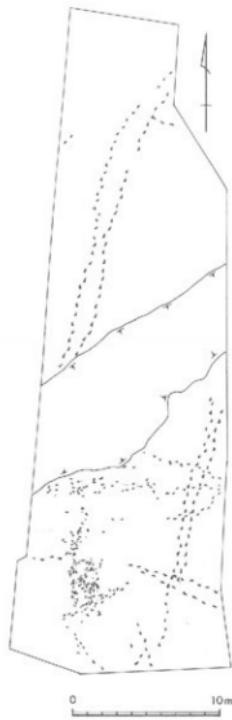


fig.126 繩文人の足跡



fig.127 繩文人の足跡

### 3.まとめ

今回の調査では、第Ⅰ遺構面とした平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構面を確認できた。これまでの調査ではおそらく同一面で検出してきた建物跡を、遺物以外で明確に時期分類できる手掛かりを得た。この面は当調査区の北方に広がっていることから、今後の調査ではよりよい成果が得られるであろう。

縄文時代の流木としてこれまで一括してあつかってきたものが、現地で生えていたものも含まれる事が明らかになってきた。今回の調査区では、数点のみがその可能性を考えられる。今後の調査でそれを踏まえれば、かなりの精度で峻別することができよう。

アカホヤ火山灰の堆積は、これまでになく広範囲にわたって残存していた。漣痕からは当時の海岸線の形態が確認できそうであるし、「湯筋」を確認したことは、その堆積環境を推定していく上で大きな収穫であった。すなわち、孤を描く小さな入江で、調査地あたりは潮汐の影響を大きく受ける浅い海中であったことが推測できるようになってきた。

この垂水・日向遺跡は発掘調査が継続するにともない、その古環境を復原し得る遺跡である。考古学的成果とともに各種の科学分析を通して、各時代の復元図を描ける日も遠くはないであろう。

## 17. 舞子浜遺跡 第5次調査

### 1. はじめに

舞子浜遺跡は、海岸に形成された砂浜上に築かれた円筒棺群と縄文時代後期の土器が散布することで知られている。この遺跡が確認されたのは、昭和35年である。舞子公園の東端で、1基の円筒棺が発見された。棺内には成人男性の入骨が遺存していた。その後、統いて2基の円筒棺が出土し、縄文時代後期の土器も同時に発見された。また、埴輪片は公園全体に散布することが確認され、円筒棺の分布が広範に及ぶと推定されていた。

その後の発掘調査では円筒棺そのものの存在は確認されなかつたが、本四連絡橋関連工事に伴う広域な松の移植が開始され、それに伴い1基の円筒棺が発見された。今回の調査は、その1基とその北方にトレーニングを入れたのみで、他の工事対象地区については後日発掘調査が実施された。



### 2. 調査の概要

1号棺 この円筒棺は、現地表面から約70cm下で確認された。しかし、昭和30年代には起伏の多い砂浜であったらしいことから、埋葬当時の深さを表すものではない。

円筒棺の検出は、上面から砂を取り除くことから始め、数度に分けて下げたが、最後まで掘形の確認はできなかった。砂浜するためにその層位を見極めることが出来なかつたのか、あるいは埋葬時に砂で覆っただけなのかさえも不明である。

円筒棺は、鰐付円筒埴輪と鰐付朝顔形埴輪を合わせ口としたもので、鰐を水平に、透かし孔が上下になるように置いている。その方向は海岸線と平行である。両端の小口と合わせ口部、透かし孔の上は粘土で丁寧に目張りされている。ただし、合わせ口部の粘土は底面に接する部分には施されていない。その粘土を取り除くと、小口は蓋形埴輪と朝顔形埴輪の口縁部で、透かし孔は鰐を打ち欠いたもので閉塞している。

円筒棺の保存は極めて良好で、発見時に蓋の一部が壊れたのみで、その他の部分は埋葬

時の姿を留めている。鰐付円筒埴輪は直径37cm、高さ114cmで、5条の突帯を巡らしている。透かし孔は最下段が半円形で、一段おきに長方形のものを開けている。鰐付朝顔形埴輪は直径32cm、高さ130cm以上のもので、6本の突帯を巡らしている。透かし孔は最下段が半円形で、一段おきに三角形のものを開けている。鰐付円筒埴輪の口縁部に鰐付朝顔形埴輪の底部を8cm程度差し込んで一基の円筒棺としている。その全長は、小口を閉塞している蓋形埴輪を含めると2.8mに及び、東が高く、西に低い。円筒棺内には木の根でできた僅かな隙間から、細粒の砂が流入し、東側で半分程度埋まっていたにすぎない。

棺内には頭部を東側にした人骨が遺存していた。頭蓋骨は良好な状態で、他の上腕骨、骨盤、大腿骨などもほぼ原位置を保っていた。頭蓋骨の下には、蓋形埴輪の裾部の破片が置かれており、枕として利用されたと考えられる。

この人骨を現地調査した京都大学理学部の片山一道助教授の鑑定は次の通りである。

- ① 仰臥伸展葬で、埋葬時の位置を保っている。
- ② 身長は140～150cmで小柄である。
- ③ 年齢30～50歳の女性である。
- ④ のっぺりとした、大陸風の顎つきである。
- ⑤ 齒は古墳時代にしてはよくすり減っており、臼歯2本は虫歯で、歯槽膿漏であった。

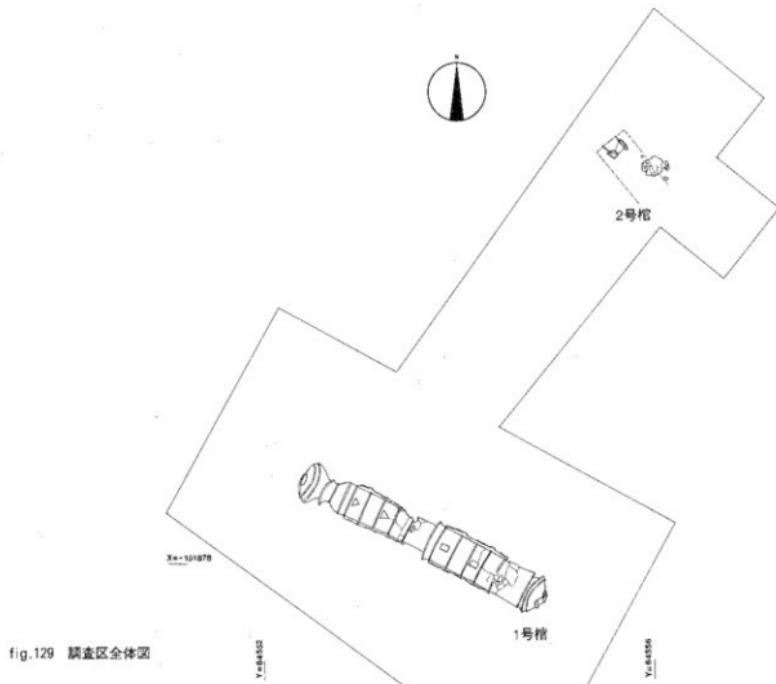


fig.129 調査区全体図

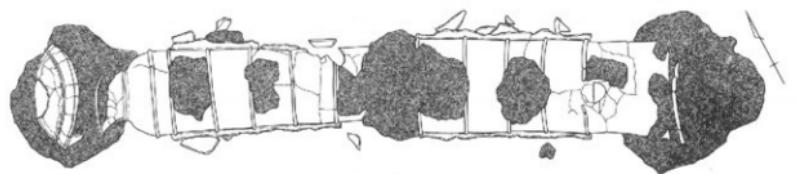


fig.131 1号棺粘土被覆状況

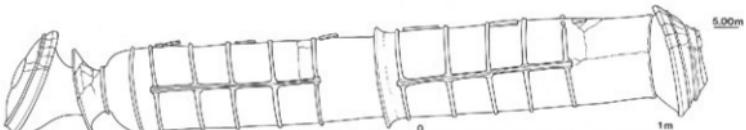
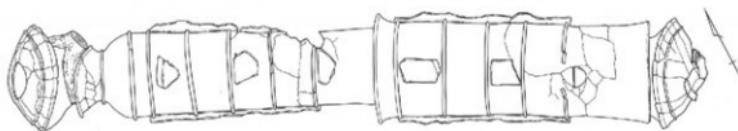


fig.132 1号棺 小口・透孔閉塞状況

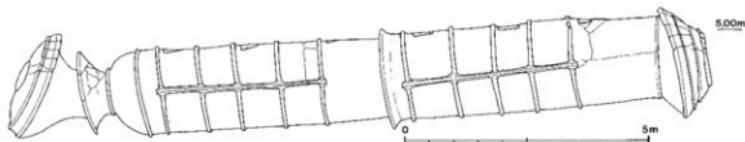
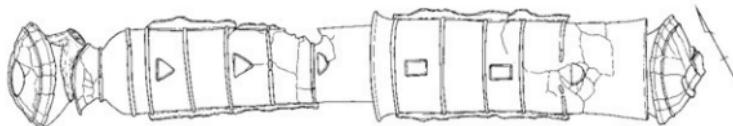


fig.133 1号棺 透孔閉塞除去



fig.134 1号棺 人骨出土状況

2号棺 1号棺の出土地点から北に向けトレンチを設定したところ、約4mの地点で円筒埴輪片及び土師器片が出土した。その直上までは擾乱土で覆われており、原位置を保つものは極少数であったが、円筒棺の一部と考えられる。土師器片はおそらく棺外に副葬されたものであろう。この土師器片の付近から、面取りを施した透明～明緑色のガラス玉3点が出土したが、螢光X線分析でクロムの含有が確認されており、古代にまで遡ることはないとされた。

### 3.まとめ

舞子浜遺跡では昭和35年の発見以来、33年ぶりの円筒棺調査である。調査した円筒棺は丁寧に閉塞されたもので、砂浜に埋葬されたためか、その保存状態は極めて良好で、埋葬手順なども明らかにし得る資料である。

棺として使用された埴輪は4世紀末のもので、史跡五色塚古墳出土のそれと類似するもので、同古墳との関係が注目される。しかし、円筒棺として利用されたのが4世紀末であるかどうかは、全く不明である。したがって、五色塚古墳あるいはその周辺に存在した古墳に立て並べられていたものを、ある時期に引き抜いて円筒棺としたものか、埴輪焼成後、古墳に立て並べられなかつたものを円筒棺にしたものかは不明である。

## まいこはま 18. 舞子浜遺跡 第7次調査

1. はじめに

昭和2年に直良信夫氏により白水瓢塚古墳で埴輪円筒棺が発見された。その後の調査により古墳の周囲には埴輪円筒棺群の存在する事実も確認されている。以来、舞子浜遺跡や五色塚古墳等からも4世紀末～6世紀の埴輪円筒棺が発見され、明石川流域から垂水丘陵付近にかけての一带は埴輪円筒棺による埋葬が行われた地域として知られる様になった。

舞子浜遺跡は4世紀末～5世紀の埴輪円筒棺群により構成される墳墓群として知られている。昭和35年に初めて埴輪凹筒棺が発見されて以来、現在11基以上が確認されている。

調査件数の増加に伴い埴輪円筒棺の検出例も多くなったが、埴墓群としての性格は未だ不明な部分が多い遺跡である。埴輪円筒棺は古墳や古墳群、周溝墓、埴輪窓跡等に伴う例が一般的であるが、舞子浜遺跡では詳細が不明である。調査資料の蓄積により、徐々に解明されると思われる。



fig.135  
調査地点位置図（明石海峡大橋舞子側作業基地  
1:2500

## 2. 調査の概要

今回は関西電力による電柱の移設に伴い壇輪棺が1基（1号棺）確認され、緊急に調査を実施した。また調査の途中に撮影の確認のため北側にトレーナーを設定したところ、棺側に平行して新たに1基の壇輪棺（2号棺）が確認され、合わせて調査を実施していた。

1号馆

120×約325cm、深さ約55cmの楕円形の墓壙に、棺の主軸を座標北から約50°東へ振って埋置されていた。棺の長さは約250cmを測り、擾乱により破壊された部分を除き、ほぼ全面を淡黄褐色シルト質粘細砂で被覆した状況で検出している。

楕形埴輪と円筒埴輪を接合して使用した、複杢式の埴輪棺である。楕形埴輪1本、円筒埴輪1本、菱形埴輪3本、朝顔形埴輪（口縁部のみ）2本の合計7本の使用が確認されている。

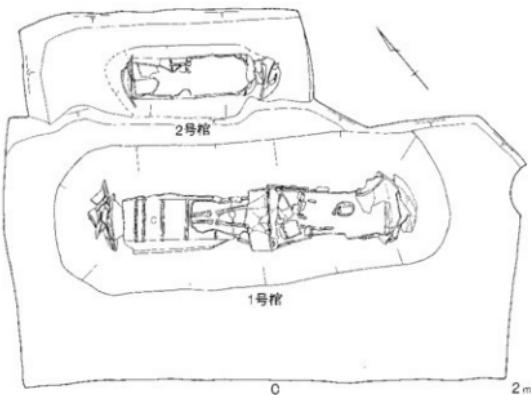


fig.136 墓輪棺出土状況全体図

東に据えた円筒埴輪に、側縁部を打ち欠いた楯面を下にした楯形埴輪を挿入し、小口は蓋形埴輪と朝顔形埴輪の口縁部を使用して3重に閉塞している。蓋形埴輪は立ち飾りを打ち欠いた2本を小口の閉塞に使用している。残りの1本は傘部を大きく2分割し小口を二重に閉塞している他、一部は楯形の底部で棺の埋置時に安定を得るために、棺の裏込め材として使用している。破壊された立ち飾りは、小口の閉塞部と棺中央の接合部にできる隙間に噛まして使用される他、透孔の閉塞や棺底部の裏込め材として使用している。朝顔形埴輪の口縁部は2本が確認されている。この多くの部分は、各小口で蓋形埴輪と合わせて三重に閉塞するために使用されている。他の破片は透孔の閉塞、棺底部の裏込め材、棺中央の接合部の噛み合わせ等に使用されている。また蓋形埴輪の立ち飾りも含め、棺に未使用の破片が楯形の底部付近から出土している。

棺内には人骨が遺存しており、頭部を東に向けて安置している。

副葬品として、棺外の北西側に鉄製刀子が埴輪棺と共に淡黄褐色シルト質極細砂で被覆されて埋納されていた。また整理中であるが、棺内からガラス小玉が2点出土している。2点とも出土位置が確認されており、人骨との対応では左手首付近と頭骨付近である。

**円筒埴輪** 口径約51cm、底径約50cm、全高約115cmを測る大型の円筒埴輪である。突帯は6条めぐり、1段目、3段目、5段目に各2個、円形の透孔が存在する。外面の調整には長くひっぱるヨコハケが使用されている。川西編年に準拠するとA種ヨコハケの新しい様相を示しており、II期の後半に比定できる。

**楯形埴輪** 口径約32cm、底径約40cm、全高約127cmを測る楯形埴輪である。楯面の後方に鰐が付属する特異な形態を取る。

楯面の形体も類例は少ない。鋸歯文を使用しておらず直線を多用した形体から鉄製楯か木製楯を模倣したと考えられるが、判断はできていない。

突帯は6条めぐり、基部から4段目までのすべてに円形の透孔が確認できる。透孔の位置は基部は前後の対角線上に2個、2段目と4段目は後後に1個が存在する他、1段目が

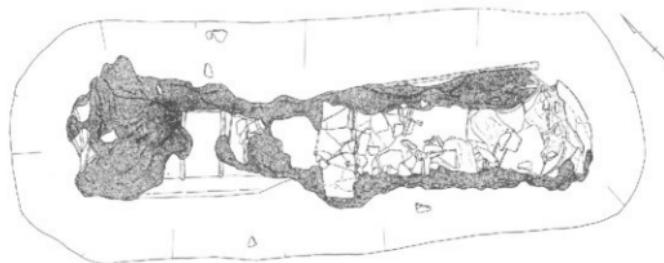


fig.137 1号棺出土状況図（粘土による被覆状況）

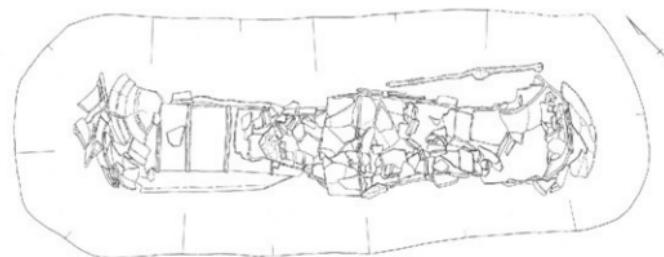


fig.138 1号棺出土状況図（被覆除去後）

斜め後方に2個、3段目が側面の対角線上に2個となっている。外面の調整はタテハケ後に多くの部分でナデ消している。

蓋形埴輪 3個体とも同タイプで同規格の埴輪である。傘部径約57cm、底径約18cm、全高（立ち飾りを除く）約30cmを測り、高橋氏の分類に準拠すれば2類である。3個体ともに傘部に赤色顔料の塗布が認められる。

朝顔形埴輪 口縁部だけの出土であるが、2個体とも同タイプで同規格である。口縁部径約66cm、頭部径約31cm、口縁部高約18cmを測り、大型の朝顔形埴輪であることがわかる。

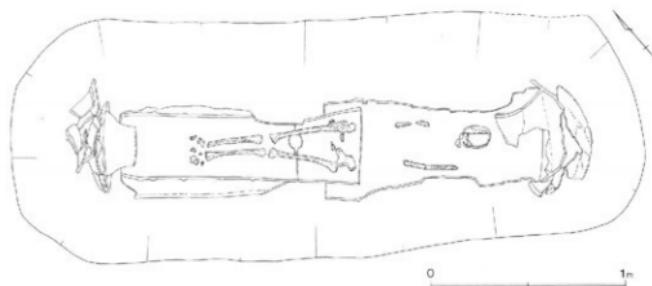


fig.139 1号棺人骨出土状況図



fig.140 1号棺人骨出土状況



fig.141 1号棺人骨出土状況

## 2号棺

朝顔形埴輪を使用した単棺式の埴輪棺である。棺本体の他に口縁部だけの朝顔形埴輪が1本確認されており、合計2本の埴輪が使用されている。棺の主軸は座標北から約50°東へ振り、口縁部を東側において埋置している。墓牘は検出が困難だが存在する。

棺の全長は約130cmを測り、西小口を含む多くの部分を淡黄灰褐色シルト質極細砂で被覆されていた。

東小口は頸部で破碎し別個体の口縁部を使用して閉塞しており、西小口は基部を破碎しその破片を使用して閉塞している。

人骨は遺存していないが、副葬品として棺内のはば中央部から水晶製勾玉1点、碧玉製管玉2点の他、整理中だが現時点ではガラス小玉5点が出土している。

## 朝顔形埴輪

棺の本体に使用された朝顔形埴輪は頸部で打ち欠かれ、口縁部は出土していない。底径約35cm、頸部径約22cm、頸部までの高さ約103cmを測る。小口の閉塞に使用された朝顔形埴輪とは異なるタイプである。

突帯は6段めぐり、1段目と3段目に逆三角形の透孔が各2個確認される。また基部の斜め前方に円形の穿孔が確認される。外面の調整はタテハケ後にナデ消している。

閉塞に使用された朝顔形埴輪の口縁部は復元径約66cmをはかる。1号棺で使用された朝顔形埴輪とは、同タイプで同規格の製品である。

fig.142  
2号棺出土状況図  
(粘土被覆状況)

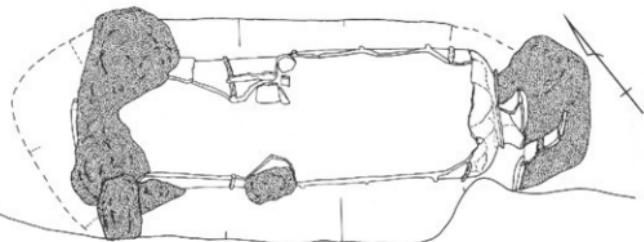


fig.143  
2号棺出土状況図  
(被覆除去後)

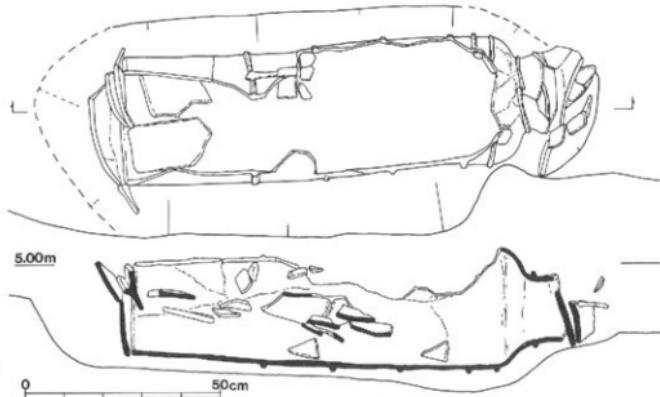




fig.144 1・2号棺出土状況

### 3.まとめ

今回の調査では埴輪棺が2基検出された。2基の関係は同時埋葬とするか、若干の時期差を認めるか現時点では判断できない。

棺底の比高差は約50cm存在するが、主軸をほぼ同方向にとり西小口もほぼ揃えて埋葬している。2号棺の規模から判断すると小児棺の可能性が高く、1号棺被葬者との関係でぐ棺側に埋葬したとも考えられる。

朝顔形埴輪の口縁部を観察すると、3個体とも外面部が荒れておらず内面の荒れがめだつ。同じ意味で蓋形埴輪は3個体とも傘部の表面が裏面と比較して荒れしており、円筒埴輪は外面部が内面と比較して荒れている。これらの結果から、古墳からの転用の有無を別にしても埴輪が立てられた状態で風雨に晒されていた時期の存在した可能性は考えられる。

II期の埴輪を使用した古墳では近隣に五色塚古墳、白水瓢塚古墳、松本古墳からも埴輪円筒棺が確認されている。この事実から、明石川流域から垂水丘陵一帯の地域を同じ墓制の習俗をもつ集団としてまとめることが可能である。舞子浜遺跡の性格を検討すると共に、より広い地域を視野にいたる同じ墓制習俗を持つ集団としての比較検討も必要であろう。

## 19. 舞子浜遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

舞子浜遺跡は、神戸市西部の明石海峡に面した海岸線沿いにあり、4世紀末～5世紀初頭に築造された史跡五色塚古墳とは、約1km西に隔たった地点に位置している。現況では、北側をJR神戸線、南側を国道2号線が走る、松林の生い茂る公園となっている。

また、公園内を南北に跨ぐようにして、本四連絡架橋の明石海峡大橋の工事が現在、進んでいる。

昭和35年に公園東端の国道近くから、古墳時代の埴輪棺が発見され、中から成人男性の入骨が出土した。その後、公園の整備工事等でいくつかの埴輪片が確認され、舞子浜円筒棺群として知られていたがその詳細は明らかでなかった。

近年、明石海峡大橋の橋脚が当公園内に造られ、それに関連する工事が行われるようになり、平成5年には、それに伴う松の木の移植工事に伴う調査で、女性人骨を納めた埴輪棺（第5次調査）が、また電柱移設工事に伴う調査で人骨、玉類と鉄刀を埋葬した埴輪棺2基（第7次調査）が発見されている。

今回の調査は、平成5年11月末に雨水幹線工事に先立つ松の木の移植工事の立会で埴輪棺が発見されたため、神戸市教育委員会と施工者である神戸市下水道局が協議した結果、今年度は、公園内の雨水幹線敷設部分約3分の1について調査を行うことになった。

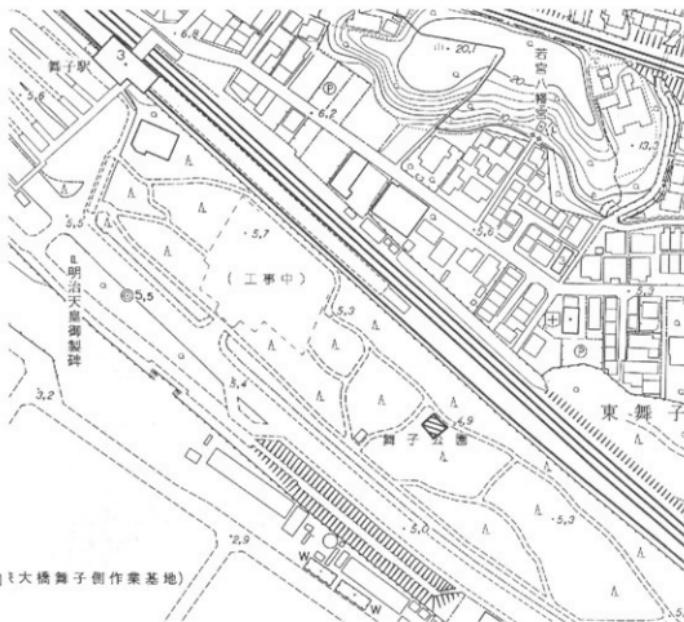


fig.145  
調査地点位置図ミ大橋舞子側作業基地)  
1 : 2500

2. 調査の概要　調査の結果、遺存状態の良好な2基の埴輪棺と、正立した状態で発見された円筒埴輪1本、かつて埴輪棺が存在していた可能性が高い地点1か所、流路1条が発見された。また、発見された2基の埴輪棺内には人骨が遺存していた。

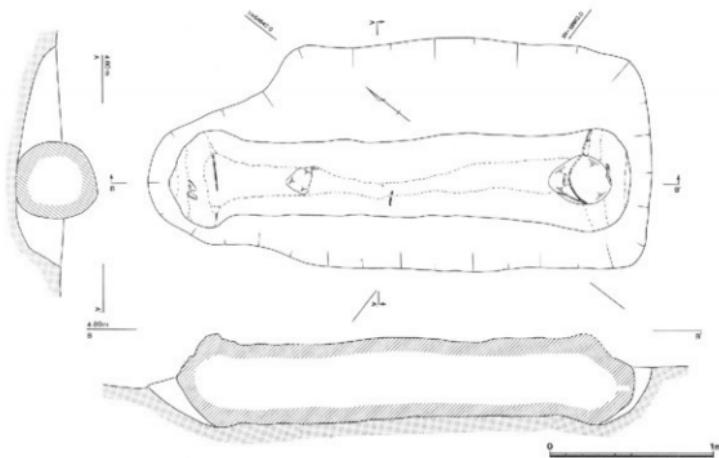


fig.146 1号棺粘土被覆状況

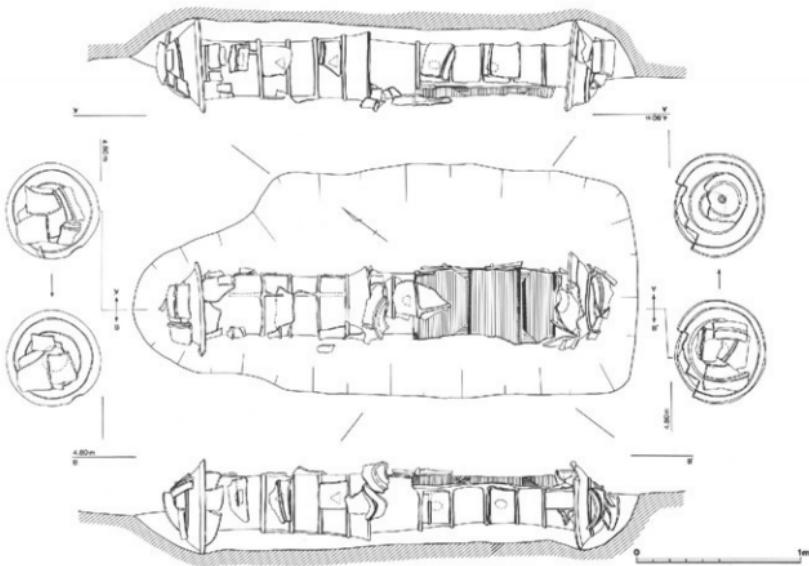


fig.147 1号棺出土状況

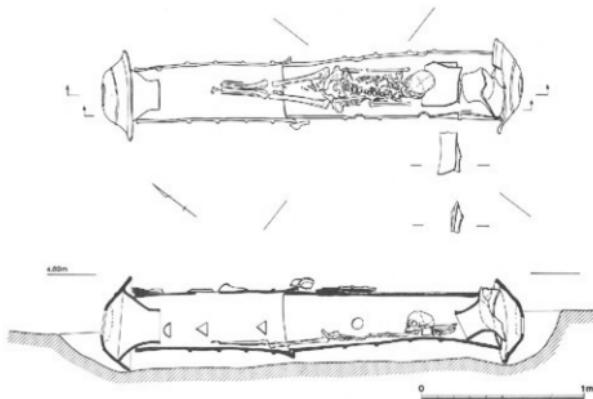


fig.148 1号棺人骨出土状況

1号棺　　円筒埴輪と盾形埴輪の2本を組み合わせて棺とし、棺の両端は蓋形埴輪を使って閉塞していた。また、埴輪の接合部と透穴のあいている部分、閉塞に用いた蓋形埴輪の軸受けの基部は、別の円筒埴輪を割った破片と土師器の高坏坏部で塞いでいた。

盾形埴輪は、第7次調査で発見されたものとよく似ているが、鰐を持たない点が異なっている。盾面の文様は、現在のところ全国的にも類例がないものである。

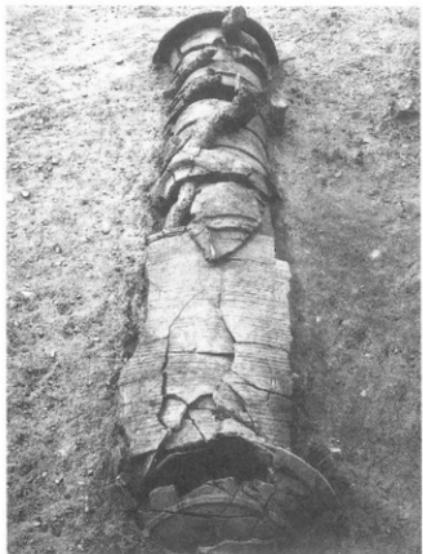


fig.149 1号棺出土状況



fig.150 1号棺人骨出土状況

また、埴輪棺の周りを粘土で分厚く包んで保護（被覆粘土）しており、棺内への砂の流入は少なかった。このため、棺内には頭から踵までの人骨が一体分、良好な状態で残っていた。

被葬者は、身長140～150cm、死亡推定年齢30～60歳の男性で、仰臥伸展葬である。骨の遺存状態も極めて良好で、骨のつながり具合が明瞭である。また、この遺体は別の埴輪の破片を枕にし、右手を腰の下に、左手を腰の上においている。納棺の時に膝の部分を紐などで縛っていた状態がうかがわれる等、当時の埋葬状態を知ることのできる貴重な資料である。

#### 2号棺

朝顔形円筒埴輪を2本組み合わせて棺としており、棺の小口部分と透穴のあいている部分は、朝顔形埴輪の口縁部を打ち欠き、その破片で閉塞していた。

棺内から頭骨、上腕骨、骨盤、背骨の一部、大腿骨などの人骨一体分が発見された。

身長140cm以下、死亡推定年齢20～40歳の女性で、仰臥伸展の状態で葬られている。

いずれの棺内からも遺物は確認されなかった。

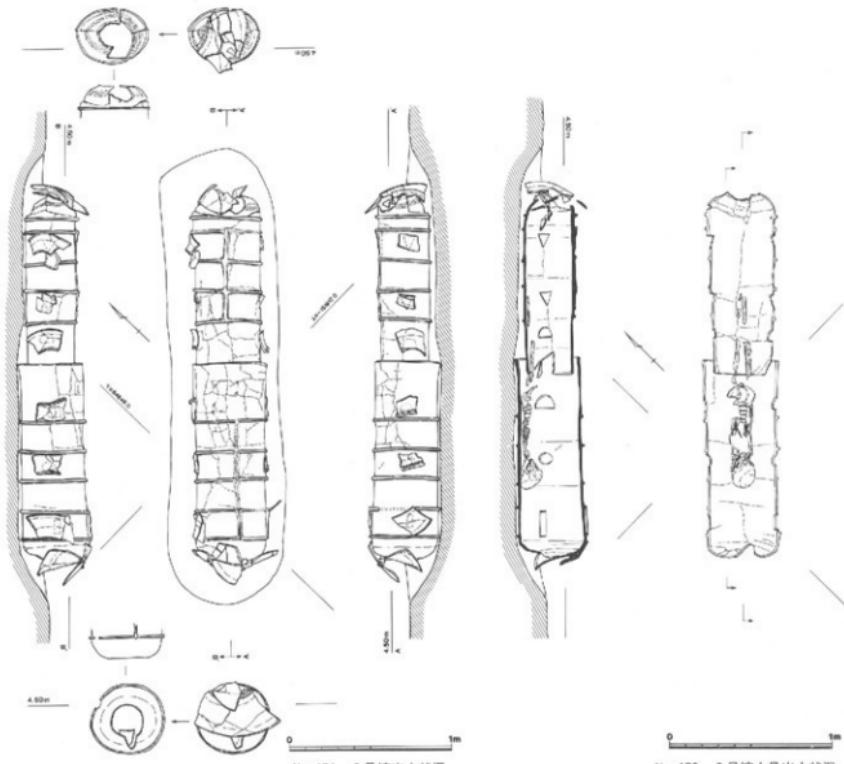


fig.151 2号棺出土状況

fig.152 2号棺人骨出土状況



fig.153 2号棺出土状況



fig.154 2号棺人骨出土状況

#### 正立した埴輪

調査地の中央やや西よりで、正立した状態の円筒埴輪が1本出土した。当初は、埴輪が後後に壊され、その一部が立っているように見えるものと考えていたが、立っている部分が基底部であり、その中に胴部が落ち込んでいることから、正立した埴輪が壊れながらも、原位置を保って出土していることが明らかとなった。

この埴輪が確認された付近は、調査地内で遺構面が最も高く、当時の地表面と考えられる黄褐色細砂上に、やや褐色がかかった細砂が埴輪付近に5~10cm程度の厚さで分布しており、人工的に盛られた砂と判断される。

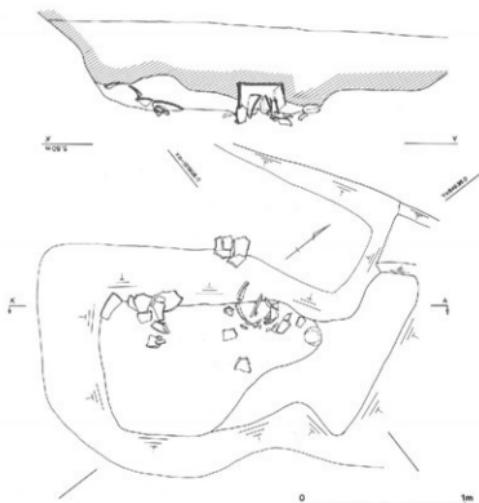


fig.155 正立した埴輪出土状況図

この遺構の西・南側には、埴輪棺が発見されないことや、後述する流路が墓域を区画する溝の役目があると考えるならば、墓域を明示するための標識である可能性はあるが、来年度の北側の調査結果を重ね併せて再考したい。

#### 流 路

調査地の中央やや東よりを、北東～南西方向に流れる流路が検出された。堆積土の下層からは、埴輪片や葬送儀礼の際に使用したと思われる土師器高环等の遺物が出土した。特に正立した埴輪が出土したすぐ横の流路肩部からは、埴輪片が多く出土し、あたかも壊れた埴輪の上半部が流路の斜面に流れ込んだ状態であった。これについては、今後の接合・復元作業によって明らかにしてゆきたい。また、流路は、墓域を区画する溝の可能性も想定されるが、これも来年度の調査と併せて考えることにしたい。

#### 埴輪棺 ?

調査区の北東端では、細片化した埴輪が集中して出土した。これらは全く原位置を留めていなかったが、付近から人骨らしき骨片が発見されたり、供獻された土器（ただし、乳児などを納めた土器棺の可能性はある）の発見等から、埴輪棺の存在した可能性が濃厚である。

#### 埴輪棺の年代

棺に使用された埴輪は、4世紀の終わりから5世紀初め頃のものと考えられるが、棺として転用された時期は、明らかでない。しかし、1号棺の東側小口部分を塞ぐ蓋形埴輪の軸受けの基部は、埋葬時に使用されていたと想定される土師器の高环部を用いており、現在の段階では、埴輪の製作時期とさほど隔たるものではないと考えられる。

また、これらの埴輪は、古墳に樹立していたものを抜き取って棺に転用したのか、未使用のものを用いたのかという点については、現在のところ判らない。しかし、発見された埴輪が、史跡五色塚古墳に樹立していたものと時期的にはほぼ同じであること。また、昭和5年に京都大学の梅原末治氏を中心となって調査した歌敷山古墳（調査地から東へ約500m）でもほぼ同時期の埴輪が出土していることから、今後、詳細な比較検討を行い、その関係を探りたい。

#### 3.まとめ

今回の調査で判明したことまとめると以下の通りである。

- ① 平成5年4月以降、本四連絡架橋に関連した工事に伴う発掘調査で埴輪棺は6基確認されている。今回とそれ以前のものをあわせると10基前後の埴輪棺が舞子公園付近から発見されており、未発見のものを考慮すると、公園内はかなり規模の大きい古墳時代の集団墓地であったと考えられる。
- ② これまでの調査によって、埴輪棺には、円筒埴輪と盾形埴輪を組み合わせたものと円筒埴輪・朝顔形埴輪を組み合わせたものがあり、前者の方が副葬品の存在や、埴輪全体を粘土で包むなど丁寧な葬り方をしており、同じ地域の墓地に埋葬される人にも、階層差が窺えることが判明した。
- ③ 墓地2基から人骨が出土し、その1基のものは、遺存状態が極めて良好で、第1級の資料である。また、埴輪片を枕にし、右手を腰の下に、左手を腰の上においている。納棺の時に膝の部分を組などで縛っていた状態がうかがわれる等、当時の埋葬状態を知ることのできる貴重な資料である。
- ④ いずれの人骨も当時の人としては身長が低く、体格は華奢で、のっぺりした顔立ちの人々であった。これらは、学術的に興味のある個体である。

## 20. 白水遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

神戸市西区伊川谷町潤和において、白水地区の土地区画整理の事業が計画され、その事業区域内において平成2年3月と平成3年11月の2度にわたって試掘調査を実施した。その結果、沖積地部分では、古墳時代と中世の遺物包含層が、丘陵部分では平安時代の遺物包含層が確認された。今年度は、沖積地部分に計画されている街区道路部分に関して調査を実施した。

白水遺跡は、明石川の支流である伊川と永井谷川の合流する地点付近の伊川右岸に立地する。遺跡の範囲は、これらの川の沖積地部分と、その背後の丘陵部分に分けられる。

沖積地のすぐ北側には北別府遺跡、南側には潤和遺跡・新方遺跡、伊川の対岸には南別府遺跡が存在する。背後の丘陵上には、白水瓢塚古墳・延命寺古墳が存在する。

これまでにこの遺跡内では、平成4年度に倉庫建設に伴って調査が実施されており、弥生時代後期後半の竪穴住居と平安時代後期の溝が検出されている。また付近の道路建設の際に不時発見ではあるが、古墳時代中期の小形丸底壺とその中に入れられた滑石製の有孔円盤が出土している。



### 2. 調査の概要

#### 第1トレンチ

第1トレンチでは、古墳時代から近世・近代にかけての遺構・遺物が確認された。上層より、耕土、洪积砂、近世～近代耕土、近世耕土、茶灰色粘質土（第1遺構面ベース）、黒茶色粘質土、濃灰茶色粘砂土（第2遺構面ベース）、濃茶灰色砂質土、灰茶色粘砂土、黒灰色疊混り粘質土、茶灰色細砂となっており、茶灰色粘質土から濃茶灰色砂質土ま

での層位と黒灰色礫混り粘質土から古墳時代の遺物が検出された。

**第1 遺構面** 古墳時代と中世～近世の落ち込み、近世～近代の河道、時期不詳の土坑（SK 01）、ピットが確認された。

**第2 遺構面** 古墳時代中期後半の溝（SD 01）、流路、時期不詳の土坑（SK 02）、ピットなどが確認された。

**流 路** レンチの中央部で確認された北東から南西の流れをもつ流路で、検出面での規模は、幅約7m、深さ約1.6mを測る。流路内からは5世紀後半～末葉の土器と共に、鍬・杭などの木製品も出土した。

**遺 物** 古墳時代の遺物は、第1・2 遺構面共中期後半のもので、須恵器壺・甕、土師器高壺・甕・壺が中心である。

中世遺物は、落ち込み内より16世紀頃の擂鉢などが出土しているものの、全体的に少ない。近世遺物は、落ち込み・河道・旧耕土内より確認されたが、近世後半のものが大半である。

**第2 レンチ** 第2 レンチでも第1 レンチと同様に2面の遺構面が確認され、いずれの遺構面も古墳時代中期後半の遺構面と考えられ、時期差はほとんどみられない。

第1 レンチと大差がなく、上層より、耕土、中世耕土、灰色粘質土、茶灰色粘質土（第1 遺構面ベース）黒茶色粘質土、濃灰茶色粘砂土（第2 遺構面ベース）となっており、灰色粘質土から濃灰茶色粘砂土までの層位から古墳時代の遺物が検出された。

**第1 遺構面** 大規模な土器溜り（SX 01）をはじめ、溝・ピットなどが確認された。

SX 01 径約3.5mの浅い落ち込みの中に、土器が密集しており、その集中範囲は径約2mである。土器類はいずれも土師器で、甕・高壺・甕・小型丸底甕などの器種である。土器の他に、鉄製品（鉤・刀子など）、滑石製品（白玉・勾玉・有孔円板など）が出土している。

SX 02 土師器甕が横倒しの状態で検出された遺構で、甕内より白玉が数点検出された。

SX 03 SX 02 のすぐ横で確認された浅いピット状遺構で、小型丸底甕が立った状態で検出された。



fig.157 第2 レンチ全景



fig.158 SX 01

第2遺構面 溝（SD 02）、土器溜り（SX 05～13）が確認されている。SD 02は時期不詳であるが、土器溜りについては第1遺構面のもの（SX 01～04）と時期差はほとんどみられない。

土器溜り SX 05・06については落ち込みがあるものの、それ以外は更地に土器及び土器片が密集している。器種組成は各土器溜りによって異なるが、須恵器壺、土師器甕・壺・小型丸底壺・高壺、製塙土器などで構成されている。

遺物 第2トレンチの遺物は、そのほとんどが古墳時代中期後半（5世紀後半～末葉）のもので、他のものとしては、中世～近世の遺物が耕土・旧耕土中より出土した程度である。

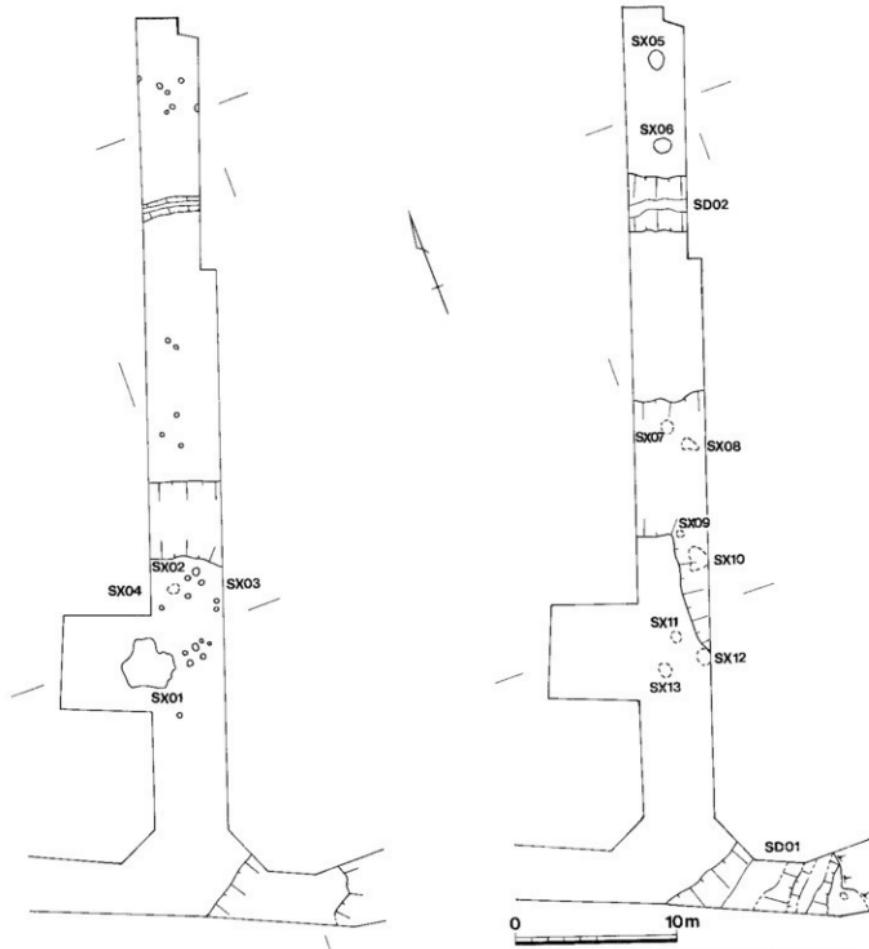


fig.159 第1・2トレンチ第1・2遺構面平面図

- 第3 トレンチ** 第3 トレンチの基本層序は上から、耕土・暗灰黄褐色砂混じりシルト（近世耕土）・暗灰黄褐色砂混じりシルト（近世耕土）・暗灰色粘質シルト・明淡黄褐色砂質シルト（第1 遺構面ベース）・灰色シルト（第2 遺構面ベース）・淡灰黄色粘質シルト（第3 遺構面ベース）・明灰色シルト・灰色砂質シルト・暗灰色シルト混じり砂（第4 遺構面ベース？）・砂礫となる。但しトレンチの中央から東では第1 遺構面ベースとなる明淡黄褐色砂質シルトは存在せず、中央部では、近世耕土直下で砂礫層となる。また西半では、第3 遺構面ベースの淡灰黄色粘質シルトの下は砂礫層で第4 遺構面に相当する層は存在しない。
- 第1 遺構面** 第1 遺構面は、トレンチの西半のみに存在し、土坑5基（SK 01～05）が検出されている。SK 01・02はいずれも直径170cm・深さ80cmの円筒形の土坑で、水田の水溜用の施設と考えられる。出土遺物よりSK 01・02は18世紀、SK 04・05は16世紀の遺構と考えられる。SK 03は遺物が出土していない為、時期は不明である。
- 第2 遺構面** 第2 遺構面では、トレンチの東半で掘立柱建物2棟以上の柱穴が確認された。その建物の範囲は調査区の北側に延びるため、調査区を拡張して、建物の規模と柱穴の組み合わせを確認した。その結果掘立柱建物は4棟（SB 01～04）確認されているが、限られた範囲での調査であったため、柱穴群の全体を確認することができず、建物としてまとまっている柱穴もある。



fig.160 第3 トレンチ 第2 遺構面平面図 (1 : 500)

- SB 01** 5×3間以上の掘立柱建物で、北側に伸びる可能性がある。規模は東西方向が10.4m、南北方向が5.5m以上である。
- SB 02** 3×3間以上の掘立柱建物で、北側に伸びる可能性がある。規模は東西方向が7.4m、南北方向が5.9m以上である。
- SB 03** 3×3間以上の掘立柱建物で、北側に伸びる可能性がある。規模は東西方向が5.8m、南北方向が7.2m以上である。
- SB 04** 6×3間以上の掘立柱建物で、北側に伸びる可能性がある。規模は東西方向が13.4m、南北方向が5.9m以上である。南辺の内の1間に張出がある。
- 柱穴には、地鎮めのために須恵器の椀や土師器の小皿を入れたものや、柱を抜いた後に瓦や土器をいれたもの、建物の柱の補修の際に拳大から拳倍大的河原石を詰めたものがある。
- これらの遺物から、第2 遺構面で検出された遺構の時期は、12世紀前半と考えられる。

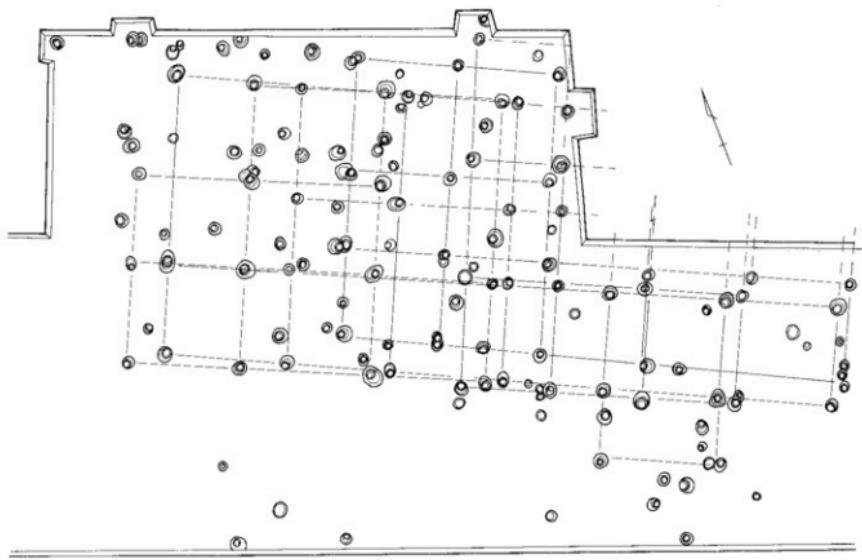


fig.161 SB 01 ~ 04 平面図 ( $S = 1 : 100$ )

**第3造構面** 第3造構面では、掘立柱建物1棟SB 05と溝6条(SD 01～03・05～07)、自然流路1条(SD 04)が確認された。

**SB 05**  $2 \times 3$ 間以上の掘立柱建物で、規模は東西方向が4.1m、南北方向が7.2m以上である。柱間は東西方向が1.9m、南北方向が2.2mである。調査地内では $2 \times 2$ 間分の柱穴が検出されたが、その規模を確認するために西端の南北列の南側の延長上にトレチを設定した。その結果もう1間南に延びることが判明した。北側は宅地のため規模確認のトレチを設定できず、全体の規模は確定できなかった。この建物の西側には雨落ち溝と考えられる溝(SD 06)が沿っている。

規模確認のためのトレチ内で、SB 05の南に大きな落ち込み(SX 01)が確認された。これは第1次調査時に見つかっている11世紀の大溝の続きと考えられる。

**SD 02** 幅90cm、深さ30cmの南北方向の溝で、断面の形状は逆台形を呈する。埋土内から須恵器の枕・土師器の枕・皿・壺等が出土している。これらの遺物から第3造構面で検出された造構の時期は、11世紀前半と考えられる。

第3造構面より下層に関しては断ち割り調査を実施した。その結果造構は確認されなかつたが、第1次調査時に弥生時代後期の竪穴住居が検出された層に対応すると思われる暗灰色シルト混じり砂の上面で噴砂が確認された。この噴砂は下層の砂礫層から吹き上げており、暗灰色シルト混じり砂上面で広がっていることから弥生時代後期の地震時のものと考えられる。

**第4 トレンチ** 第4 トレンチの基本層序は上から、耕土・暗灰黄褐色砂混じりシルト（近世耕土）・明灰色粘質シルト（近世耕土）・暗灰色粘質シルト・明淡黄褐色砂（第1造構面ベース）・灰色粘質シルト（第2造構面ベース）・黒褐色粘土・青灰色粘土となる。

但し今年度の調査は、第2造構面まで実施し、それ以下の層に関しては、側溝とサブトレンチによって確認したのみである。

**第1 造構面** 第1 造構面では、掘立柱建物1棟（SB01）と溝3条が確認された。

**SB01** 東西4間、南北4間の建物である。調査地内では東西4間、南北3間分が検出されたが、南北方向は調査地外に延びる可能性があったため、柱列の並びを延長して確認した。建物の規模は東西9.7m、南北9.0mで、柱穴は径30cm、深さ20cmである。東辺の柱列の中央には柱が存在しない。

**SD03** 調査地の東端で検出された溝で、幅1m、深さ0.5mを測る。SB01と同じ方向で流れしており、この建物に付随する溝と考えられる。溝内より土師器の脚付皿3枚が溝内に置かれた状態で出土している。

出土遺物より第1 造構面の時期は11世紀代と考えられる。

**第2 造構面** 第2 造構面では水田が確認された。水田の形状は何れも不定型である。6m幅のトレンチの為、全体が検出されたものではなく、1枚の面積は明らかでない。畦畔は幅40cm、高さ10cmと小さい。

この水田を覆っている洪水砂から6世紀後半の須恵器が出土していることから、古墳時代後期の水田と考えられる。

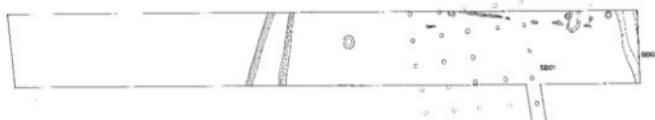


fig.162 第4 トレンチ第1 造構面平面図



fig.163 第4 トレンチ第2 造構面平面図

### 3.まとめ

今回の調査では、第1・2 トレンチでは古墳時代中期後半の遺物・遺構が多く確認された。特に滑石製品を含む土器溜まりは、祭祀に伴うものと考えられ貴重な資料である。この調査区は伊川に近く、小さな流路が数条流れていたことから水辺の祭祀と考えられる。

第3・4 トレンチでは11世紀代と12世紀代の掘立柱建物が数棟確認された。この時期の白水地区は伊川谷莊に含まれ、中世のこの地域を考える資料となる。

また、第4 トレンチでは古墳時代後期の水田が確認された。今後この時期の集落も付近で発見されることと思われる。

しらみずひきごづか  
21. 白水瓢塚古墳

1. はじめに

白水瓢塚古墳（妻塚古墳）は、伊川右岸の標高約60mの薬師山山頂に位置し、前方部を西方に向いた前方後円墳である。海岸からの直線距離は約3.5kmである。当古墳は、昭和初期直良信夫氏によって詳細な踏査記録が報告されている。それによると、墳丘に3列の埴輪列が巡ることや、埴輪列の中に楕円形円筒埴輪が混在することが報告されている。また、古墳の周囲には合口式の埴輪円筒棺が約100基存在すると推定している。

また、昭和43年には兵庫県教育委員会によって墳丘測量も実施されており、これまで夫塚古墳と呼ばれてきた地点では、5世紀末～6世紀初めの須恵器やガラス玉が採集されている。

昭和62年度には宅地造成計画に先立って南側の丘陵斜面地で試掘調査が実施され、あわせて白水瓢塚古墳の範囲を確認するための発掘調査が初めて実施された。この結果、墳形はやや歪んだ円形の後円部に、まっすぐ延びる前方部がつくられた、いわゆる柄鏡形の前方後円墳で、全長57m、後円部径31m、後円部高さ5m、前方部幅16m、前方部高さ2mであることが明らかとなっている。また、古墳の周囲の平坦面では、埴輪円筒棺2基、6世紀初めの小型円墳（木棺直葬墓）1基が確認されている。

この調査の後、白水瓢塚古墳本体については現地保存することを前提とした協議が地権者と進められ、後円部裾から5m、前方部端で幅43mの盾形の範囲で保存区域線を申し合わせている。

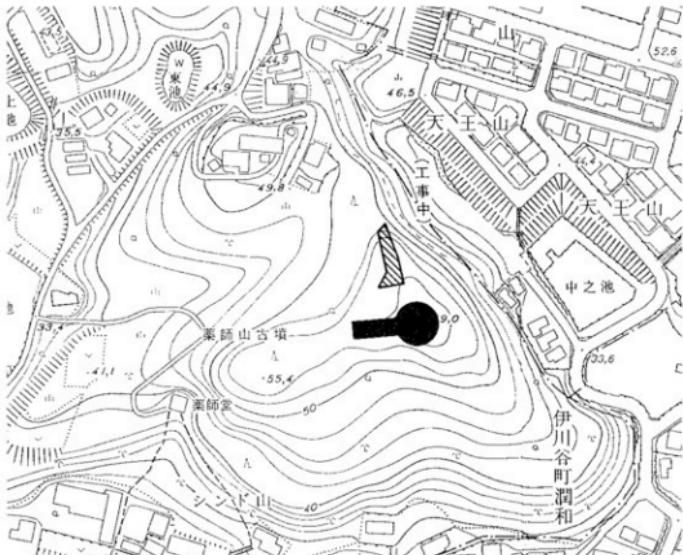


fig.164  
調査地点位置図  
1 : 2500

昨年度は白水瓢塚古墳の保存範囲外での北側から東側にかけての丘陵斜面について試掘調査を実施し、埴輪円筒棺を含む埋蔵文化財の存在を確認している。

今回の調査は住宅開発に伴う発掘調査で、昨年度試掘調査を実施した範囲のうち、27トレンチと28トレンチの間を対象とした白水瓢塚古墳くびれ部の北側丘陵斜面のうち、字シンド山6-11、6-12番地を調査の対象としている。

## 2. 調査の概要

調査区は幅約7m、長さ約25mで、白水瓢塚古墳の後円部から北方へ延びる尾根筋近くにある。確認できた遺構には、昨年度28トレンチで検出した埴輪円筒棺3があり。この他には全く遺構は確認できなかった。

**埴輪円筒棺3**　調査区内の上段平坦面から斜面へと傾斜の変換する地点で、表土除去後直ぐに検出された。長軸147cm、短軸54cm、深さ約20cmの楕円形の掘形に納められた埴輪円筒棺で、楕円形円筒埴輪1本を棺身とし、主軸方向はN66°Wで、等高線に並行するように横位置に据えられている。楕円形円筒埴輪の口縁部が北西側で、底部が南東側で埋められている。棺身の据え付けには、掘形壁に沿って朝顔形円筒埴輪の口縁部を主とする埴輪片が使用され、両小口の閉塞にも同様の破片が使用されている。また、被葬者の頭位方向は明確にできないが、棺身底部のレベル差や閉塞・被覆状況から南東方向と推定できる。

また、この埴輪円筒棺3の下位斜面約5mの範囲では、保存状態の良好な埴輪片多数と石材が流土中より出土している。埴輪円筒棺3から流れたものと推定できる。

さらに、調査区上段の西半斜面部でも、保存状態の良好な埴輪片と石材が流土中より出土している。埴輪円筒棺1から流れたものか、あるいは近くに未発見の埴輪円筒棺が存在するものと考えられる。

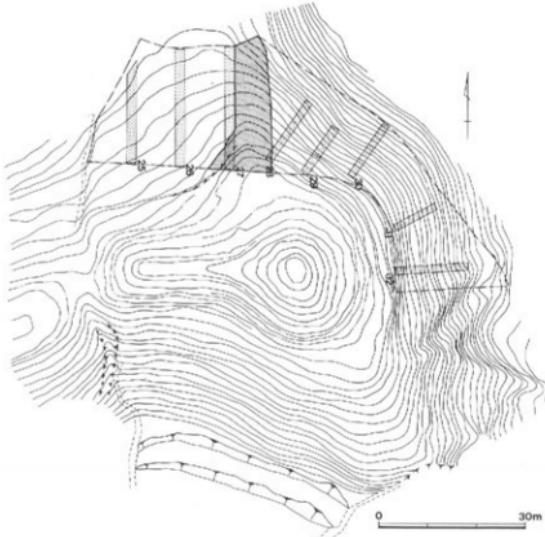


fig.165 調査区位地図

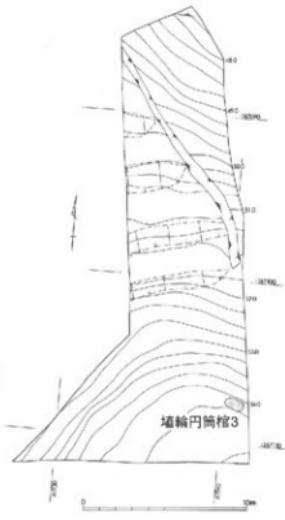


fig.166 調査区全体図

これらの埴輪片が多く出土した上段から斜面にかけての部分より下位の丘陵斜面部分について、開墾による段整形を確認しており、地山直上から近世以降の陶磁器・瓦片が出土している。

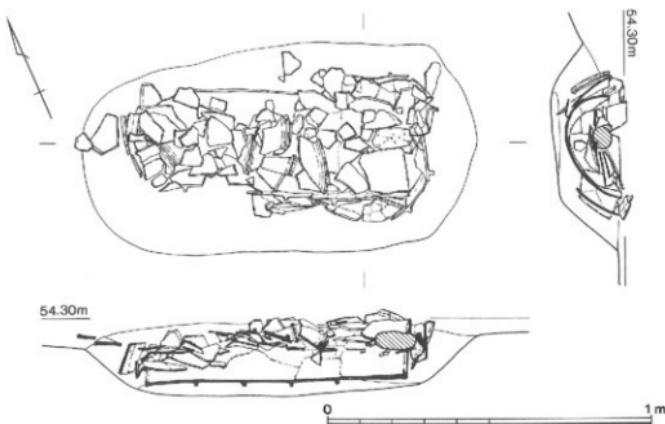


fig.167 塚輪円筒棺 3 平・断面図



fig.168 塚輪円筒棺 3 出土状況



fig.169 塚輪円筒棺 3 出土状況

**出土遺物**　出土遺物の大半は、上述したように古墳時代前期後半の埴輪で、その他には埴輪円筒棺1の小口部閉塞に使われたものと同様の石英斑岩、近世の陶磁器などがある。

fig.170-1は埴輪円筒棺3の棺身で、口縁部長径35.0cm、短径31.5cm、高さ82.6cmの楕円形円筒埴輪である。内外面ともに継刷毛調整で仕上げられる。

fig.170-2～5は埴輪円筒棺3の閉塞に使われたもので、いずれも朝顔形埴輪の破片である。2は口縁部で、口径66.0cm、残存高39.6cmである。3は肩部である。

fig.170-4は円筒部で、三角形の透孔があり、復元最大径49.6cmである。fig.170-5も円筒部で、復元最大径42.4cmである。直良信夫氏がかつて報告された壺形スカシをもつ点が特徴的である。

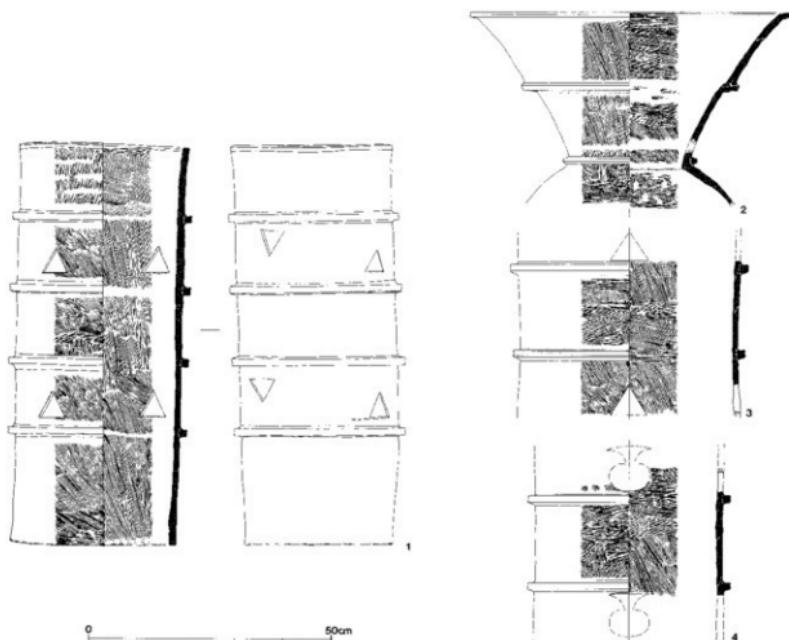


fig.170 円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図

### 3.まとめ

今回確認した埴輪円筒棺3は、これまでに確認した合口式の2基のものとは形態が異なり、楕円形円筒埴輪1本のみで構成されるものであった。過去に直良信夫氏が推定されたように、白水瓢塚古墳の周囲の平坦面には、もともとかなりの数の埴輪円筒棺が埋められていた可能性は高いと考えられる。

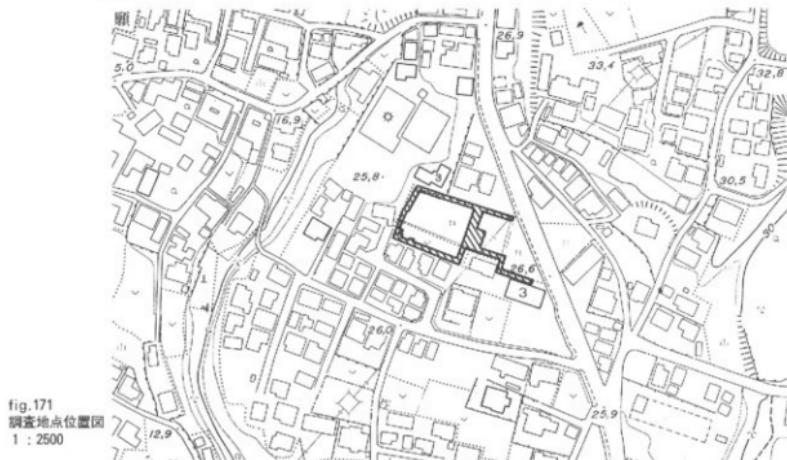
さらに、今回発見された埴輪は、壺形スカシのある円筒部をはじめとして、埴輪の変遷を考えていく上で興味深い資料である。

## 22. 高津橋・岡遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

高津橋・岡遺跡は河川に挟まれる半島状の丘陵先端に位置する。これまでに3次の調査が行われ、弥生時代中期の埋葬施設（壺棺）、堅穴住居、奈良時代の掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物などの存在が確認されている。

今回、区画整理事業にともなう道路・擁壁建設の計画される部分について発掘調査を行った。



### 2. 調査の概要

調査の結果、弥生時代～平安時代の遺物包含層と遺構面1枚が確認され、飛鳥時代・奈良時代の遺構が検出された。

南トレント東部では遺物包含層（3a層）が20cm程度と比較的厚く残存していたが、その他の部分ではほとんど残らず、現表土直下が遺構面となる。

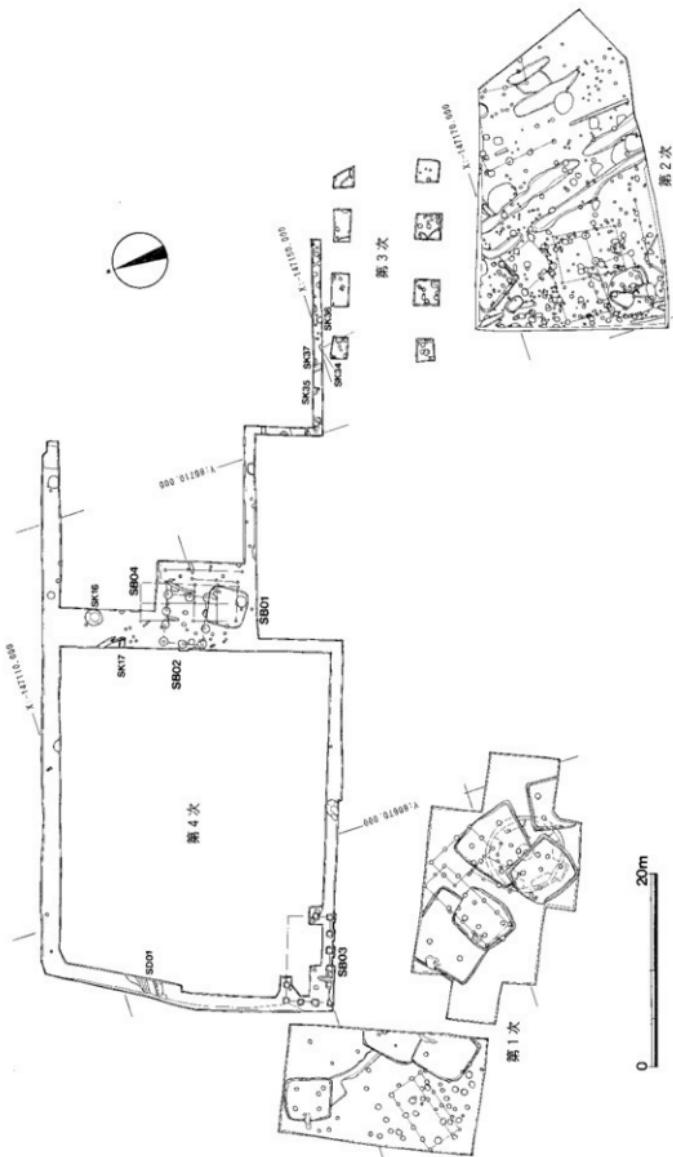
遺構 今回の調査で検出された遺構には、堅穴住居1棟（SB 01）、掘立柱建物4棟以上（SB 02・03・04他）、不整形の落ち込み1基（SX 01）、土坑、柱穴等がある。

SB 01 中央トレントの南部で検出された堅穴住居で、平面隅円方形を呈し、南北4.0m、東西4.0mをはかる。検出面から床面までの深さは10cm程度である。主軸はN31°Eにある。SB 02・04・SP 114・57と切り合い関係にあり、SB 01はSB 02よりも新しく、SB 04・SP 114・57よりも古い。

北辺の東寄りに造り付けのカマドをもち、南東隅には浅い平面隅円方形の土坑がある。柱穴・貼床等は確認されなかった。

カマドから焼土・土師器片等、南東の土坑から土師器甕、床面からは若干の土師器片の他、カマド左袖付近から鉄製品が出土している。出土した遺物から、飛鳥時代の遺構と推定される。

fig.172 调查区全体图



SB 02 中央トレンチの南部で検出された南北2間・東西3間をはかる掘立柱建物である。径80~90cmの平面円形の柱穴をもつ。柱穴の深さは遺構確認面から30~50cmである。すべての柱穴で柱痕が確認でき、径20~25cmの断面円形の柱であったことが確認できる。建物の規模は柱芯で南北約4.2m、東西5.0mをはかる。主軸はN24°Eにある。

SB 01・04・SP 104・61と切り合い関係にあり、SB 02はいずれよりも古い。

P 2~7・9~10から土器の小破片が出土しており、飛鳥時代の遺構と考えられる。



fig.173 SB 01 平面図

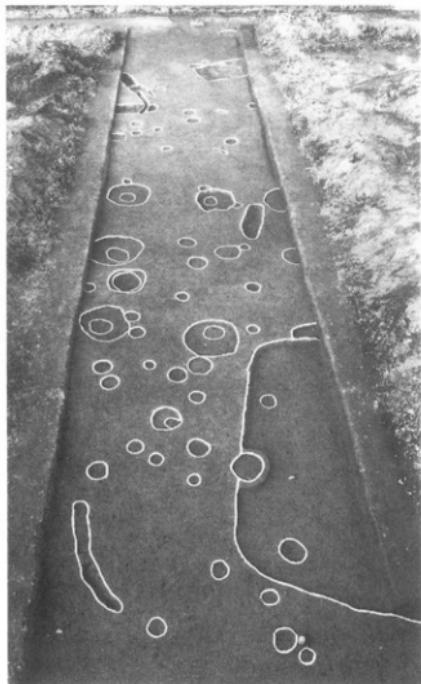


fig.174 中央トレンチ全景

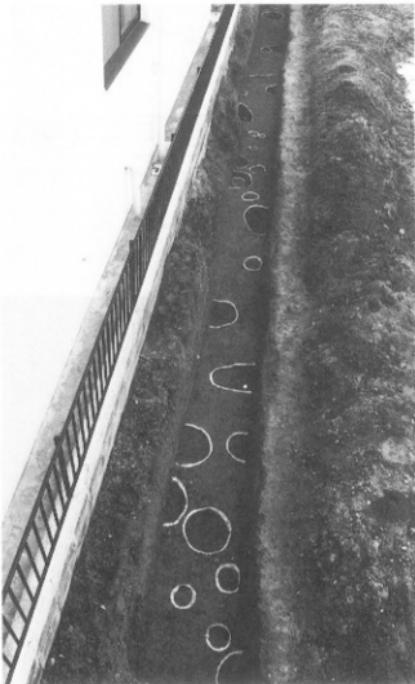


fig.175 南部トレンチ東部

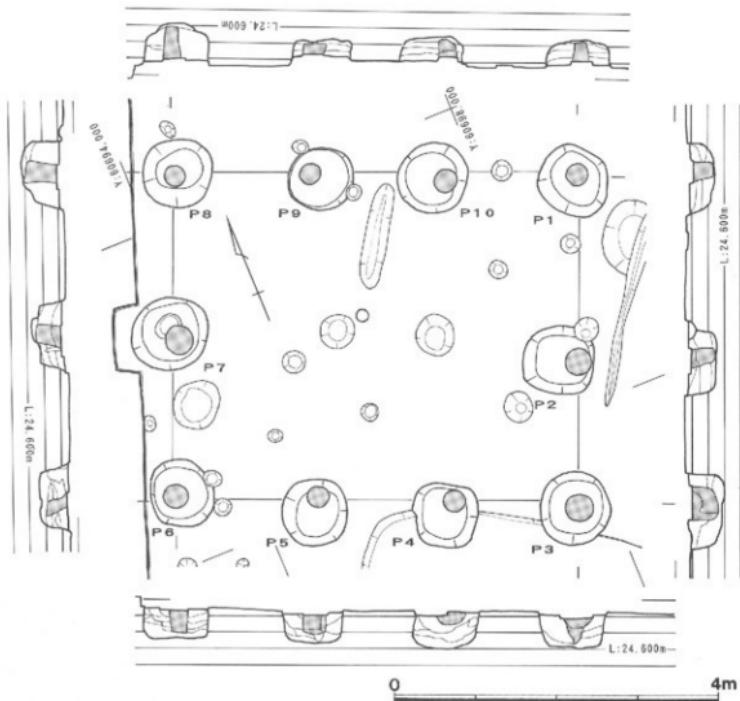


fig.176 SB 02 平・断面図

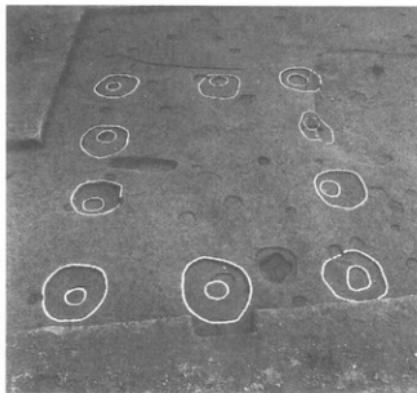


fig.177 SB 02 全景

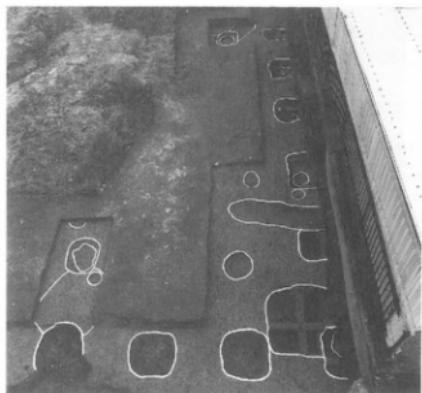


fig.178 SB 03 全景

**SB 03** 調査区南西部で検出された南北3間、東西5間の掘立柱建物である。一辺70~80cmの平面方形の柱穴をもつ。柱穴の深さは遺構確認面から45~55cmである。すべての柱穴で柱の抜き取り痕が確認できる。建物の規模は柱穴の中心で想定すると南北約4.8m、東西9.8mとなる。主軸はN24°Eである。

SK 03・18と切り合い関係にあり、SB 03がいずれより新しい。

P 1~4・6~8から土器片が出土しており、飛鳥時代の遺構である可能性が高い。

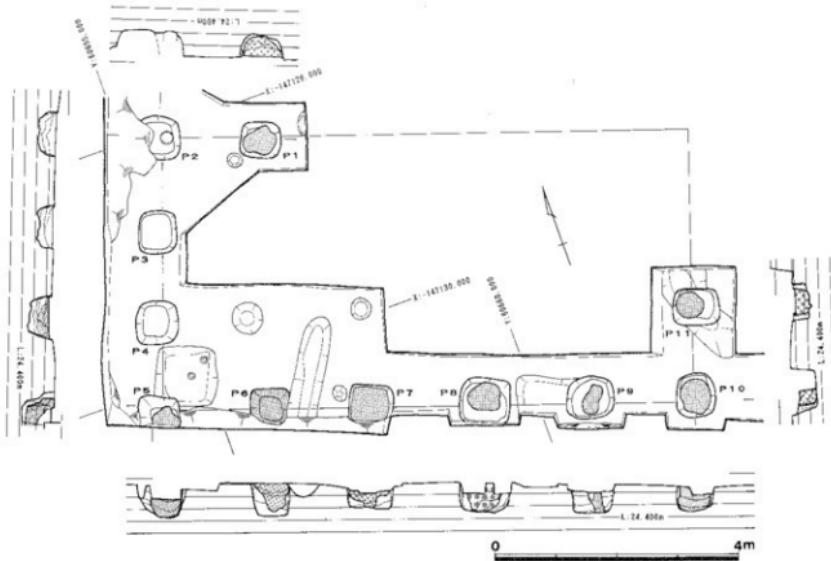


fig.179 SB 03 平・断面図

**SB 04** 中央トレンチの南部で検出された南北4間あるいは3間、東西2間の掘立柱建物である。径約25cmの平面円形の柱穴をもつ。柱穴の深さは遺構確認面から10~20cmあり、柱痕が確認できるものとできないものがある。建物の規模は柱芯で、南北4間として約9.9m、南北3間として約7.1m、東西3.8mをはかる。主軸はN19°Eである。

SB 01・02等と切り合い関係にあり、SB 04はこれらよりも新しい。

P 2・3・6・7・9・10から土器の小破片が出土しており（図化できるものはP 9からの1点のみ）、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

**その他の建物** SB 04の東でこれとほぼ並行する柱穴列2列を検出した（SA 01・02）。これらは掘立柱建物になる可能性がある。また、調査区南東部で多くの柱穴が検出された。このなかで平面方形の掘形をもつものにSP 34・36・38などがある。SP 34は第3次調査で検出されたSK 01とともに同じ掘立柱建物の柱穴を構成すると思われる。SP 34からは奈良時代の須恵器杯が出土している。SP 36・38や平面円形の柱穴なども他の掘立柱建物を構成すると思われ、この部分に数棟の掘立柱建物の存在が推定される。

- SK 03 調査区南西部で検出された一辺 100cmの平面方形の土坑で、遺構面からの深さは38cmを  
はかる。SB 03 と主軸方向をほぼ一にするが、この南西隅の柱穴 P 5 と切り合い関係にあり、SK 03 の方が古い。遺物は土器の小破片が埋土から出土した。
- SK 16 調査区中部で検出された径約 1.3mの平面円形の土坑である。SB 03 の柱穴 P 11 と切り  
合い関係にあり、SK 16 の方が古い。遺物は土器の小破片が埋土から出土した。
- SK 17 調査区中部で検出された東西 1.1m以上、南北約 50cmの細長い土坑である。遺構面から  
の深さは11cmをはかる。SD 02 と切り合い関係にあり、SK 17 の方が古い。土器の小破片  
が埋土から出土している。埋土上層には20%以上の炭粒子が含まれる。
- SK 22 調査区南西部で検出された 1.8m以上 × 0.6mの平面不整梢円形の土坑である。遺構面  
からの深さは23cmをはかる。埋土から須恵器杯・須恵器甕などが出土しており、飛鳥時代

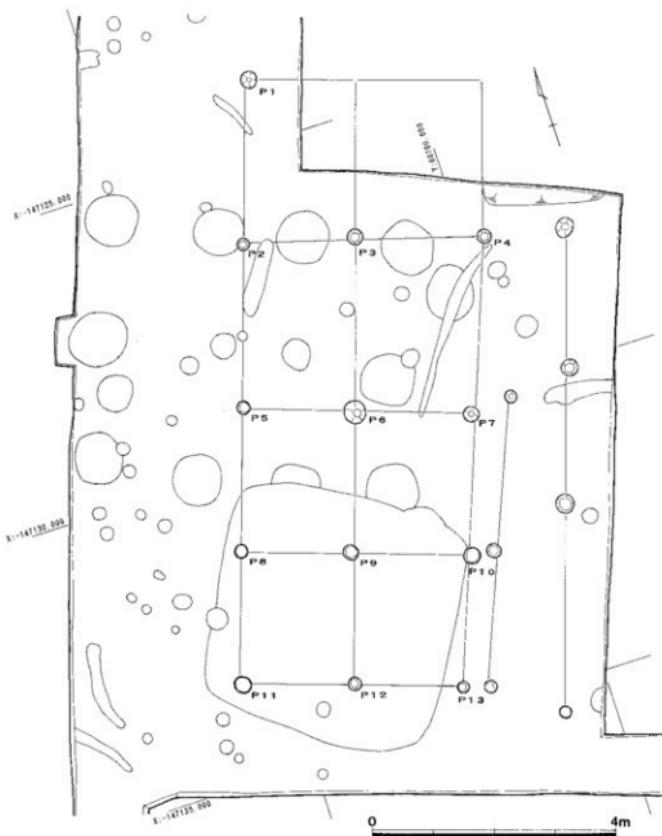


fig.180 SB 04、SA 01・02 平面図

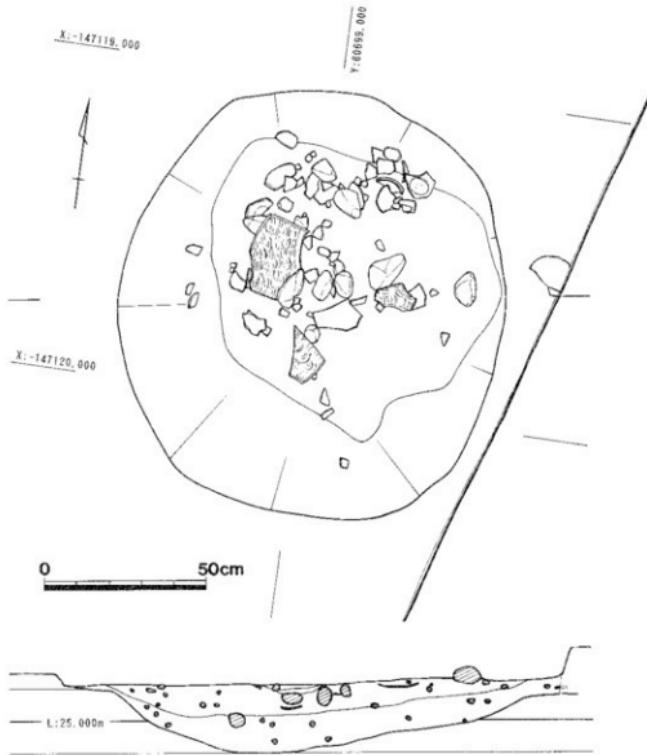


fig.181  
SK 16 平・断面図

の遺構と推定される。

**SD 01** 調査区西部で検出された幅約1.9mをはかる東西方向の溝であるが、一部屈曲する。遺構面からの深さは約10cmをはかるが、溝底の両端がさらに10cmほど深くなる。少量の土器が埋土から出土している。

### 3.まとめ

今回の調査区では遺構の密度が南に高く、北に行くにしたがって低くなる。遺跡の中心が今回の調査区以南にあることは1~3次調査の成果からも明らかである。

今回の調査では、弥生時代および飛鳥時代から平安時代にかけての遺構・遺物が多く確認された。なかでも飛鳥時代・奈良時代における方形の大型建物の存在は、古代における官衙的な施設が当地に存在したことを示すと思われる。立地からみてもこの遺跡は、条里水田の広がる沖積地に南面し、これを見晴らす丘陵先端上にあり、官衙的施設の立地場所としてふさわしい。今後の調査の進展が期待される。

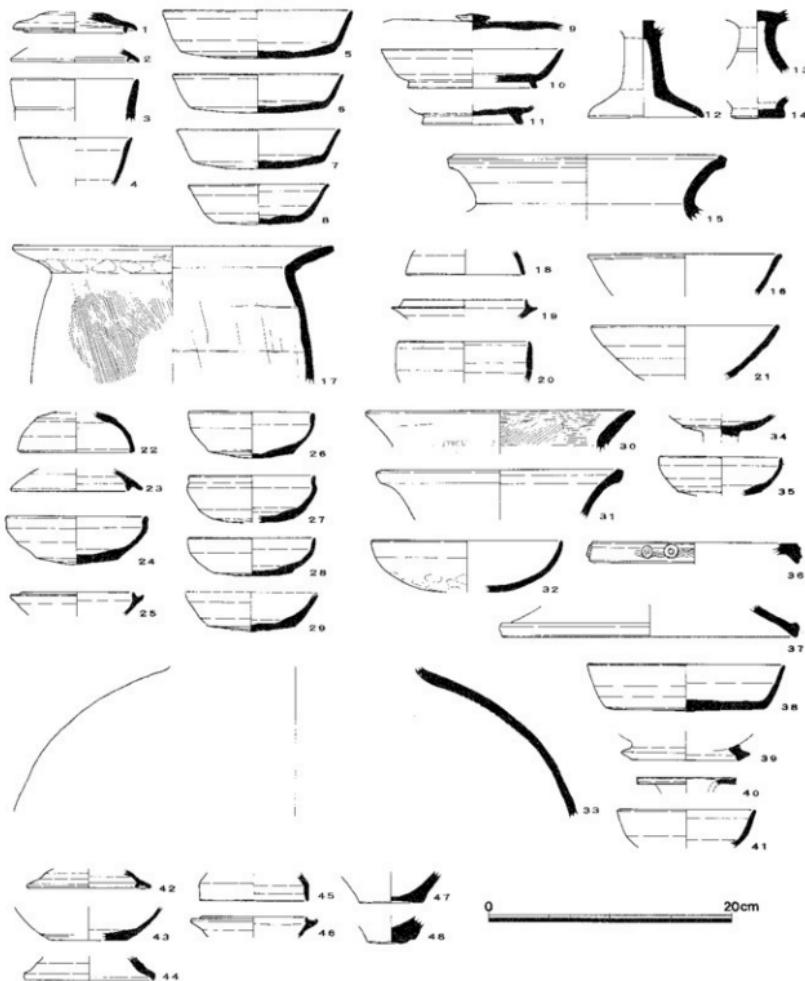


fig.182 出土土器実測図 1~16: 2~3層 17: SB 01 18~19: SB 03-P 6 20: SB 02-P 10 21: SB 04-P 4

22~33: SK 16 34~35: SK 17 36: SP 26 37: SP 27 38: SK 34 39: SK 35

40~41: SK 37 42~44: SD 01 45: SK 36 46: SK 40 47~48: SP 107

(1~11・13・15・18~31・33~35・38~46: 須恵器 12・14・17・30・32: 土師器 16: 白磁)

(36・37・47・48: 陶生土器)

## 23. 新方遺跡 北方地点 第3次調査

### 1. はじめに

新方遺跡は弥生時代前期初頭に始まる集落遺跡であり、弥生時代を通じ明石川流域の拠点集落として位置付けられている。また、弥生時代中期～古墳時代後期に玉造りを行う生産遺跡としても著名である。

奈良時代～平安時代にも集落は存続し、遺物包含層が確認される他、自然河道から柵や人形等の木製品も出土している。平安時代末～鎌倉時代には掘立柱建物、井戸等が確認されている。また中世には、神出古窯跡群から搬入された瓦の出土することも知られているが、瓦葺き建物等は未だ確認されていない。



### 2. 調査の概要

調査地は便宜上、調査区1～4に区分する。調査区4は第2遺構面（奈良時代後期）までの調査を実施し、下層については次年度に調査を予定している。今年度の調査では、中世、奈良時代後期、古墳時代後期、弥生時代中期の遺構が確認されている。

確認された主な遺構は、中世一掘立柱建物1棟、耕作裏、奈良時代後期一掘立柱建物2棟、土坑、自然流路、古墳時代後期一掘立柱建物3棟、竪穴状遺構（住居跡？）1棟、井戸1基、柵列、土坑、自然流路、弥生時代中期一土坑である。

#### 調査区1

遺構面は中世前期（第1遺構面）と古墳時代後期、弥生時代中期（第2遺構面）の2面

が確認されている。

**第1造構面** 調査区の南半から、中世前期の掘立柱建物と考えられる柱穴列や溝等が確認された。調査区北半の造構は、削平を受けて消滅している可能性が高い。

**SB 101** 調査区の南東部分から、南北方向に2間並ぶ柱穴が検出されている。東西方向の確実な並びは検出されていないが、掘立柱建物である可能性が高い。

柱穴は円形の握形で径約25~30cmを測り、柱間は約240cmを測る。建物方位はN 10° Wを測る。柱穴内からは須恵器の柄や土師器の小皿の他、礎板も確認されている。

柱穴内で柱に喰ませて使用した遺物から判断すると、建物の時期は平安時代末~鎌倉時代である。

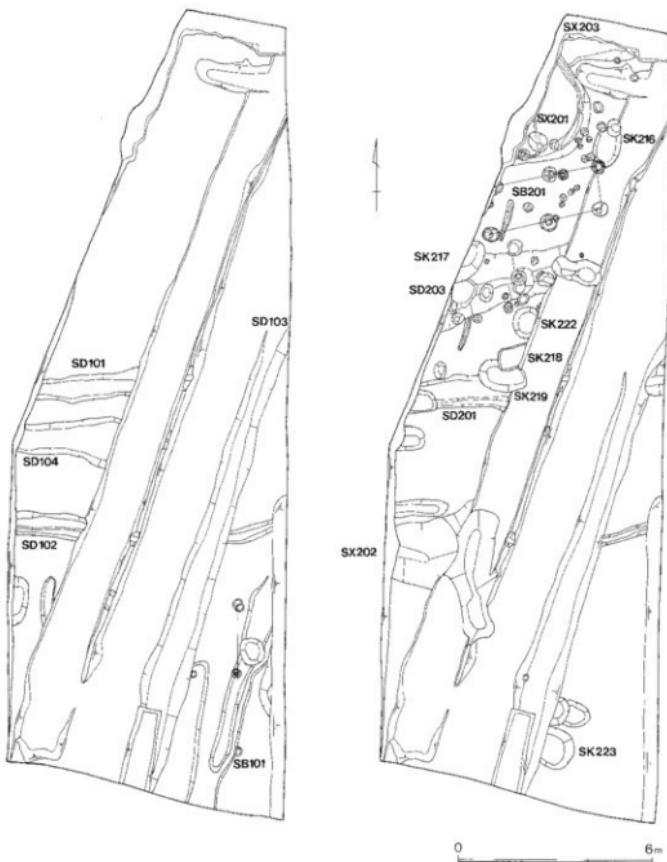


fig.184 調査区1 第1(左)・第2(右)遺構面平面図

- SD 101 すべて東西方向に伸びる溝であり、幅約60~150cm、深さ約6~11cmを測る。遺物は鎌倉時代の須恵器と土師器が出土している。
- SD 102・104 南北方向に伸びる溝であり、幅約100cm、深さ約40cmを測る。他のすべての遺構を削平しており、時期差が認められる。ただし遺物は鎌倉時代の須恵器と土師器が出土しただけであり、遺構の正確な時期は不明である。
- SD 103 弥生時代中期中頃と古墳時代後期の遺構が、同一遺構面で検出されている。遺構の主体は古墳時代後期に形成されており、掘立柱建物や土坑等が検出されている。
- SB 201 弥生時代中期中頃には土坑等が散在している。この時期の遺構にはSK 222、SX 201があり、すべて黒灰色シルトが堆積している。遺物は出土していないがSK 216・218・219も同じく黒灰色シルトが堆積し、同一時期の遺構である可能性が高い。
- SX 201 調査区の北西で確認した、東西3間以上×南北1間を測る掘立柱建物である。南北は2間となる可能性があるが、柱穴の掘形が浅く、並びも不規則であるため明らかではない。柱穴の掘形は楕円形で、径約40~50cmを測る。柱径は約20~30cmである。柱間は東西約1.7m、南北約1.5mを測り、建物の規模は東西約3.5m以上×南北約1.5mとなる。建物方位はN74°Eである。
- SX 201 調査区の北西で確認した隅丸方形の堅穴状遺構であり、幅は東西約2.1m以上×南北約3.5m以上、深さ約15cmを測る。また堅穴の周囲を幅約25cm、深さ約22cmの小溝が巡っている。この小溝を周壁溝と考えると、堅穴住居と判断することも可能である。削平を受けしており正確な判断はできていない。遺物は埋土の上層から須恵器の壺、蓋、壺等の破片が出土している。
- SX 202 調査区の内部から、一辺が60cm以上×35cm以上で方形になると予想できる土坑(SK 221)が検出されている。壁面はほぼ垂直に落ち込み、深さは約20cmを測る。堅穴状遺構に付属する施設である可能性を持つ。
- SX 202 調査区の北端で確認された落ち込みである。幅約0.8m以上×2.2m以上、深さ約11cmを測る。須恵器の壺等が破片で出土している。
- SD 201 調査区の中央で確認された東西方向に伸びる溝である。幅約90cm、深さ約25cmを測る。
- SD 203 調査区の北半で確認された東西方向に伸びる溝である。幅約150cm、深さ約40cmを測る。埋土の上面から土坑や柱穴が掘削されており、周囲に建物が建築される以前の溝であろう。
- SK 223 調査区の南半で確認された、径約120cm、深さ約20cmを測る円形の土坑である。西半分はSD 103により削平されている。
- SK 217 調査区の北半でSD 203の埋没後にその北肩部分に掘削された不整円形の土坑である。径約55cm以上×140cm、深さ約30cmを測る。
- SX 203 調査区の北半で確認された不整形の落ち込みで、幅約140cm、深さ約70cmを測る。上面に砂混じり黒灰色シルトが薄く堆積する以外は、底面まで黒灰色シルトが堆積している。弥生時代中期中頃の広口壺が一個体出土している。
- SK 216 調査区の北半で確認された不整円形の土坑で、径約130×78cm、深さ約17cmを測る。土坑内に堆積する黒灰色シルトからは、遺物が確認されていない。
- SK 218 調査区の中央付近で確認された隅丸方形の土坑で、幅約90cm以上×70cm、深さ約15cmを

測る。上面の砂混じり黒灰色シルトから古墳時代後期の須恵器と土師器が出土したが、その下層で底面まで堆積する黒灰色シルトからは遺物が確認されていない。

SK 219 調査区の中央付近で確認された不整円形の土坑であり、径約140×80cm、深さ約25cmを測る。黒灰色シルトが堆積し遺物は確認されていない。

SK 222 調査区の中央で確認されたほぼ円形の土坑であり、径約90cm、深さ約26cmを測る。黒灰色シルトが堆積し、弥生土器片が出土している。

調査区 2 遺構面は基本的に中世（第1遺構面）と弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代（第2遺構面）の2面が確認されている。

第2遺構面の下層は無遺物層であり、一部に黒灰色シルトを挟み中砂～礫層が続いている。

第1遺構面 調査区の北半から耕作痕が確認された。本来は南半にも続いていたと考えられるが、削平を受け消滅している。耕作痕の方位はN65° Eを測る。

遺物は中世の須恵器が細片で出土ただけである。

第2遺構面 奈良時代後期、古墳時代後期、弥生時代中期の遺構が同一造構面で検出されている。

遺物包含層から出土した遺物には、縄文時代晚期の浅鉢形土器の他、奈良時代の墨書き土器等がある。

奈良時代には調査区の北半で流路が存在するが、遺構の主体は古墳時代後期であり、掘立柱建物等が確認されている。また、弥生時代中期中頃には土坑が散在している状況が確認されている。

SD 201 調査区の南端から検出された幅約4.2m以上、深さ約18~32cmを測る奈良時代後期の流路である。調査区内では標高の低い地域であり、方向を変化させながら広い範囲に流路が形成されていた状況が検出された。

SB 201 東西3間以上×南北3間を測る庇付き総柱の掘立柱建物である。

柱穴の掘形は不整円形であり、基本的に径約60~70cm×40~50cmを測る。柱径は確認されたもので約30cmを測る。ただし西端部分に並ぶ柱穴は掘形が円形であり、径約28~40cmと比較的小さい。庇である可能性が高い。

柱穴間は東西約1.9m、南北約1.4mを測り、建物の規模は東西約5.7m以上×南北約4.2mである。建物方位はN76° Wを測る。

柱穴からは須恵器と土師器の小片が確認されただけである。確実な時期は判断できないが、TK47形式の須恵器蓋が確認されており、6世紀前半の掘立柱建物である可能性が高い。

SB 202 東西3間以上×南北3間を測る総柱の掘立柱建物である。SB 201の南約1.2mに位置する。

柱穴の掘形は梢円形であり、基本的に長径約50~70cm、短径約40~60cmを測る。柱穴間は東西約1.9m、南北約1.4mを測り、建物の規模は東西約5.1m以上×南北約4.2mとなる。建物方位は、N84° Wを測る。

建築精度はSB 201と比較して粗く、各柱穴間の距離やその並びごとの方位にも誤差が認められる。

SE 201 SB 201 の西側で検出された木組井戸であり、調査区の西壁に沿って東側半分だけを検出している。掘形はほぼ円形であり、直径約 3.9m を測る。木組材は掘形上面から約 25cm で確認されたが、造構面が削平を受けるため、本来の井戸の深さは不明である。  
木組部分はほぼ正方形となることが予想され、一辺約 1.9m を測る。木組上面から底部

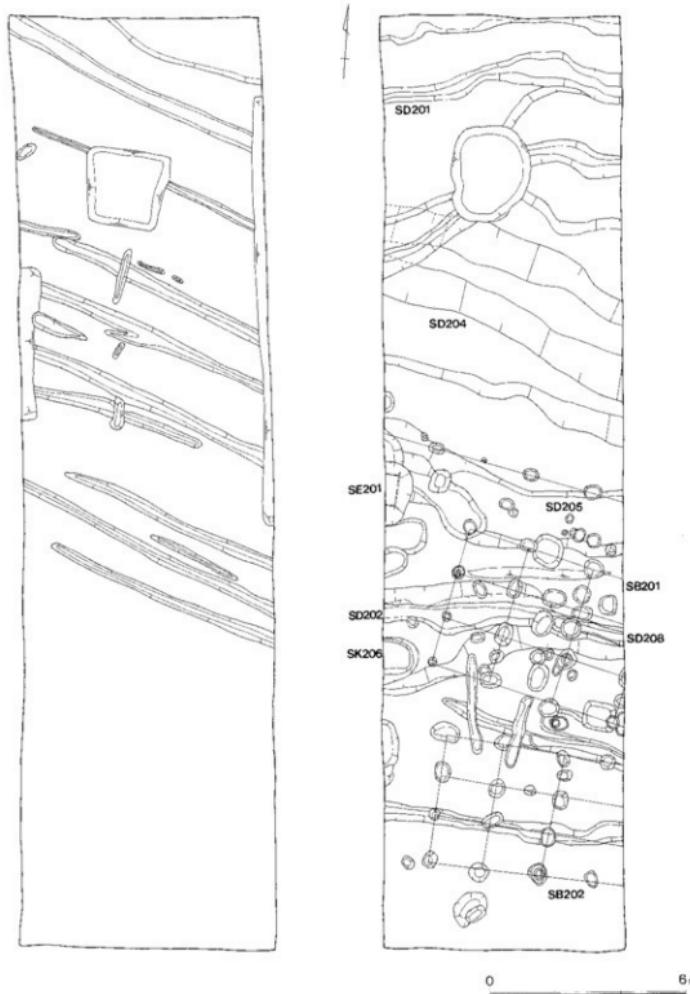


fig. 185 調査区 2 第1 (左)・第2 (右) 造構面平面図

までの深さは約60cmである。また木組のコーナー部分は、内側をすべて杭で抑えることにより、内傾することを防いでいる。

木組の構築順序は、掘形掘削後にはまず南壁と北壁部分を設定した後、東壁の構築を行っている。板材の設置後、掘形部分に裏込め材を置きながら埋めもどしており、板材を固定するために杭も打ち込んでいる状況が確認できる。北壁部分は裏込め材を置かず、板材を二枚重ねている。

杭は内側のコーナー部分で4か所、掘形部分で4か所の計8か所から確認されている。

遺物は底部上面に堆積した黒灰色シルトから高环の蓋、环、把手付き椀等の須恵器が出土している。TK23形式とTK47形式であり、井戸の使用開始時期もそれに近いと推定できる。また南壁の掘形上面付近から、須恵器でMT15形式の环等が原位置を保った状態で出土している。井戸の廃棄に伴う祭祀に使用された遺物であろう。以上の結果から6世紀初頭～前半にかけて使用された井戸である可能性が高い。他に滑石製の白玉が10点出土している。

また、木組に使用された部材には転用材が認められる。東壁に使用された板材は建物の扉材からの転用である。

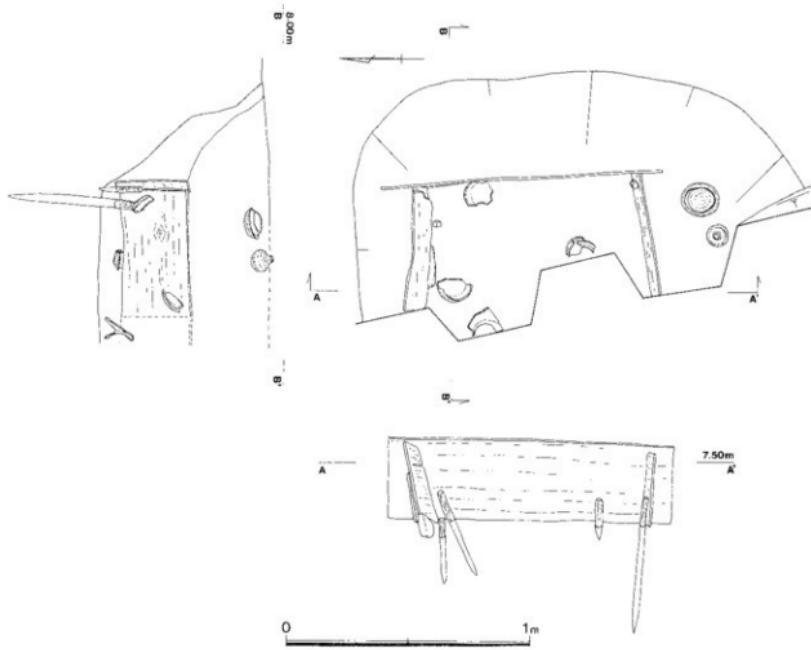


fig.186 SE 201 平・立面図

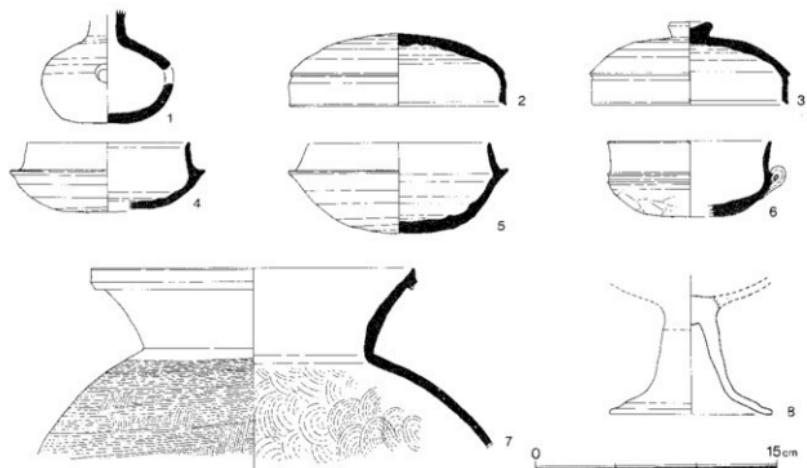


fig.187 SE 201 出土土器実測図 (1・2:上層、3~7:最下層)

**柵列** SB 201 の北側で確認している。調査区の幅 7m の範囲での検出だが、3間以上の並びが確認され、柵列となる可能性が考えられる。

柵列を構成する柱穴は不整円形であり、径約 50×30cm を測る。柱穴間は約 2m である。柵列の方位は N76° W である。

**SD 202** SB 201 の廃棄後に形成された東西方向に延びる溝である。北肩は削平を受けており、幅約 250cm、深さ約 32cm を測る。下層には疊混じり細砂～中砂が堆積し、流路である可能性が高い。

**SD 204** 幅約 2.5m、深さ約 0.6m を測り、東西方向に延びる溝である。古墳時代後期の須恵器と共に滑石製の紡錘車が出土している。

**SD 205** SB 201 の築造前に形成された東西方向に延びる溝である。幅約 190cm、深さ約 22cm を測る。

**SD 208** 幅約 36cm、深さ約 55cm を測り、SB 201 に平行した東西方向に延びる溝である。壁面は垂直であり、底面とも直角である。壁面は中砂～粗砂であり、板材等により補強されていた様である。SB 201 に付属し、何らかの関連を持つ可能性も考えられる。

**SK 206** 調査区の西壁に沿って東半分のみを検出している。幅約 123cm、深さ約 32cm を測る不整円形の土坑である。土坑内から弥生時代中期中頃の鉢形土器が出土している。

**SK 238** SD 205 の底部から削平を受けて確認された。幅約 330cm 以上 × 120cm、深さ約 32cm を測る土坑である。西側は SE 201 にも削平を受けている。土坑内から、弥生時代中期中頃の甕等の破片が出土している。

**調査区 3** 調査の結果、古墳時代後期の流路が確認された。流路の周囲は湿地状であったらしく、動物の足跡が確認された。

造構面上には洪水砂が堆積し、不安定な地盤であったことが窺える。

SR 101 幅約 4.5m、深さ約 1.0m を測り、東西方向に流れる流路である。堆積土層は最上層を除きすべて砂礫層であり、古墳時代後期の須恵器片が出土している。

流路の南肩付近からは、大型獸の足跡が多く確認された。

SR 102 幅約 5 ~ 6 m、深さ約 1.1m を測り、東西方向に流れる流路である。流路の南肩は、調査区 2 の北端で検出されている。

下層に砂礫層が堆積する他は、細砂～細砂混じりシルトが堆積しており、古墳時代後期の須恵器片が出土している。

SR 103 幅約 1.8m、深さ約 0.4m を測り、東西から南北方向へ曲がりながら流れる流路である。

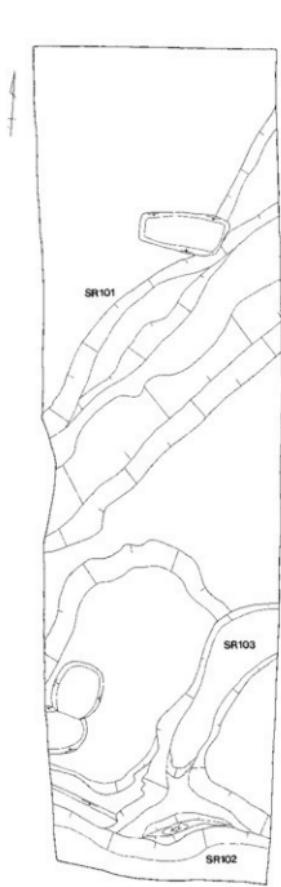


fig.188 調査区3 道構平面図

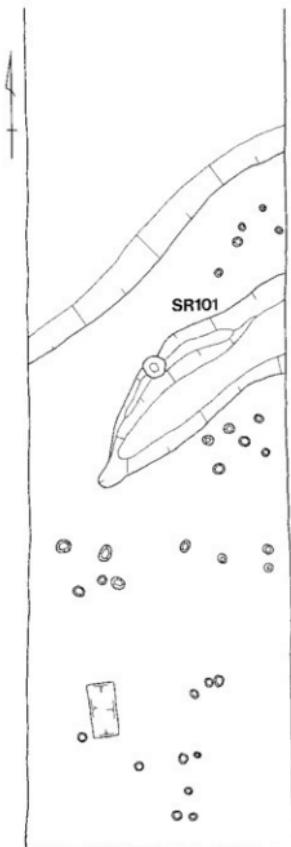


fig.189 調査区4 第1道構面平面図

シルトを挟んだ中砂～粗砂が堆積し、古墳時代後期の須恵器片が出土している。

調査区 4 中世（第1遺構面）と奈良時代（第2遺構面）の調査を実施した。下層で古墳時代後期と弥生時代の遺構面を確認しているが、調査は次年度に持ち越した。

第1遺構面 調査区の南半から、中世のピットと流路が検出された。遺構から出土した遺物は少ないため、時期は確定できないが、遺物包含層からは中世前期の遺物が出土している。

ピット すべて径約20cm前後を測り、淡黄褐色極細砂を埋土としている。建物や樹列としての並びは確認されていない。中世の須恵器と土師器の細片が出土しているが、少量である。

SR 101 幅約2.4m、深さ約48cmを測り、東西方向に流れる流路である。中世の須恵器と土師器の細片が出土しているが少量である。

第2遺構面 調査区の南半を主体として、奈良時代の掘立柱建物、溝、流路等が確認された。

SB 201 東西2間以上×南北3間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形は不整円形であり、径約70～105cm、深さ約120～150cmを測る。柱穴間は東西約0.95×南北約0.85mであり、建物の規模は東西約1.9m以上×南北約2.5m以上と予想される。方位はN 9° Wを測る。

柱穴内からは奈良時代の須恵器片が出土している。

SB 202 東西3間×南北2間を測り、SD 201の埋没後に建築された掘立柱建物である。柱穴の掘形は円形であり径約20cmを測る。柱穴間の距離は不規則であり、東西約1.5～2.2m、南北約0.6～0.7mを測る。建物の規模は東西3.7m×南北2.5mである。建物の方位はN 57° Eを測る。柱穴内からは奈良時代後期の須恵器と土師器が出土している。

SD 201 幅約150cm、深さ約10cmを測り、東西方から南北方向へは90°曲がるコーナーを持つ溝である。溝内から奈良時代後期の須恵器と土師器が出土している。SB 201の周囲を囲む形で検出されており、何らかの関連が存在することも考えられる。

SD 206 調査区の中央で検出した溝である。幅約2.6m、深さ約1.5mを測り、東西方向に延びている。北肩部分には杭痕が確認されており、簡単な護岸を施していた可能性がある。  
奈良時代後期の須恵器と土師器が多く出土している。

SX 201 SD 201等を削平し、南北方向に延びる溝状の落ち込みである。幅約290cm、深さ約30cmを測り、奈良時代後期の須恵器と土師器が多く出土している。

SK 201 幅約120cm以上、壁面は垂直に近く落ち込み、深さ約40cmを測る土坑である。  
奈良時代後期の須恵器と土師器が出土している。

SK 207 幅約160cm、深さ約18cmを測る不整円形の土坑である。炭化物が多く堆積し、壁面には焼土も確認される。

SR 201 幅約6.5m以上、深さ約1.5mを測り、東西方向に延びる自然流路である。下層から奈良時代の遺物が出土している。

3.まとめ 新方遺跡は、今までの調査で弥生時代全期間を通じて栄えていたことが知られているが、当調査では、調査区1・2で中期中頃の土坑が散在していたにすぎない。弥生時代の集落の中心からは外れる部分であろう。古墳時代前期に集落の規模は縮小するが、古墳時代後期には再び拡大する。

また、これまでの調査で奈良時代の遺物は知られていたが、今回の調査ではじめて掘立柱建物2棟を確認した。特にSB 201は大形の柱穴で構成された掘立柱建物である。また

調査区2からは、須恵器・壺の底部に「中」と書かれた墨書き土器も出土している。これまでの調査で出土した木製の舟車や人形と共に、集落の特徴を表す資料であろう。

中世の遺物は広い範囲から出土したが、確實に中世前期にさかのぼる遺構は調査区1で確認されただけである。遺物量と比較して遺構は少なく削平を受けていることも考えられる。

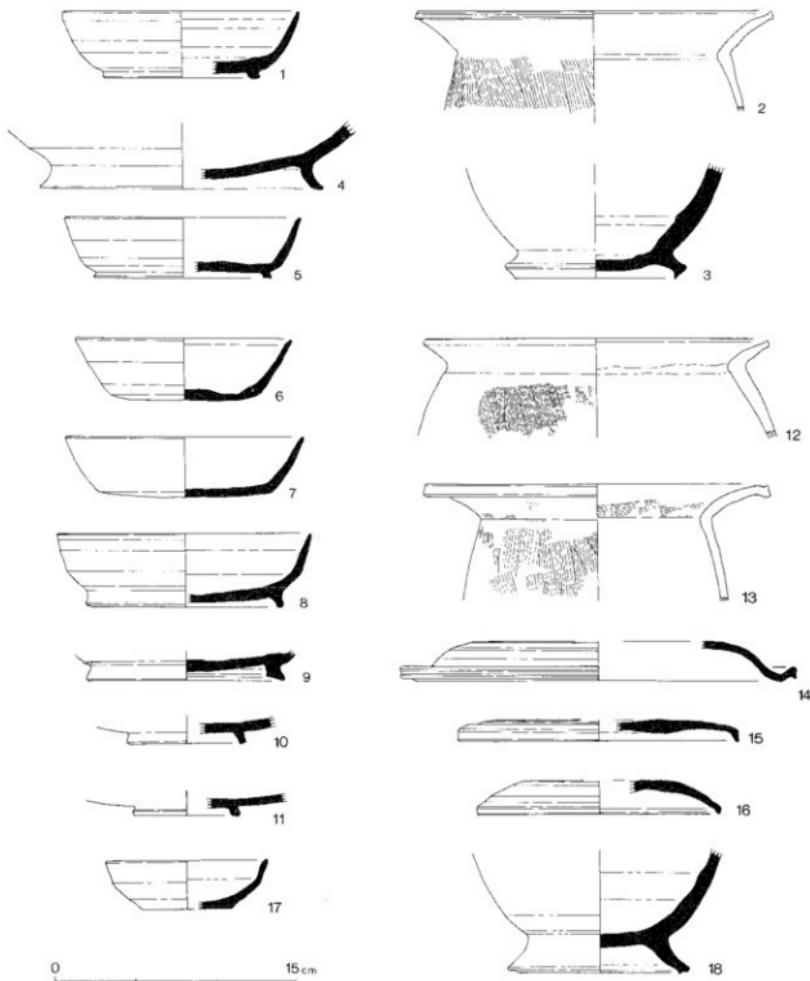


fig.190 調査区4 出土土器実測図  
(1 : SD 201 2・3 : SK 201 4~16 : SD 206 17・18 : SD 206 下層)

## ふたつや 24. 二ツ屋遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

二ツ屋地区では、平成3年度から土地区画整理事業に伴い、二ツ屋遺跡の発掘調査を実施してきている。これまでの調査では、弥生時代中期後半から近世（江戸時代前半期）の遺構が多数検出され、それに伴う遺物も多量に出土している。

弥生時代の主な遺構としては、平成4年度に調査した第2区第1遺構面の弥生時代後期の河道があげられる。この河道には、水田への用水のために設置されたと考えられるしがらみが確認されている。このしがらみは、庄内期にはすでに埋没し機能しなくなっていたようである。この河道は、その後古墳時代後期まで浅い窪みとなっていたようで、若干の遺物が出土している。

この弥生時代後期に遡る遺構としては、第3区第2遺構面で検出されたSD101があげられる。この溝からは、弥生時代中期後半の可能性の高い壺が1個体出土している。

弥生時代終末から古墳時代前期になると、この第2区の南に位置する第1区で遺構・遺物が確認されている。

また、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、河道や溝・土坑などから、比較的まとまった量の遺物が出土している。この付近に当該期の集落が存在しているものと推定される。

平安時代末（12世紀後半）になると、第4・5区では整然とした建物群が配列され、基壇状の高まりを持ち瓦葺きであったと推定される持仏堂や池を伴う邸宅跡が検出されてい

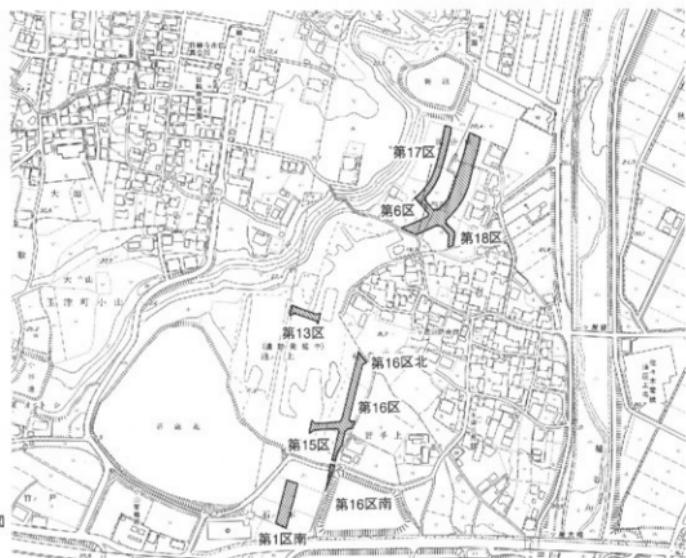


fig.191  
調査地点位置図  
1 : 5000

る。この建物群の周囲にはほぼ一辺 100m 四方の区画が存在していたものと推定される。この区画はほぼ条里地割りにのるものである。この地区的出土遺物の中には、軒平瓦・丸瓦・平瓦などの他に、多量の須恵器・土師器の皿・碗などがある。地方の有力者の邸宅跡と考えられる。

## 2. 調査の概要

### 第 1 区 南

**第 1 遺構面** 層序は、前年度までの調査と同様で、第 4 層上面が第 1 遺構面となり、第 5 層上面が第 2 遺構面となる。

#### SD 01 ~ 06

溝中からの遺物の出土は少ないが、弥生時代終末ころの土器片が出土している。これらの溝に関連するような遺構は前年度の調査では確認されていない。

**SK 01** 長径 3.0m、短径 1.7m、深さ 50cm の楕円形の土坑である。土坑中からの遺物の出土は少ないが、弥生時代後期後半～古墳時代後半の土器が出土している。遺構の時期については、古墳時代後期後半のものと考えられるが、これまでの調査ではこの時期の遺構は検出されておらず、この時期の集落の位置なども明確ではないが、この付近に集落の存在する可能性を否定することはできない。

#### 出土 遺物

時期的に主体となる遺物は、弥生時代後期後半から終末にかけてのものである。前年度調査においての状況と同様である。しかし、今回土坑 SK 01 から古墳時代後期後半の遺物が出土したことは、二ツ屋遺跡の時間的な継続性を考えいく上で重要な遺構・遺物である。

#### 第 2 遺構面

第 2 遺構面で検出された遺構は、南北方向の溝 1 条、土坑 1 基、不定形の落ち込み 2 基である。

溝 (SD 101)、土坑 (SK 102)、不定形の落ち込み (SX 101・102) は、埋土から弥生時代後期後半ころ (第 1 遺構面の時期よりも若干古い) に遡る可能性のある土器片が出土していることから、この時期の可能性が高い遺構と考えられる。

#### 出土 遺物

この遺構面に伴う遺物の出土量は少なく、時期については明確でない。しかし、わずかに出土した遺物から、弥生時代後半の可能性が高いものと考えられ、第 1 遺構面と第 2 遺構面の時間的な差は極めて短いものであったものと考えられる。

### 第 6 区

前年度の調査で北側に遺跡が広がることが判明したため、調査区を拡張して今年度再度調査を実施することになった地区である。層序は、前年度までの調査と同様で、第 1 層 (現代耕土)、第 2 層 (床土)、第 3 層 (遺物包含層)、第 4 層上面が第 1 遺構面となり、第 5 層上面が第 2 遺構面となっている。また、この地区では、南半部で新たに第 6 層上面において遺構面 (第 3 遺構面) が検出されている。

#### 第 1 遺構面

第 1 遺構面で検出された遺構は、溝 8 条、土坑 2 基、ピット・柱穴多数 (うち掘立柱建物 2 棟) である。

#### SD 01

調査区を東西に横切る溝で、埋土は粗砂である。埋土からの出土遺物はみられない。時期については、平安時代末の掘立柱建物 SB 01 に切られていることから、奈良時代から平安時代末の間の時期のものと考えられる。

#### SD 02・03

細く浅い溝で、その性格については明確ではない。時期については平安時代末ころと考えられる。

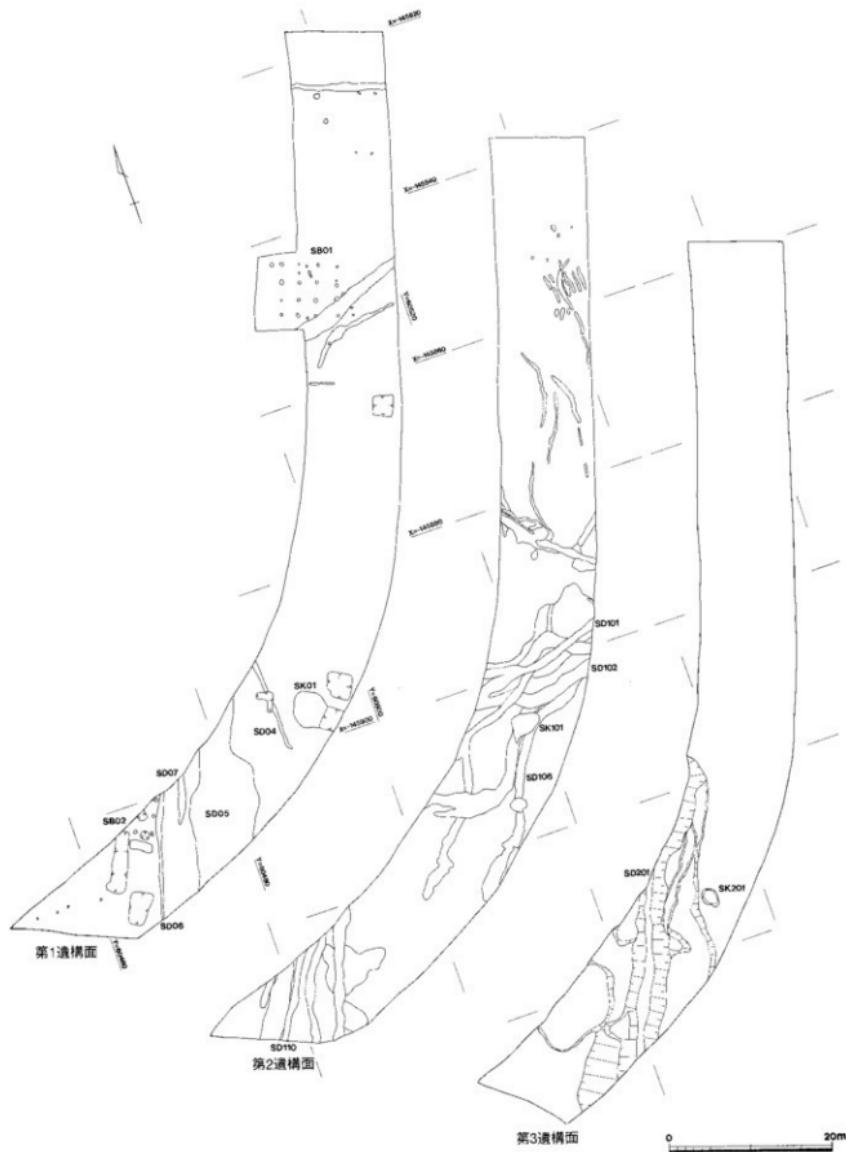


fig.192 第6区 第1～3透構面平面図

- SD 04 ほぼ南北方向の方位をとる溝である。SD 04 は、他の溝の埋土と異なることからやや時  
06・07 期の新しい溝と推定される。遺物は出土していない。
- SD 07 は、その性格については明確ではない。しかし、他の溝と比較してやや古相を示す遺物が出土しており、平安時代後半の時期が考えられる。
- SD 06 は、この西側で掘立柱建物 SB 02 が検出されたことから、雨落ち溝的な性格が考えられる。
- SD 05 河道あるいは水路と考えられるもので、最大幅 9 m、方位はほぼ南北方向である。最下層で平安時代後半の遺物を含んでいるが、遺物量は少なかった。また、木製品も少量出土している。
- SK 01 東側を一部削平されているが、直徑約 4 m、深さ 40cm のほぼ円形のものである。遺物の出土は少なく、時期については明確でない。
- SK 02 掘立柱建物 SB 01 の南側に位置するもので、SD 06 同様に建物に関連する造構と推定される。しかし、この土坑に伴う遺物は少なかった。
- SB 01 磁北から東へやや振った建物である。東西 3 間（約 7 m）、南北 3 間位（約 6.2 m）のやや東西に長い純柱の建物である。柱穴の直径は概ね 30~40cm である。中には柱材が一部遺存するものも存在した。柱間は 2~2.5 m で一定していない。この建物の東側の南北柱列間にピット（SP 17）が、この中から比較的まとまって遺物が出土している。位置的な点から建物の地鎮に関連するピットではないかと考えられる。この建物の柱穴の中から比較的多くの遺物が出土しており、柱を抜き取ったあとに入れられたことが考えられ、この建物の廃絶時期を考えいくうえで重要なものである。出土遺物から、この建物の時期は平安時代の末から鎌倉時代の初頭と考えられる。
- SB 02 SB 01 とはほぼ同じ方位をとるものである。調査範囲外へ広がるために建物規模を明らかにすることはできなかつたが、東西 1 間（柱間 2 m）以上、南北 2 間（約 4 m）以上の建物である。この柱穴には一部重複が認められ、建て替えあるいは補修などが行われたものと考えられる。柱穴から出土する土器の量が少ないが、この柱穴内に柱材をとどめるものや柱穴底に礎板を置いたものが認められた。
- 出土遺物 この面に伴う第 3 層（遺物包含層）から出土する遺物は、SB 01 周辺から第 4・5 区同様に比較的瓦類を多く含む遺物群が検出された。時期的には第 4・5 区同様に、平安時代末のものがほとんどで、大きな時期差をみいだすことは困難であった。しかし、SB 01 の柱穴などから出土する土器については、第 4・5 区のものと比較するとやや後出する感がある。時期的には、概ね平安時代末から鎌倉時代初頭が考えられる。
- 第 2 造構面 第 2 造構面はその一部を前年度に確認していたものである。検出された遺構は、30 条の溝、土坑 2 基、ピット 6 個である。溝は調査区北半部の細く短い溝群と、調査区中央部付近の幅 1 m 前後、深さ 50cm 前後の溝群、そして調査区南半部の南北方向の溝群とに大別することができる。
- SD 101 調査区北半部の細く短い溝群は、埋土からの出土遺物は少なく、その性格について明確  
～109 ではない。調査区中央部付近の溝群（SD 101～109）は、前年度に一部を確認していたものである。これらは、埋土に古墳時代～奈良時代の遺物を含んでいるが、造構の時期に

ついては概ね奈良時代を中心としたものと考えられる。

SD 110 調査区南半部の溝群（SD 110～114）は、ほぼ5条が並行して並ぶものである。溝 SD 113 はその中にあって最も深いもので、深さ約1mである。遺物の出土は少ないが、この溝群も調査区中央部付近の溝群と時期的には大きな差は認めがたく、概ね奈良時代ころのものと考えられる。

SD 101 不定形の浅い落ち込みである。遺物はまったく出土しておらずその時期については明確  
・102 ではないが、どちらも溝群の埋没後に掘り込まれたものであることから、奈良時代以降平安時代後半までのものと判断される。

出土遺物 この面に伴う遺物は少ないが、遺構の中から少ないながらも完形品に近い遺物が出土しており、これらの遺物から時期をうかがうことができる。出土遺物の多くは古墳時代後期から奈良時代のものであるが、その主体は奈良時代にあったものと考えられる。このような奈良時代の遺物が出土するのは、この第6区が中心である。また、地形的には溝 SD 106 の東側が高く、そこから周辺へ緩やかに下がっていくことから、溝 SD 106 の東側に奈良時代の微高地が存在しているものと考えられ、集落が残っている可能性が高い。

第3造構面 第3造構面では、土坑1基、河道1条を検出した。この面は、北側では第2造構面と同一面になっている。

SK 201 長径2.8m、深さ50cmの楕円形の土坑である。この中からは板状の加工木？が1点出土している。土器の出土は少なく、この土坑から出土した可能性の高い土師器の高杯脚部片は第2造構面の溝 SD 106 を調査している際に出土している。時期は古墳時代前期である。

SD 201 大きく北から南へ流れる河道である。調査区内での最大幅15m、深さ1.2mである。河道の中央部が一段低くなっており、西側には円形に近い浅い窪みが検出された。遺物は河道の中央部が一段低くなる上面で比較的まとまって出土している。それらの遺物から、この河道の時期は古墳時代前期の前半におさまるものと考えられる。

出土遺物 遺物は前述した河道 SD 201 のものが主体を占める。時期的には古墳時代前期の前半のもので占められている。

第13区 層序は、第1層（現代耕土）、第2層（床土）、第3層（遺物包含層）、第4層上面が第1造構面となり、第5層（西半部は砂層）上面が第2造構面となっている。

第1造構面 第1造構面では、溝2条、ピット1個、落ち込み1基が検出された。

SD 01・02 南北方向の溝である。SD 01 の埋土は細砂である。いずれの溝からの遺物の出土は少なく、時期については明確にできなかった。

SX 01 直径約10mの浅い円形の落ち込みの中に直径約7.5mの円形で深さ1.2mの落ち込みが検出された。埋土は細砂と粘質土の互層の堆積であった。遺物の出土は少なく、古墳時代後期の遺物が少量出土している。

出土遺物 調査区が前年度調査した第12区に接続する部分であることから、第12区にひき続き西側の部分では、第3層（遺物包含層）から平安時代末頃の須恵器・土師器などとともに瓦の出土が認められた。また、遺構内からの遺物の出土は少なく、時期的には SX 01 が古墳時代後期に比定された以外は不明確であった。

第2造構面 第1造構面では、溝2条、ピット2個、落ち込み1基が検出された。

- SD 101 南北方向の溝で、最大幅 3 m である。遺物は土師器片が少量出土している。
- SD 102 東西方向の溝で、最大幅 3.5m の浅い溝である。
- いずれの溝からも遺物の出土は少なく、時期については明確にできなかった。SD 102 からの遺物の出土は皆無であった。
- SX 101 幅 2 m の深い溝状の落ち込みである。土師器の小片を含むもので、古墳時代前期の可能性の高いものである。
- 出土遺物** この面に伴う遺物は極めて少ない。そのため、遺構の時期についても明確にすることはできなかった。しかし、わずかに出土する土器片からは、古墳時代前期の可能性の高いものが出土しており、遺構についてもその時期の可能性が高いものと考えられる。

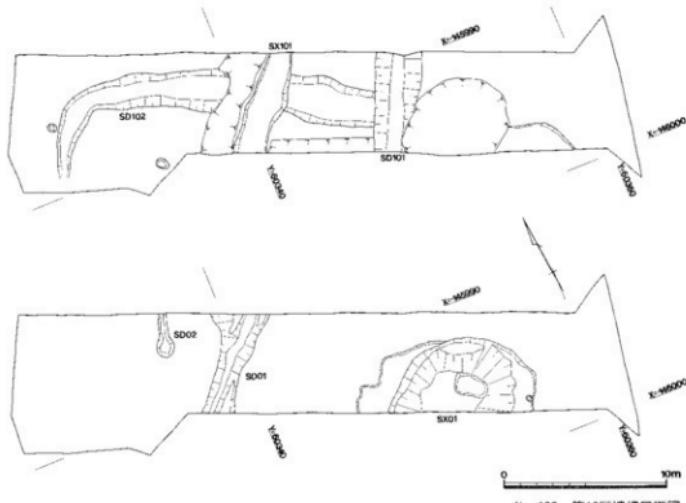


fig. 193 第13区遺構平面図

- 第15区** 層序は、前年度までの調査と同様で、第1層（現代耕土）、第2層（床土）、第3層（遺物包含層）、第4層上面が第1遺構面となり、第5層上面が第2遺構面となる。
- 第1遺構面** 第1遺構面で検出された遺構は、東西方向の溝 1 条と土坑 2 基、ピット 9 個である。
- SD 01 現調場面の畦畔のはば下に位置している溝である。埋土からは若干の須恵器・土師器片が出土している。時期については明確にできないが、中世段階（平安時代末～鎌倉時代）のものと推定される。この溝とつながるような溝は第2区では検出されていない。
- SD 01・02 土坑は 2 基検出されたが、SK 01 からは須恵器の捏鉢が出土しており、平安時代末から鎌倉時代初頭のものと考えられる。SK 02 から遺物はまったく出土しておらず、その時期については明確にできない。
- ピット ピットは調査区の西側に集中して 9 個確認することができ、一見すると掘立柱建物に見えるものである。しかし、これらには明確な柱痕跡を伴うものはなく、柱穴とすることには躊躇されるものである。これらのピットからは遺物の出土はほとんどなく、時期につい

ては明確にできなかった。しかし、SK 01 の埋土と似た埋土であることから、SK 01 と時期的には近いものと推定される。

**出土遺物** 遺物包含層からの出土遺物は少なく、SK 01 を除けば、遺構内の出土遺物は土器が少量出土している。また、遺物包含層からは、平安時代末頃の瓦片が少量出土しており、隣接する第 2 区の調査では、まったくみられなかった遺物である。

**第 2 遺構面** 第 2 遺構面で検出された遺構は、南北方向の溝 1 条である。

この溝 SD 101 は、埋土から弥生時代（中期後半か）に遡る可能性のある土器片が出土している。

**出土遺物** この遺構面に伴う遺物の出土量は少なかった。SD 101 から出土した弥生土器が少量あるだけである。小片であるために時期については明確にできない。この遺構面は第 3 区の第 2 遺構面にはほぼ相当する層位であることなどから、平成 4 年度に調査した第 3 区第 2 遺構面の溝 SD 101 から出土した、弥生時代中期後半と考えられる土器とはほぼ同時期のものである可能性が高い。

**第 16 区** 調査区は北側に現水路が走り、南側には現道が存在するために、北と南の調査区を第 16 区北調査区、南側を第 16 区調査区と仮称した。

層序は、第 15 区同様に、第 1 層（現代耕土）、第 2 層（床土）、第 3 層（遺物包含層）、第 4 層上面が第 1 遺構面となり、第 5 層上面が第 2 遺構面となっている。

**第 1 遺構面** 第 1 遺構面で検出された遺構は、溝が 6 条である。

**SD 01 ~ 06** SD 01 は、第 15 区からのびる東西方向の溝で、それ以外の 5 条の溝 SD 02 ~ 06 は、ほぼ南北方向の溝である。

SD 05・06 は第 3 層の遺物包含層を切り込む溝で、この面で検出された他の溝（SD 01 ~ 04）とは時期が明らかに異なるものである。この溝は、未調査地を間に挟むが、同一の溝であると考えられる。これは第 16 区北調査区で検出された河道 SD 07 と同一のものである可能性は高い。これらの溝は、現在の水路とはほぼ重なるもので、時代的にも近世以前に遡るものではないと考えられる。

SD 02 と SD 04 も未調査地を間に挟むが、同一の溝であると考えられる。この溝は、SD 03 と切り合い関係が認められ、SD 03 → SD 02・04 へと溝が付け替えられたものと考えられる。この SD 02・04 と SD 03 の溝は、現在玉津町周辺で復元される条里地割りの坪境とほぼ同一方向を探るもので、条里地割りに関係する溝である可能性もある。また、この溝よりも切り合い関係から新しい溝であることが明らかな溝 SD 01 は、この溝に直交するもので、条里地割りに関係する溝である可能性もある。これらの溝からは、平安時代末の須恵器や軒平瓦（均整唐草紋）、軒丸瓦（蓮華紋）などが出土している。切り合い関係の認められる SD 02・04 と SD 03 については、遺物の上からでは大きな時期差を認めがたく、短時間のうちに溝が付け替えられたものと考えられる。

この SD 02・04 と SD 03 は、第 16 区南調査区で検出された溝 2 条に対応すると考えられる。この調査区からも遺物の出土は少ない。

**出土遺物** この面に伴う遺物は、第 15 区同様に多くはない。しかし、遺構内から軒平瓦や軒丸瓦などが出土することは注目される。時期的には、概ね平安時代末から鎌倉時代初頭が考えら

れる。

**第2遺構面** 第2遺構面で検出された遺構は南北方向の溝1条で、遺構密度は高くない地域である。第4層中からも遺物の出土はまったくなかった。

この溝SD101は、第15区で検出された溝SD101と比較すると、遺存状況はあまり良好ではなかった。埋土からの出土遺物はまったくなく、時期については明確にはできないが、第15区の溝SD101に近い時期のものである可能性が高い。

第16区北調査区では、「く」の字に屈曲する溝SD102が検出されている。この溝もSD101同様に遺物の出土は少ないが、わずかに出土した遺物から古墳時代の遺構である可能性が高いものと推定される。

第16区南調査区では、全体が落ち込みの中に含まれるような遺構が検出されており、河道などが存在する可能性が高い。

**出土遺物** この面に伴う遺物は、サヌカイトの割片が数点出土している。時期的には弥生時代の可能性が高いものと推定される。

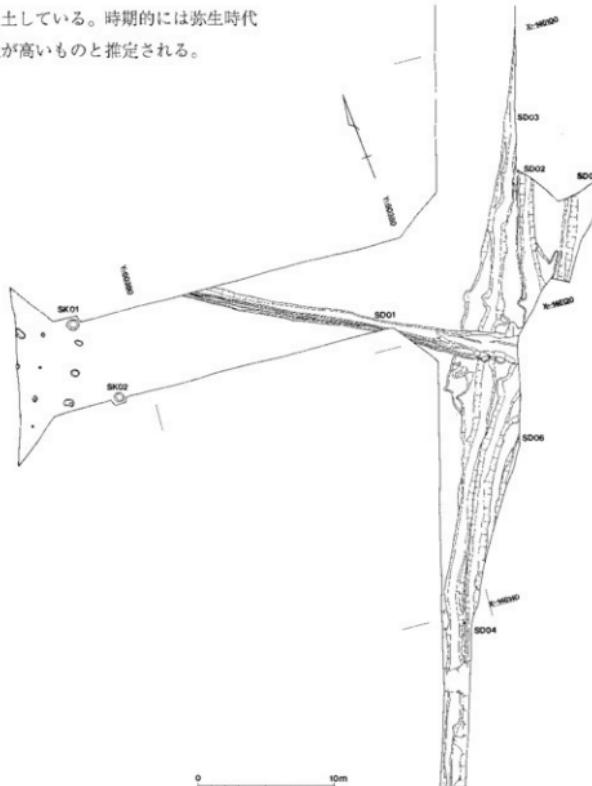


fig.194 第15・16区 第1遺構面平面図

## 第17区

層序は、第1層（現代耕土）、第2層（床土）、第3層（遺物包含層）、第4層上面が第1造構面となり、第5層上面が第2造構面となっている。この調査区では、第6区の第2・3造構面が第2面に相當している。

## 第1造構面

第1造構面では、溝10条、ピット8個、落ち込み1基が検出された。

溝は東西方向の溝と南北方向の溝に大別することができる。SD 10は第6区のSD 05に続くもので、SD 09は第6区のSD 07に続くものである。

## SD 03～05

この3条の溝は東西方向で、それ以外は南北方向の溝である。SD 05は幅約1mで、埋土には植物質の遺物を多く含んでいたが、土器類の出土はほとんどなかった。

## SD 10

最大幅2.5mで、出土遺物は第6区のSD 05同様に平安時代後半から末頃のものを含んでいる。

## SX 01

調査区の北側で検出されたものである。深さ20cm程度の浅い落ち込みで、埋土からは平安時代後半の遺物が出土している。

## 出土遺物

この面に伴う遺物包含層から出土した遺物は、平安時代末頃のものである。また、造構内から少量出土した遺物も概ね平安時代末頃のもので、この面がこの時期のものであると考えられる。

## 第2造構面

この面で検出された遺構は、溝4条、土坑1基、ピット6個、落ち込み1基である。そして、この落ち込みを掘削した段階で検出された遺構が河道2条、溝1条、土坑3基、ピット3個である。そのため、落ち込み SX 101 を掘削する前の造構面を第2造構面上部、掘削した後の造構面を第2造構面下部と仮称した。

第2造構面上部の溝 SD 103・104は、遺存状況が良好ではなく、遺物も少ないのであった。

## SK 101

長径6.5mの楕円形土坑である。埋土は細砂層とシルト層であった。遺物は少量出土しているが、時期を確定できるような遺物は少なかつた。

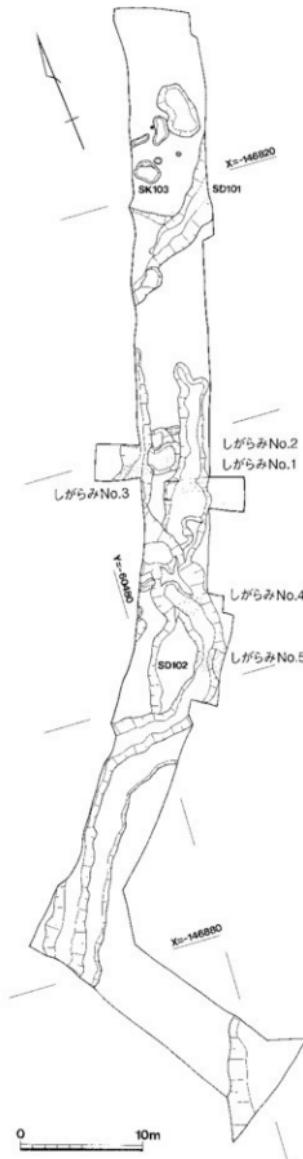


fig.195 第17区第2造構面平面図

SX 101 浅い落ち込みで、埋土は細砂層であった。これは下部河道が埋まつた後の浅い窪み状になった部分に堆積したものと考えられる。遺物は土器の細片が多く、また、板状の木製品が1点出土している。

第2遺構面下部は、河道SD 101の北側の面では、青灰色シルトの締まった遺構面で遺構の遺存状況も良好であった。この遺構群では土坑3基、溝1条、ピット3個が検出されている。これらの遺構のうち土坑SK 103からは、比較的まとまって土器が出土している。これらの土器は、弥生時代後期後半のもので、第1～3区周辺で検出された遺構以外では弥生時代の遺構としては比較的良好なものである。

しがらみ 河道SD 102では、幅1.5m前後の河道本流の中に5か所のしがらみ遺構を検出した(しがらみNo.1～5)。しがらみNo.3・4以外のものは、遺存状態が悪いもので水圧によって倒壊したものが残存していたものと考えられる。

基本的な構造はすべて同様で、河道の中に土手状の高まりを盛り上げ、そこに杭を10本程度打ち込み、その上部に横木を取り付け、その横木から藁状の植物を敷くという形態が採用されている。本体はその藁材の上にも粘土をのせ、水の浸透を防いでいたものと推定される。この藁材の厚さは、遺存のよい部分は厚さ約5cmである。遺存状態の良いしがらみNo.4では、高さが1mを超えるものであるが、このしがらみの機能としては、水を大量にせき止めるようなものではなく、同時に複数のしがらみを構築することで、流水量・水圧を調整し、河の水をある程度ためておくような水溜め状の遺構ではなかったかと推定される。

この河道内から、比較的多量の遺物が出土しており、それらから古墳時代前期前半(布留式前半期)の遺構であると考えられる。

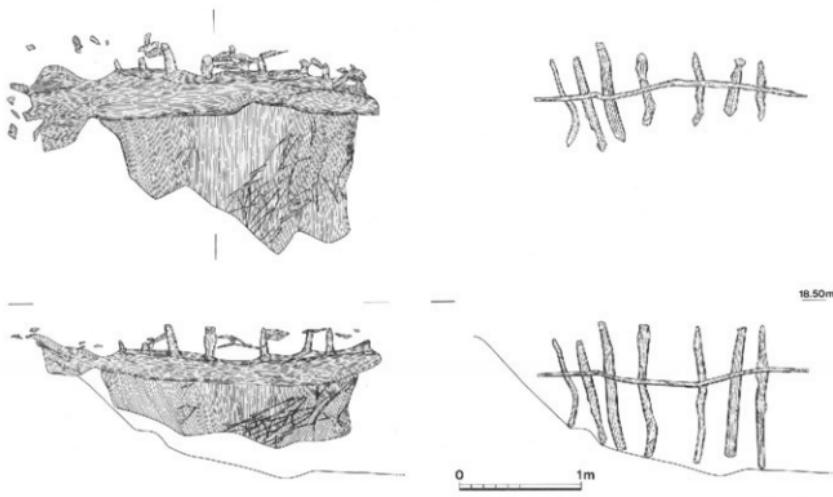


fig.196 しがらみNo.4 平・立面図

SD 101 調査区内で「く」の字に屈曲する河道で、最大幅5m、深さ1mを測る。東側が一段低くなっている。西側の一段高くなった部分には杭が4本打ち込まれていた。いずれも根元部分が遺存していたが、本来ここにもしがらみ状の施設が設けられていた可能性がある。

遺物は河道SD 102と比較すると少なくなっているが、古墳時代前期の範囲にはおさまるものと考えられる。

また、調査区南東部では第6区の第3遺構面の河道につながる河道も検出されている。

**出土遺物** この面に伴う遺物の多くは、第2遺構面下部の遺構から出土したものである。上部の遺構については遺物が少なく明確ではないが、古墳時代におさまるような遺物が出土しており、概ねこの時期の中にはおさまるものと考えられる。

下部の遺構の伴う遺物は豊富であるが、その多くは河道SD 102から出土したものである。遺物の多くは、5か所検出されたしがらみ周辺から出土しており、中には古墳時代前半（布留式前半期）の小型丸底壺の完成品に近いものなども含まれており、しがらみを構築する際に何らかの祭祀を行った可能性もある。

また、河道SD 101からも古墳時代前期の遺物が少量出土し、川岸の部分では弥生時代後期後半の遺物を伴う遺構が営まれていることが明らかになった。土層の堆積状況から河道SD 101が河道SD 102に先行して流れていたものと考えられる。

**第18区** 層序は、第1層（現代耕土）、第2層（床土）、第3層（遺物包含層）、第4層上面が第1遺構面、第5層上面が第2遺構面、そして第6層上面が第3遺構面になっている。

**第1遺構面** 第1遺構面では、遺構が検出されなかった。

**出土遺物** 遺物は第3層（遺物包含層）から出土したのみで、遺物の量も多いものではなかった。時期的には、平安時代後半から末頃のものが出土している。

**第2遺構面** 第2遺構面では、溝3条が検出された。SD 103は、第6区のSD 106に接続する溝である。

溝SD 101・102は、浅いもので遺物も少なく、その時期についても明確でない。しかし、第6区の第2遺構面が概ね奈良時代を中心とする時期であることから、この面についても奈良時代のものである可能性が高い。

**出土遺物** この面に伴う第4層からは遺物の出土は少ない。遺構の中からも遺物の出土は少なかった。

**第3遺構面** 第3遺構面では、溝3条と浅い落ち込みが1基検出された。

SD 201は、第6区のSD 201に接続する溝である。他の2条の溝は浅いもので遺物の出土もみられなかった。

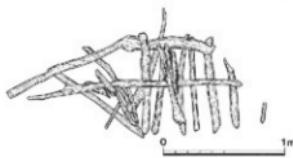
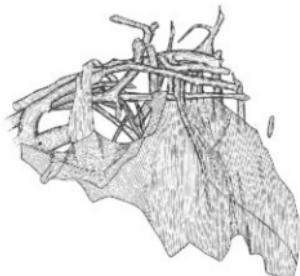


fig.197 しがらみNo.5 平面図

落ち込み SX 201 も浅いもので、遺物は出土していない。

**出土遺物** この面に伴う第 5 層や遺構の中からは遺物の出土は少なく、その時期については明確にできないが、隣接調査区である第 6 区の関係から、この面に伴う遺構・遺物も古墳時代のものである可能性が高いものと考えられる。

**3.まとめ** 今回の調査では、弥生時代後期後半から平安時代末までの遺構・遺物を各区において検出することができた。以下、簡単にまとめてみると、以下のとおりである。

第 1 区南第 1 遺構面では弥生時代後期後半から終末の遺構・遺物が検出された。

第 6 区第 1 遺構面では、第 4・5 区とはほぼ同時期、あるいはやや後出する可能性のある掘立柱建物が 2 棟検出された。第 2 遺構面では奈良時代を中心とする溝群が検出された。奈良時代のまとまった遺構群は、二ツ屋遺跡のこれまでの調査範囲の中では初めての調査例となる。また、新たに第 3 遺構面が検出され、古墳時代前期の河道が調査された。

第 13 区では遺構・遺物は多くないが、古墳時代頃の遺物が検出されている。

第 15・16 区の調査は、第 1 遺構面では溝を主体とする遺構が検出された。これらは近世以降のものを除けば、条里の地割りに関連する遺構の可能性が高い。また、この溝の中からは軒平瓦や軒丸瓦が出土しており、平成 4 年度に調査した第 4・5 区の平安時代末の邸宅跡以外の地点では 4 点目である。

第 2 遺構面では遺構密度は相対的に少なく、出土遺物も少なかった。しかし、時期的には弥生時代中期後半のものと考えられることから、これまで調査した範囲の中では最も古い時期の遺構の 1 つである。二ツ屋遺跡の開始期を知る上で重要な発見である。

第 17 区第 2 遺構面の下部遺構では、しがらみが 5 か所検出された河道を調査した。前年度調査した第 2 区の弥生時代後期後半のしがらみとの対比で貴重な資料が得られたことになる。また、この河道の北側には、弥生時代後期後半の遺構面が確認された。この遺構面は北側にある池の方に広がる可能性がある。この地区は北側への小さな谷部の開口部にあたる部分で、この東側の第 6 区ではこのような遺構面は検出されていない。そのため、極めて小さな面積を占めていた集落であったか、あるいは東へも本来は広がっていたが、古墳時代の河道などによって削平を受けたため現在遺存していないかのいずれかであると考えられる。

第 18 区では、第 6 区同様に遺構面が 3 面検出された。

以上のように今回の調査では、全調査区において遺構面が 2 面以上確認され、部分的には 3 面遺構面が確認されている。しかし、第 6・17・18 区を除いては想定的に遺構・遺物は希薄であった。しかし、時期的には今回新たに古墳時代後期後半・奈良時代などの遺構が確認され、遺跡が各時代ごとに若干の空白期がみられるものの、概ね継続していたことが明らかになった。

第 17 区第 2 遺構面下部で検出された 5 基のしがらみ遺構は、極めて近接して築かれたもので、このように近接して営まれたしがらみは、これまでの神戸市内の調査では未確認の形態である。しかも、倒壊した状態で出土するものは多いなかにあって、しがらみ No.4 はほぼ元の位置を保つものであり、今後しがらみの構造を考えていく上で貴重な資料である。これらは前年度の第 2 区で検出された弥生時代のしがらみとは形態が異なるものである。

## 25. 小山遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

今回の調査地は、これまで散布地として知られていたが、遺跡の詳細については不明であった。

当該地は明石川とその支流谷川の合流点付近に位置し、調査地の北側一帯は明石川左岸の河岸段丘上で、南側一帯は沖積地である。現在は水田としての土地利用がなされている。

周辺には鎌倉時代前半の掘立柱建物が見つかった居住遺跡や、弥生時代から中世にかけての大複合遺跡である玉津田中遺跡が存在し、平安時代末頃の掘立柱建物数棟で構成される邸宅が見つかった二ツ屋遺跡などが知られる。

今回の調査は、玉津町小山地区の土地区画整理事業計画に伴う埋蔵文化財試掘調査の結果に基づくもので、試掘調査の結果、事業計画範囲の一部で遺物包含層や遺構が見つかったために、遺跡の存在する範囲内、区画整理の道路部分についてのみ全面発掘調査を実施することとなった。

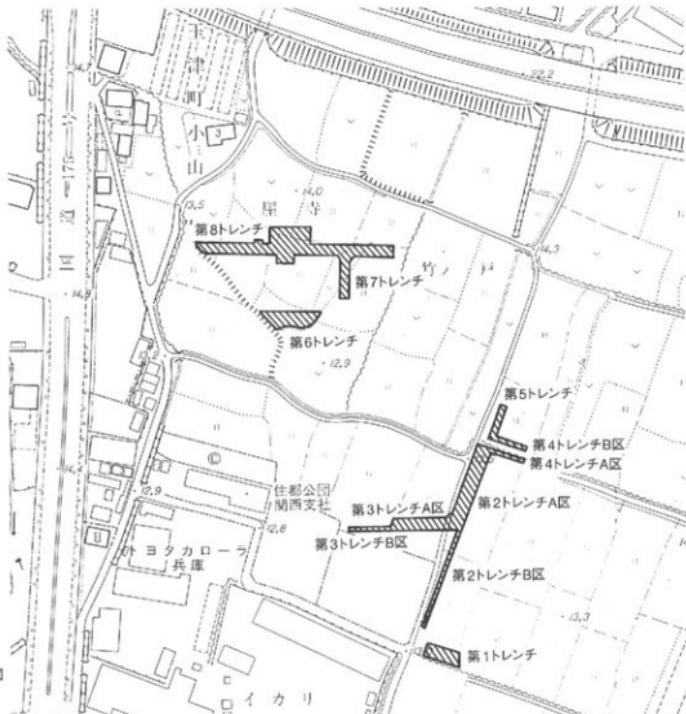


fig.198  
調査地点位置図  
1 : 2500

2. 調査の概要 調査は水田耕作土、床土、旧耕作土までを重機によって掘削した後、人力によって遺物包含層を掘削し、遺構の検出を行った。

第1トレント 第1トレントは調査範囲の南端に位置する調査区で、幅6mのトレントである。遺物包含層からの出土遺物は中世の須恵器片、土師器片で、その出土量は多くはない。

遺構は、トレントの中央付近で南北に走る溝を1条検出したのみで、その他には何も検出されなかった。溝の幅は1.3m、深さ18cmである。遺物の出土はない。

畦畔は検出されなかったが、土層観察から、第1トレントは水田跡と思われ、検出された溝も水田に伴うものと考えられる。トレントの東端では砂礫層が厚く堆積し、第1トレントは水田の東端に位置するものと考えられる。

第2トレント 第2トレントA区は第1トレントの北側に位置する幅6mの調査区である。トレントの北端で溝を6条検出し、南北方向の畦畔を検出した。

SD 01 SD 01とSD 02は平行して流れる東西方向の溝で、SD 01は幅55cm、深さ11cm、SD 02

SD 02は幅43cm、深さ14cmであった。畦畔状の高まりは削平の為かなかったが、このSD 01とSD 02は、現在の水田畦畔が同じ位置に作られていることや、このトレントの西側に延びている農道と方向・位置が合致することから考えて、大畦畔の両脇に存在した溝ではなかつたかと考えられる。

トレント中央付近を南北方向に走る段差を検出したが、これも畦畔と考えられ、トレントの中央付近から東側に一段高い水田が存在したものと思われる。しかし、東側については削平された為に畦畔の高まりが検出できなかったものと思われる。

この水田の時期は、遺物の出土が少なく細片が多い為に詳細には判断し難いが、中世の須恵器、土師器が出土していることから、中世以降現在に及ぶ水田と思われる。

このような調査成果から、第2トレントB区の調査では道路幅の全面調査から、トレント幅を縮小しての調査方法を探り、遺構の状況を確認することを先行させる調査を行った。

A区との接点付近で段差を検出したが、これもA区で検出された畦畔と方向を同じくするものである。

第3トレント 第3トレントA区では、第2トレントA区との接点付近で大畦畔を検出した。大畦畔は幅1.8m、高さ24cmで現在の農道の下で検出された。この大畦畔から西側に向かっては緩やかに低くなっていく。

第3トレントB区の調査は、幅約2mのトレントで行った。調査の結果、水田層と思われる土層は確認したが、畦畔等は検出されなかった。

第4トレント 第4トレントは、第2トレントの北側に位置する道路幅6mの調査区であるが、調査区の中央を東西方向の用水路が流れているため、調査はまず用水路の南側に幅1mのトレントを設定し行った。このトレントをA区とする。その結果、幅54cm、深さ10cmの溝1条を検出したのみであった。

第4トレントB区は、第4トレントA区と用水路を挟んで北側に位置する、幅1mのトレントで、調査の結果、南側に落ちる段差が検出されたのみであった。

第5トレント 第5トレントは第4トレントB区と接する北側のトレントで、調査の結果、若干の中世須恵器片、土師器片が出土したのみで、遺構は検出しなかった。

**第6トレンチ** 第6トレンチは第1～5トレンチの北西方向に位置する調査区である。旧床土の下層に堆積する疊混じりの砂質シルト層や砂礫層が遺物包含層で、遺物包含層には中世の須恵器、土師器、弥生土器が含まれている。調査区全体でピットが検出され、掘立柱建物を3棟検出した。その他には土坑2基、溝1条が検出された。

SB 01 1×2間（3.3×3.5m）の掘立柱建物である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

SB 02 1×2間（3.1×3.6m）の掘立柱建物である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

このSB 01とSB 02は近接しているため、同時に存在していたとは考えられないが、建物の規模やピットの規模も類似しており、時期差があるものの、短期間での建て替えが行われたものと思われる。

SB 03 1×4間（3.5×6.5m）の掘立柱建物である。出土遺物から古墳時代のものであると思われる。

SK 01 不定形な土坑で、最大幅1.7m、深さ21cmであった。遺物は出土していない。

SK 02 楕円形の土坑で、長径1.7m、短径1.1m、深さ31cmであった。土師器が出土している、細片であるため時期の判別は困難であるが、古墳時代のものと考えられる。

**第7トレンチ** 第7トレンチは第6トレンチの北東に位置する、道路幅4mのトレンチである。旧床土の下層に砂礫層が堆積し、若干の遺物が出土した。遺構面は北に向かって緩やかに高くなっていく。遺構は土坑5基、ピット数基を検出した。遺構からの遺物の出土はなく、時期については不明である。

**第8トレンチ** 第8トレンチは、第7トレンチの北側に位置する幅6mの調査区で、東西方向に延びるトレンチである。便宜上、トレンチを5区に分け、東側から順に1区、2区とした。遺構は古墳時代初頭の竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑55基、溝21条、ピット数十基で、その密度は西側に行くほど増し、遺物包含層も2区・3区にかけては地表面から30cmほどの深さの耕作土、床土直下に厚く堆存していた。

SB 01 一辺4.8m、深さ20cmの方形の竪穴住居で、主柱穴は4本柱である。柱穴の掘形は直径40cm前後で、周壁溝はなかった。埋土からは古墳時代初頭の土師器が出土している。

SB 02 SB 01の西側で検出された7.3×7.4m、深さ24cmの方形の竪穴住居で、主柱穴は4本柱で、柱穴の掘形は直径30～40cmである。SB 01同様に周壁溝はない。住居の埋土から出土した遺物や床面の土坑の出土遺物から、SB 02の時期も古墳時代初頭と考えられる。

SK 56 SB 02の床面で検出された直径68cmの土坑で、土師器の壺が出土している。

SK 57 SB 02の床面で検出したSK 57は長径1.2m、短径70cmの土坑で、土坑の上面にはこぶし大の礫を敷いていた。礫の上面から土師器が出土している。

SB 03 5区で検出された2×3間以上（4.4×5.5m以上）の掘立柱建物で、東側に欄列が検出された。時期については不明である。

SK 01 第7トレンチとの交点付近で検出した、長径2.8m、短径2.4m、深さ42cmの楕円形の土坑で、弥生時代前期の壺が出土している。

SK 02 2区で検出した長径1.2m、短径95cm、深さ17cmの楕円形の土坑で、弥生時代前期の壺

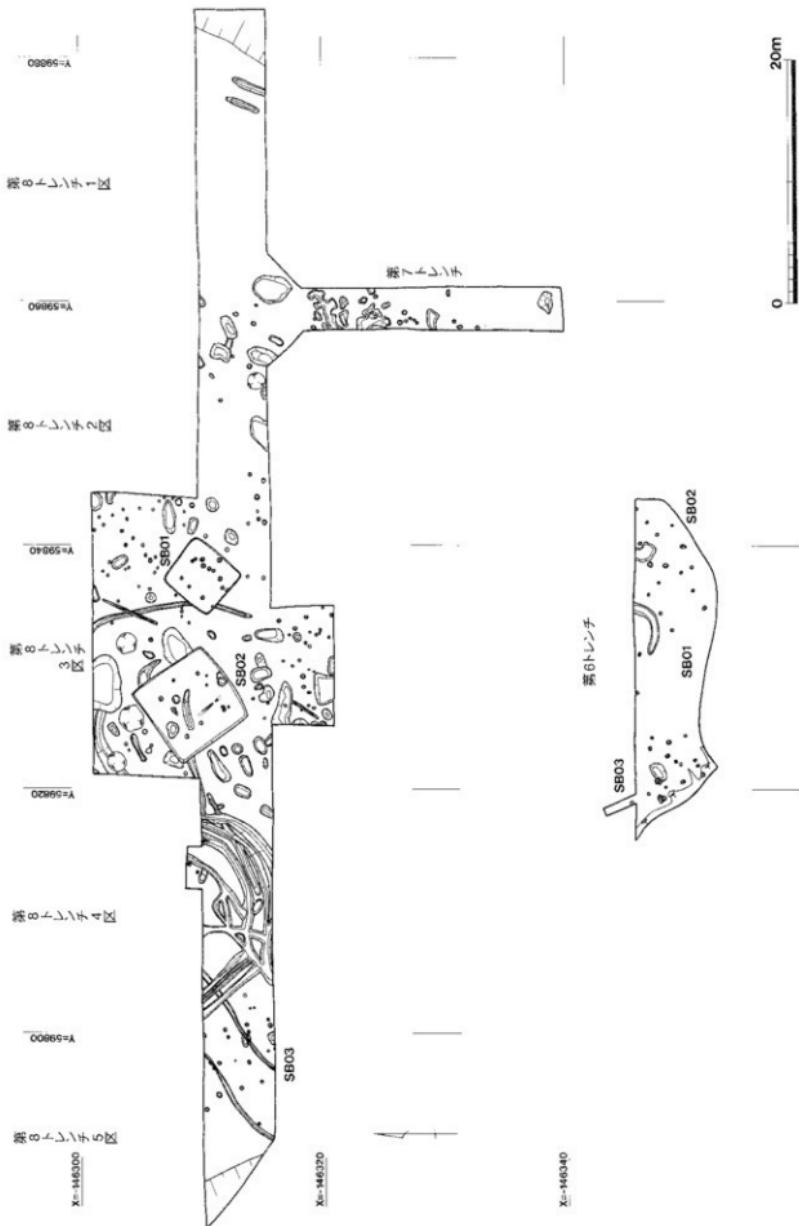


fig. 199 第6・7・8トレンチ遺構平面図

が出土している。

- SK 03・04 SK 03～11に関しては時期を判断し得る遺物の出土はなかったが、埋土が類似していることから、SK 01とほぼ同時期のものと判断することが出来ると思われる。
- SK 22 長径2.4m、短径1m、深さ32cmの土坑で、弥生時代前期の土器が出土している。
- SK 25 長径1.8m、短径1.2m、深さ14cmの楕円形の土坑で、比較的多くの遺物が出土した。出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。
- SK 27 遺構が調査区外に延びる為、全体の形を知ることは出来ないが、検出された最大幅2.6m、深さ25cmの土坑で、遺物が多く出土している。この土坑から出土した遺物にはミニチュア土器が数点含まれており、特殊な意味合いを持った土坑であると思われる。また、すぐ近くの遺構面からは長さ8mm、直径2mmの碧玉製管玉1点が出土している。
- SK 39 一部をSB 02に切られているが、長径2.6m以上、短径2.3m、深さ34cmの楕円形と推定される土坑で、弥生時代前期の壺が出土している。
- SK 40 一部をSB 02に切られているが、長径2.8m以上、短径90cm、深さ16cmの三日月形をした土坑で、古墳時代初頭の壺、甕、高坏が出土している。
- SK 49はSB 02の床面で検出された土坑で、長径1.4m、短径1m、深さ8cmで、弥生時代前期と思われる壺の底部が出土している。
- SK 52は長径1.7m、短径90cm、深さ16cmの楕円形の土坑で、弥生時代前期の壺の一部が出土している。
- SD 01 1区ではSD 01・02が検出されたが浅い溝で、中世の須恵器、土師器の細片が若干出



fig.200  
第8トレーンチ  
全景

SD 02 土したのみである。この SD 01 の検出された辺りから、遺構面は緩やかに東に向かって低くなり、牛の足跡が多数残る軟弱なシルト層の堆積になる。これより東側については水田が拡がっているものと考えられる。

SD 07 ~ 16 4 区では多くの溝が検出された。SD 07 ~ 16 はいずれも弧を描き、北から南西方向に向かって調査区を横切っている。SD 07 は幅 1 m、深さ 50cm で、検出した溝の中では最も規模が大きく、しっかりとした溝である。SD 09 については、他の溝より、一部で深い部分があり、調査区内でその長さを留めている。

どの溝からも遺物の出土は多く、特に SD 16 からは多くの遺物が出土している。時期については、概ねどの溝も古墳時代初頭に納まるものである。

SD 17 ~ 19 SD 17 ~ 19 は、SD 07 ~ 16 とは方向を異にし、埋土の状況も若干異なるようである。また、SD 15 に合流しており、SD 07 ~ 16 と同時期の溝として機能していたのであろう。

SD 20 5 区では、北東から南西方向に延びる 2 条の溝が検出されている。この 2 条の SD 20 ~

SD 21 21 は規模も深さもほぼ同一である。出土遺物から古墳時代初頭のものと思われる。

**試掘調査** 第 6 トレンチの調査結果により、当初の試掘調査の結果で判断した遺跡の範囲が、さらに拡がる可能性が起った為に、トレンチ調査による試掘調査を、全面発掘調査と並行して行い、遺跡の範囲を明らかにすることとなった。

試掘調査は遺跡の拡がりを確認するために、当初の遺跡範囲推定ラインから外側に向けてトレンチを設定して行い、平成 6 年 2 月に 12か所のトレンチ調査を実施した。

その結果、第 1 トレンチにおいて柱穴と思われる遺構を 2 基確認し、第 2 トレンチでは遺物包含層を確認した。第 11 トレンチでは遺物の出土はなかったが、遺構が存在する可能性のある遺構面が拡がっている。

第 9 トレンチ、第 12 トレンチについては、遺構、遺物の出土がなく、当初推定していた遺跡の範囲は狭まった。

その他のトレンチについても、遺構、遺物の出土はなく、当初の遺跡範囲と変更はないものである。

**3. まとめ** 今回の調査によって、南側地区の第 1 トレンチから第 5 トレンチについては、沖積地に造営された水田跡が存在することが明らかになった。この水田は中世以降、現在に及ぶ長い期間に渡って営まれたものである。

調査範囲の北側に位置する第 6 トレンチから第 8 トレンチは河岸段丘上に残された遺跡で、古墳時代初頭の遺構を中心に、弥生時代前期の遺構も発見され、周辺ではこれまであまり知られていない当該期の遺跡が発見されたことは大きな成果であった。

特に、竪穴住居や掘立柱建物といった、集落の中心を形成すると思われる遺構の発見は、今後、周辺の遺跡との関わりや、遺跡の変遷を考えていく上で極めて重要な発見であったと思われる。

出土遺物も古墳時代初頭の遺物を一括する土坑がいくつか検出されているため、貴重な資料となるものと思われる。

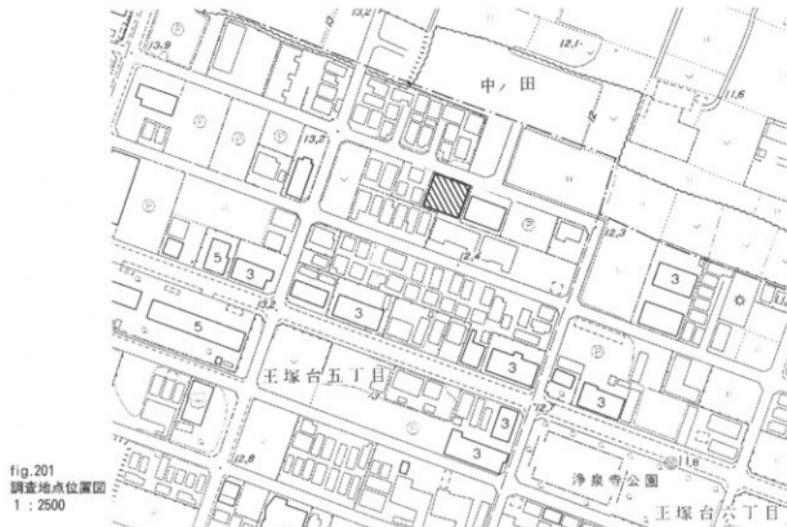
今後、さらに調査が進めば古墳時代のみならず、弥生時代前期の住居跡等の発見も期待され、小山遺跡の重要性はさらに高まるものと思われる。

## 26. 出合遺跡 第32次調査

### 1. はじめに

出合遺跡は明石累層による丘陵上から明石平野へと続く標高約12~15mの地域に位置している。

集落は弥生時代中期に始まり、現在までに居住域、墓域、生産域が共に確認されている。古墳時代前期は遺物が確認されるだけだが、後期には大規模な集落が造られ、丘陵上には帆立貝式古墳である亀塚古墳を含む古墳群も存在した。また、韓式系土器を焼成した可能性が考えられている窯跡等も検出されている。



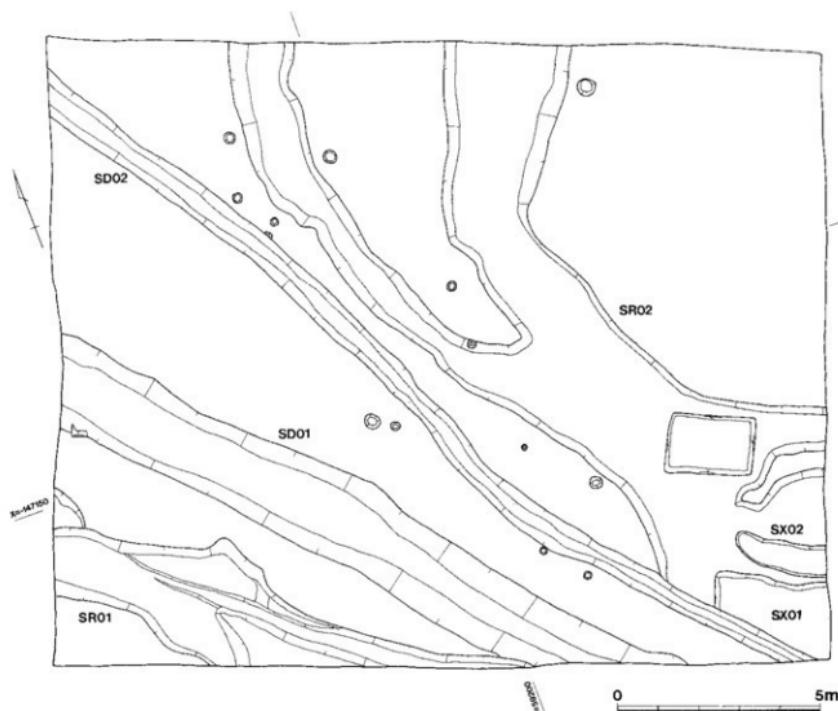


fig.202 遺構平面図

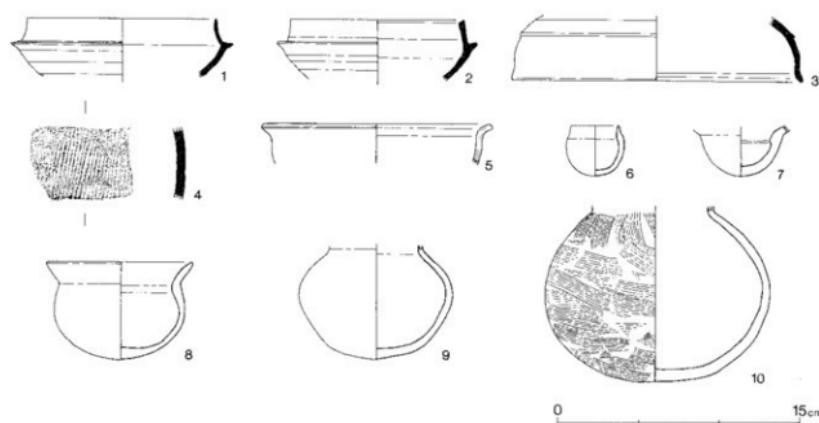


fig.203 SR 01 出土土器実測図

韓式系瓦質土器の口縁部（fig.203－4・5）が確認されている。2個体とも小片であり、磨滅を受けている。その他に甌の底部片も確認されている。また、中層～下層からは碧玉製管玉とミニチュア土器が出土している。

SR 02 幅約140～390cm、深さ約30cmを測り、暗褐灰色極細砂質シルトが堆積している。洪水等により一時的に形成された流路であろう。

また、この流路と類似した土層がSR 02の周囲から南西付近一体に堆積している。SR 02と同じく洪水等による堆積層だと推定できる。本来はより広範囲に堆積していたが削平を受け、地形的に低い地域だけに残存したのだろう。

この堆積層からは、韓式系硬質土器の崩部片（fig.204－1～17）が出土している。1は造構面の精査中に確認された遺物である。位置的にはSR 02の上面だが、造構面を削

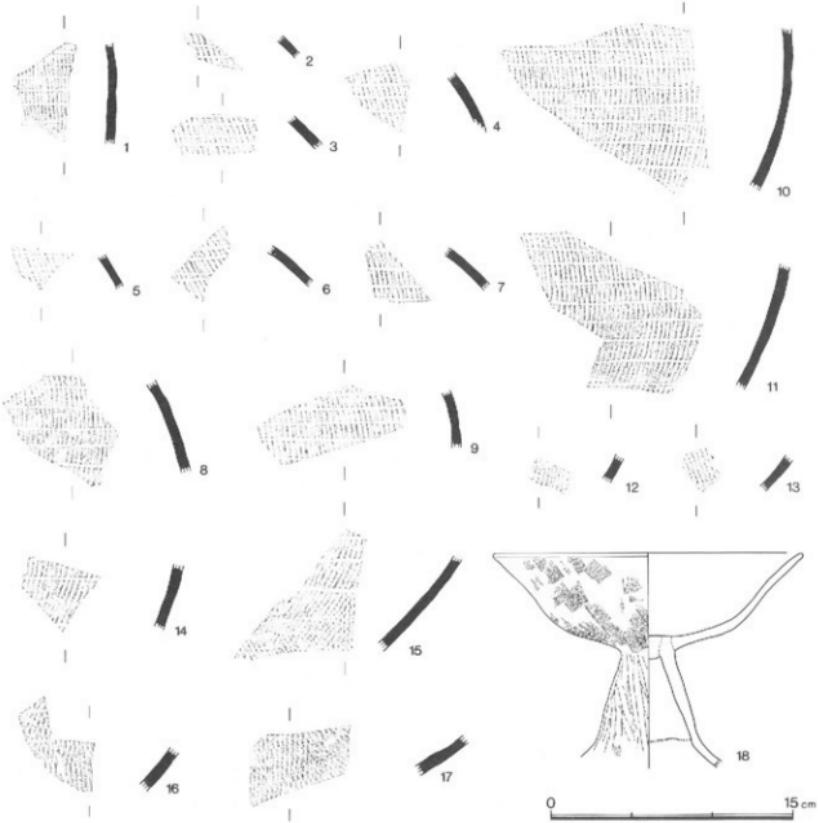


fig.204 SR 02 出土土器実測図

平する近世以降の土層内から出土していた可能性もある。縦方向の平行叩きに横方向の沈線が施され、内面はナデ消しが施される。磨滅をうけており、流された遺物であろう。2～17は同一個体と推定できる。肩部から底部にかけての破片が出土しているが、接合はできない。胴部の最大径は約37.0cmに復元できる。調整は、肩部から底部付近まで縦方向の平行叩きに横方向の沈線が施され、内面はナデ消しが施される。

他に器形が理解できる遺物では、布留式期の高杯（fig.204-18）が出土している。ただし出土した遺物量が少ないため、この高杯が流路の時期を表すか疑問が残る。

SX 01 に削平されており、T K216型式～T K208型式頃より以前の流路である事は理解できる。

**SX 01** 調査区の北西部分で確認され、SR 02 の埋没後にその上面から造られた遺構である。削平を受けたため、本来の遺構の形は不明である。炭混じりの淡黒灰褐色細砂～極細砂が堆積し、方形に近い不定形の浅い落ち込み状に検出した。遺構の底部付近だけが残存したためであろう。北肩は SD 02 に削平され、幅約190cm以上、深さ約4～10cmを測る。SX 02 とも本来は同一遺構であった可能性がある。

時期を判断できる出土遺物には5世紀後半の土師器（fig.205-1～7）がある。須恵器は出土していない。器形から T K216型式～T K208型式頃より新しくならないと推定できる。

これらの土師器に共伴して、韓式系軟質土器（fig.205-8）が出土している。壁面の内部にまで炭素が吸着し、黒灰色となる。胴部はほぼ球形に復元される。調整は胴部上半がナデ消し後に横方向の8条の沈線が施され、胴部下半には正格子叩きが残っている。内面はナデ消しが行われている。

**SX 02** 調査区の北西部分で SX 01 の南側から確認された不定型の落ち込みで、現況では幅約80cm以上×230cm以上、深さ約4cmを測る。淡黒褐色細砂～極細砂が堆積し、5世紀代の小形丸底壺等が出土している。削平をうけており、本来は SX 01 と同一の遺構であった可能性もある。

**SD 01** 調査区の南半で確認され、ほぼ北西～南東方向へ直線的に伸びる溝である。幅約240cm、深さ約70cmを測り、断面でU字形になる。粗砂層が厚く堆積している事実からかなりの水量があったと予想され、水路として掘削された可能性が高い。

遺物は流れ込んだ少量の弥生後期～庄内式併行期の遺物と共に、5世紀代全般の土師器が多く出土している。須恵器は壺の胴部等が数点出土しただけである。小片であり詳細な時期は不明である。

当該地域で、須恵器は T K23型式から一般的となる。T K208型式は存在するが、一部の地域で確認されるだけである。SD 01 から須恵器は出土しているが土師器と比較して極めて僅かであり、広く普及はしていない。共伴する土師器の器形も考慮すると、SD 01 は T K208型式か新しくとも T K23型式の初頭には埋没したと考えられる。

また、これらの遺物に混じり、韓式系土器の破片（fig.206-1～16）が多く確認されている。1～4、6～7は韓式系瓦質土器である。1には粗い繩文が認められる。2は口縁部であり縦方向の平行叩きが残る。3にも縦方向の平行叩きが残り、2と同一個体の

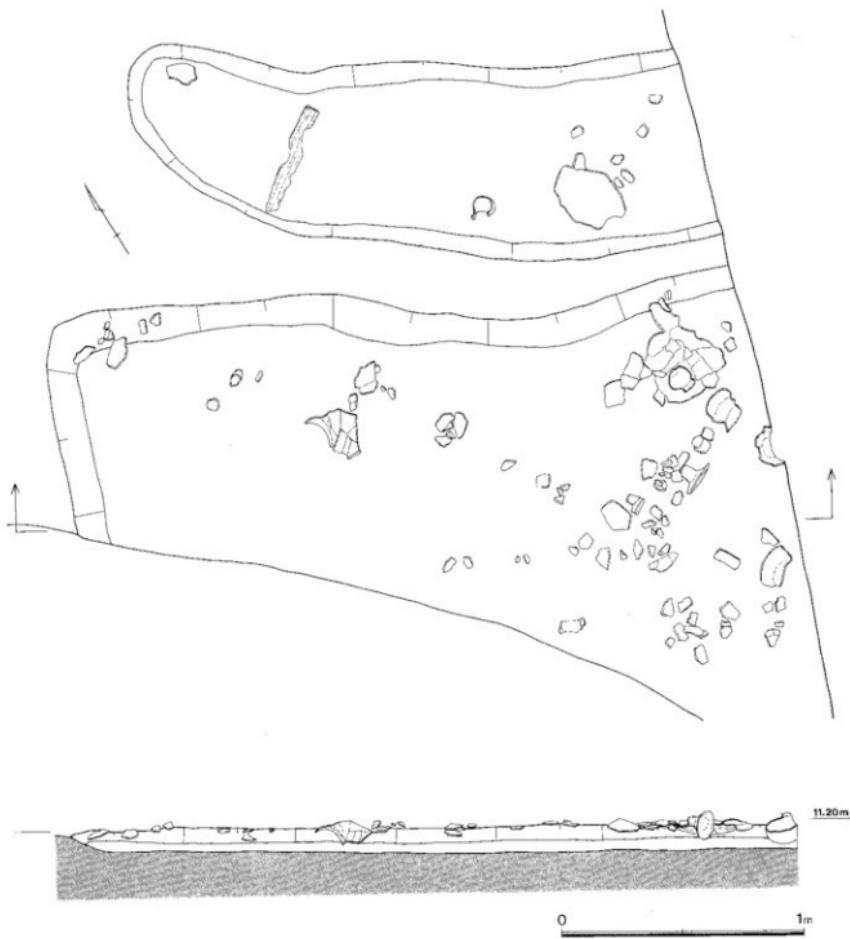


fig.205 SX 01、02 平・断面図

破片に見える。4は縦方向の平行叩きに沈線の入る状況が認められる。6～7は口縁部から頭部にかけての破片であろう。6は造構面の精査中に確認されている。位置的にはSD 01の上面であり、溝が廃棄された以降の堆積層からの出土になる。磨滅も激しく、流入した遺物の可能性がある。

5、9～15は韓式系軟質土器である。5には斜格子叩きが認められる。10～15には繩文が認められる。また9には2条の並んだ沈線が施される他、12と14にも沈線が認められ

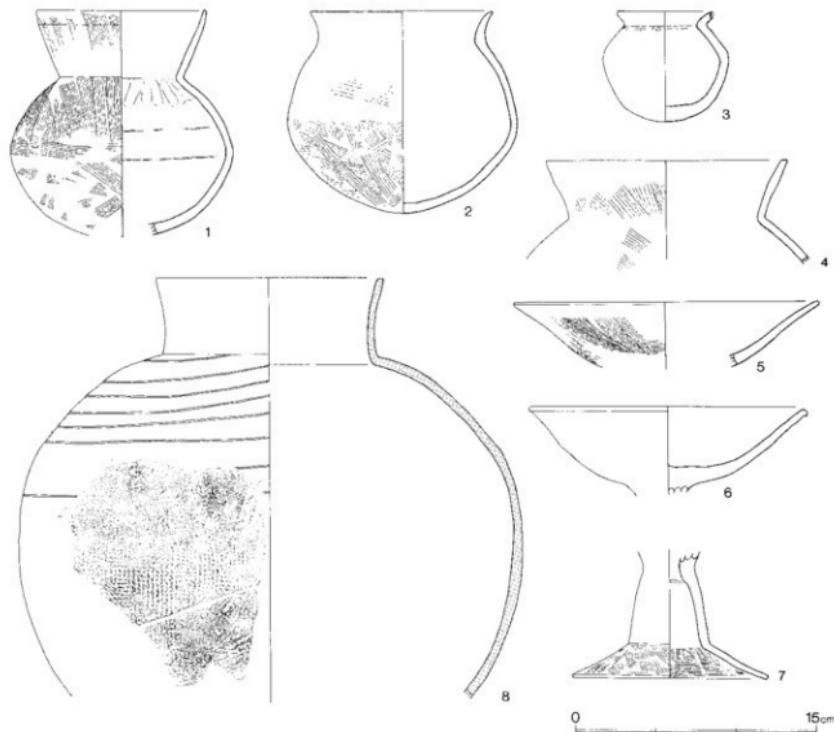


fig.206 SX 01・02出土土器実測図（3・5：SX 02 その他：SX 01）

る。8は手づくねのミニチュア土器である。16は平底鉢底部の可能性も考えられる。外側は底部からの立ち上がり部分で強いナデが観察され、浅い凹線状の溝みとなっている。また、内面にも底部からの立ち上がり部分でナデを行っている。

**SD 02** 調査区のはば中央から確認された、幅約80cm、深さ約22~30cmを測る溝である。SD 01にはば平行して北西~南東方向へ直線的に伸びておりSX 01を削平している。シルト質極細砂が堆積しており、堆積土層を確認する限り大きな水流は確認できない。甕片が出土した他に、遺構の時期を判断できる遺物は出土していない。

**ピット** すべて直径約20~30cmを測り、淡黒灰色シルトが堆積している。建物や柵列としての並びは確認されなかった。

遺物は土師器の小片が僅かに出土しただけであり、遺構の時期は不明である。

**遺構面下層** 遺構面は主に洪水等で堆積した灰褐色細砂~極細砂で形成され、5世紀以前には不安定な地盤であったことが予想できる。おそらくSR 02の堆積時期と相前後して、周囲の地

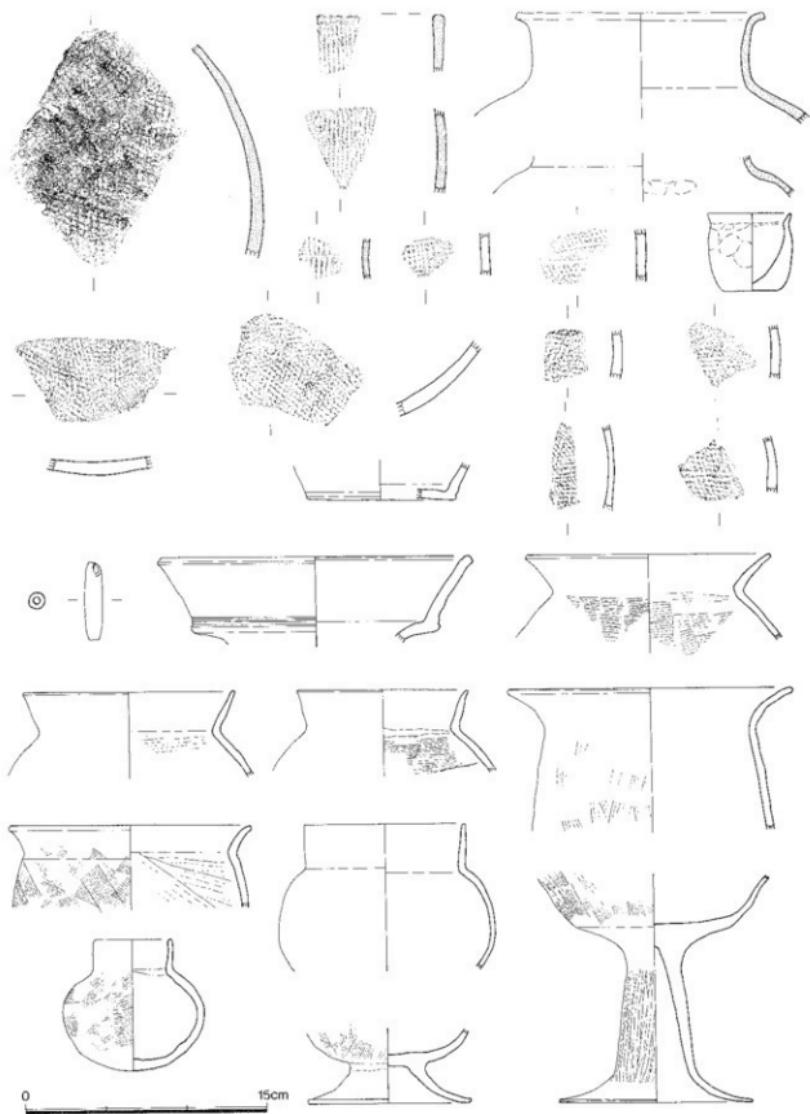


fig.207 SD 01 出土土器実測図

盤も比較的安定したのだろう。

遺構面を形成する流土内からは布留式期の甕が破片で数点出土している。

より下層には少量の弥生時代第Ⅲ様式の遺物を含む灰褐色極細砂質シルト層が続くが、遺構は確認されていない。

### 3.まとめ

今回の調査では、多くの遺物と共に5世紀～6世紀前半の溝や流路等が確認されている。また周囲で実施されている調査でも古墳時代後期の溝とピットが確認され、遺構の検出状況では今回の調査とほぼ同様の結果が得られている。住居跡や建物等を構成する柱穴の並びは確認されていないが、居住域であることは明らかである。

出合遺跡で古墳時代後期に形成された集落からは、韓式系土器の出土することが知られている。また床に階部と考えられる段差が存在し、灰原も灰穴状を呈する特異な構造を持つ窯跡が確認されている。甕や楕等の韓式系軟質土器が出土した事実から、韓式系土器を焼成したと推定されている。この周囲から製作用具の無紋当て具も出土しており、集落内で韓式系土器を製作していた可能性は高い。

今回の調査でも、5世紀代の遺物と共に多くの韓式系上器が出土している。韓式系土器の出土した遺構はSD 01、SR 01、SR 02、SX 01である。ただ、SR 01で出土した韓式系土器には著しい磨滅が観察される。量的にも小片が僅かに出土しただけである。現在までの調査例では出合遺跡には5世紀代に韓式系土器が出土する事実が知られており、SR 01は6世紀前半に位置付けられるために時期差が認められる。

今回検出された韓式系土器を伴う遺構は主にTK216型式とTK208型式を中心とする時期であり、硬質土器、瓦質土器、軟質土器がすべて確認されている。出土量を比較すると、硬質土器は時期的に最も古いSR 02から出土したもの除き、磨滅した小片が僅かに出土しただけである。量的に多いのは日常用雑器と想定されている軟質土器であり、瓦質土器も比較的多く確認されている。また、これまでの調査例を合わせると器種も多数にわたっている。窯跡等の存在も合わせると、5世紀代の出合遺跡に造られた集落に渡来人集団が居住していた可能性は非常に高いと思われる。

たまつたなか  
27. 玉津田中遺跡 第7次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の洪積段丘から沖積地に広がる遺跡である。発掘調査は、昭和57年～平成3年にかけて兵庫県教育委員会によって実施されており、縄文時代から鎌倉時代の遺構が検出されている。今回の調査対象地の平野地区は、県営平野地区土地改良事業に伴い、昭和63年度に実施された分布調査の結果、埋蔵文化財の存在が明らかになった地区である。平成元年度以降、試掘調査と本調査が実施されており、弥生時代前期・後期、古墳時代中期・後期の集落址・流路などが検出されている。また、これらの周囲には水田跡が検出されている。度重なる調査によって集落と水田の関わりが徐々に解明されつつある。

調査地に最も近接する遺跡として、福中城址（室町時代）がある。この他に、周辺の遺跡として北方には常本遺跡（弥生時代・古墳時代）、黒田遺跡（弥生時代・古墳時代・平安時代）、西戸田遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などが、東方には芝崎遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などがある。また、南方には、出合遺跡（弥生時代～鎌倉時代）、居住・小山遺跡（弥生時代～鎌倉時代）、居住遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などがあり、西方の明石川



fig.208  
調査地点位置図  
1 : 5000

西岸丘陵上には、上喰池遺跡（旧石器時代）、印路遺跡（縄文時代～平安時代）などがある。

これまでの調査結果から以上の遺跡の中で、玉津田中遺跡は弥生時代全般を通して拠点集落としての位置を保ち続け、後の古墳時代へと続いている。

## 2. 調査の概要

今年度は圃場整備に伴う東西排水路予定地4か所（13・15・16・21トレンチ）と、南北排水路予定地1か所（14トレンチ）、宅地排水路予定地3か所（18～20トレンチ）の合計8か所を対象に調査を行った。

### 13トレンチ

13トレンチは、本事業地の南東隣に位置する、幅約1.6m、全長約52mの調査区で、兵庫県教育委員会が調査を実施した二ツ郷地区の西側に接する地点にある。

第1遺構面（T.P.15.780m）、第2遺構面（T.P.15.630m）、第3遺構面（T.P.15.560m）、第4遺構面（T.P.15.230m）の4時期の遺構面が確認できた。

#### 第1遺構面

特に遺構らしいものではなく、窪地に流れ込んだ土器の小破片が数点出土した。出土遺物から鎌倉時代以降の遺構面と考えられる。

#### 第2遺構面

調査区のはば中央で南北に流れる自然流路（幅約9m、深さ約1.6m）を検出した。流路の中より出土した遺物から、飛鳥～奈良時代の遺構面と考えられる。

#### 第3遺構面

北西方向の小溝を6条検出した。これらの溝からは、いずれも遺物が出土しなかつたため、時期などは不明である。

#### 第4遺構面

調査区の東端で、幅約0.9m、長さ約3.8mの長楕円形の土坑状遺構と、調査区のはば中央で南北に流れる自然流路、調査区の西端で北方へ落ちる地形を検出した。中央の自然流路には、井堰と思われる杭2本と横木1本を検出したが、遺構の大半を第2遺構面より切り込んだ自然流路により削平されているため、全貌は不明である。いずれの遺構からも時期を特定する遺物が出土しなかつたため、時期については不明である。

### 14トレンチ

14トレンチは幅2～3.5m、全長約435mの南北方向のトレンチで、今回の調査地区的主たる面積を占めている。

第1遺構面（T.P.20.350～20.200m）、第2遺構面（T.P.19.950～19.670m）、第3遺構面（T.P.20.205～19.670m）、第4遺構面（T.P.20.000～19.450m）、第7遺構面（T.P.18.540～17.800m）の5時期の遺構面が確認できた。このトレンチは、調査区が南北に435mあるため、北から10m毎に1～43区に地区割りを行った。

#### 第1遺構面

4区（SD 101）と10区（SD 102）で東西方向の溝をそれぞれ1条、11区でも東西方向の溝を2条（SD 103・104）を検出した。遺構の時期については、出土遺物がほとんどないため不明であるが、以前の調査結果から室町時代以降の時期と思われる。規模については以下のとおりである。

SD 101 最大幅 0.6m 最大深 0.15m

SD 102 最大幅 0.3m 最大深 0.06m

SD 103 最大幅 1.2m 最大深 0.4 m

SD 104 最大幅 1.2m 最大深 0.4 m

#### 第2遺構面

17区で幅約1m、深さ約0.07mの溝1条と25区で幅約1.3m、深さ約0.24mの溝1条を検出した。遺構の時期は、出土遺物から飛鳥～奈良時代のものと思われる。

SD 201 16区では南北方向の幅約 14.8m、深さ約 0.62m の流路を検出した。この流路は、二段に落ちる緩やかな肩をしており、出土遺物から飛鳥～奈良時代に機能していたものと思われる。

第 3 遺構面 水 田 1～7 区と 12～19 区にかけて水田跡を検出した。この水田は幅 0.6m、高さ 0.03m の小畦畔で区切られたもので、17 区では水田に水を引き入れる水口も検出された。一筆の規模はトレンチ調査のため不明である。畦畔などの構造物も、後の洪水によって削られているため保存状態が良好とは思われないので、拡張による規模の確認などは行わなかった。

SD 301 18 区で南北方向の幅 1.8m、深さ 0.6m の溝を検出した。この溝には、幅 1.4m、高さ 0.15m の堤が溝の両肩に設けられていた。出土遺物から古墳時代後期（6世紀後半）の溝と思われる。

SD 306 SD 301 に削られた状態で、さらに古い時期の溝を検出した。この溝の中で、井堰と思われる幅 1.6m、高さ 0.2m の高まりとそれに伴う杭列を検出した。出土遺物から古墳時代後期（6世紀中葉）の溝と思われる。

SD 302 21 区で南北方向の幅約 6m、深さ 0.8m の溝を検出した。溝は、急傾斜の法面をしており V 字形に近い断面形をしている。出土遺物から古墳時代後期（6世紀後半）の溝と思われる。

第 4 遺構面 19～26 区にかけて存在する微高地 B の上に形成された遺構が検出された。遺構は、すべて溝であるが、種類に大別される。一つは、幅 1m 以上で深さ 0.5m 以上の規模のもので、2 条（SD 416・417）検出した。もう一つは、幅 1m 以下で深さ 0.5m 未溝の規模のもので、合計 5 本（B-SD 01・02・08・09・10）検出した。

SD 416 21 区で検出した SD 416 は、SD 302 によって南半分を削られているが、検出された幅だけで 3m、深さ 0.8m の規模を有する。水の流れた方向は不明であるが、調査区をほぼ真横に横切るようにして検出された。また、溝の中で真横に横切るようにして高さ 0.3m の粘土の高まりに杭を斜面に寝かせるような形で打ちつけ、さらにその上から藁を敷きつめた井堰を検出した。

SD 417 20 区で検出した SD 417 は、調査区をほぼ斜めに横切る南北方向の溝である。この溝は幅 3m、深さ 0.8m の規模で、溝の中には倒木の根株で溝を遮り、その上に黒色粘質土を積み上げ、さらにその上に藁を敷きつめた井堰を検出した。

第 7 遺構面 水 田 この遺構面は、青灰色の洪水層により覆われており、比較的良好な保存状態の水田面を検出した。1～7 区では、圃場の規模と水田經營の形態を確認するために拡張を行った。水田一筆の規模は、1～3 区で 16.64～32m<sup>2</sup> の比較的大きな長方形である。4 区では細長く短辺に畦界のない地帯がある。この細長い水田には、当時常に水に浸されていたような粘土の堆積がみられた。5 区では大畦畔を境に水路と思われるものが検出された。6～7 区では再び 8～14.96m<sup>2</sup> の比較的小さな長方形の水田で、7 区の南端で細長く短辺に畦界のない地帯を経て再び水路が存在する。この水田は、この水路を境になくなるが、12 区以南で再び大畦畔を境に水田經營がされている。水田一筆の規模等は不明であるが、水田地域は 24 区の大畦畔を境に終結している。その他、20～25 区にかけては多数の人の足跡と偶蹄目の足跡を検出した。25～43 区にかけては幾筋かの自然流路を検出したが、地形的には

緩やかに傾斜して後背湿地へと続いている。

15トレンチ 15トレンチは、幅2~3.5m、全長約43mの東西南向のトレンチである。

第1遺構面 (T.P.20.400~20.350m)、第2遺構面 (T.P.20.300~20.250m)、第3遺構面 (T.P.20.300~20.100m)、第4遺構面 (T.P.20.000~19.950m)、第7遺構面 (T.P.19.180~18.750m) の5時期の遺構面が確認できた。第5・6面は、遺構面のみを確認した。このトレンチは、調査区が東西に43mあり、西から10m毎に1~4区に区割りを行った。

第1遺構面 調査区西端の1区で南北に伸びるSD 108を検出した。現在使用されている農業用水路によって西肩が破壊されていた。この調査区で検出された遺構は、この溝だけであった。この溝の東側では、牛の足跡が多数検出された。

第2遺構面 14・16トレンチで検出された、飛鳥時代から奈良時代にかけての自然流路が存在する遺構面に対応する。この自然流路に伴う洪水層を確認したが、遺構は検出されなかつた。

第3遺構面 14トレンチの1~7区と12~19区にかけて検出された水田面に対応する遺構面であるが、水田層は確認されたが畔は検出されなかつた。1・2区検出のSD 304は、北と北東方向に分歧する幅2~2.6m、深さ約0.5mの溝である。この他にも、2区で1条、3区で2条の南北方向に伸びる溝を検出している。規模については、以下のとおりである。

SD 305 最大幅 0.4m 最大深 0.15m

SD 306 最大幅 0.9m 最大深 0.25m

SD 307 最大幅 1.7m 最大深 0.3 m

第4遺構面 2区で2条 (SD 404・405)、3区で2条 (SD 402・

403) の南北に伸びる溝を検出した。いずれも出土遺物が少なく、これらの時期を決定し難いが、14トレンチの微高地Bで検出された遺構との関係から弥生時代末頃から古墳時代前期の時期と思われる。規模については、以下のとおりである。

SD 402 最大幅 1.0m 最大深 0.45m

SD 403 最大幅 0.5m 最大深 0.20m

SD 404 最大幅 0.8m 最大深 0.3 m

SD 405 最大幅 0.4m 最大深 0.2 m

第7遺構面 T.P.19.300~19.500mで弥生時代前中期の遺物を含む洪水層を検出した。この洪水

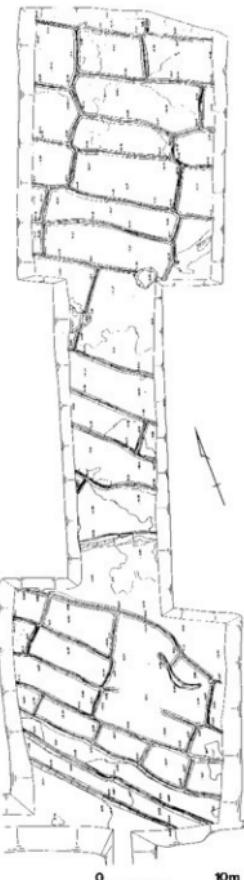


fig.209 14トレンチ水田畦畔

層の下層で黒色シルト層を耕作面とする水田面を検出した。14トレンチで検出された水田に続くものである。14トレンチ7区検出の水路を検出し、その南肩を確認した。そのすぐ西側に幅約0.35m、高さ約0.1mの断面が丸みのある台形の小畦畔によって東西約3.3m、南北約2.3mの区画を行っている。水路の両脇には、8～10m<sup>2</sup>の小区画の水田を造る傾向が14トレンチから窺える。

#### 16トレンチ

16トレンチは全長約80m、幅約2.5mの東西トレンチで、本事業地の支線排水路予定地にあたる。東端は14トレンチに、西端は18・19トレンチにそれぞれ接続する。

第1遺構面 (T.P.20.30～20.48m)、第2遺構面 (T.P.20.30～20.40m)、第3遺構面 (T.P.20.10～20.40m)、第4遺構面 (T.P.20.10～20.40m)、第7遺構面 (T.P.18.80～19.10m) の5時期の遺構面が確認できた。第5・6面は、遺構面を確認したが、遺構の検出はなかった。また、4～6区の第4遺構面より下層については来年度に調査を実施する予定である。

第1遺構面 7～9区で南北方向の溝が3条 (SD 01～03) 検出された。いずれも幅0.4m、深さは0.1m程度である。遺物は出土していないが、包含層の状況からは中世のものと考えられる。

第2遺構面 5～6区にかけて流路 (SD 201) を1条検出した。幅約12mで東西両肩からそれぞれ緩やかに傾斜した後、深く落ち込む。検出面から最深部までは約0.8mである。底部付近に植物遺体が堆積しており、曲物の底板や加工木、自然木 (小枝) などが出土した。

第3遺構面 第3遺構面は水田層である。水田土壤と考えられる灰褐色シルト層はトレンチ全域に認められるが、畦畔は1区において確認された1条のみで、区画などは不明である。畦畔は下辺幅0.6m、上辺幅0.2m、高さ0.1mである。周囲には足跡がみられるが、方向性は認められない。また4～5区において流路 (SD 301) が確認された。幅は約15mで、西肩部に幅約1.8m、高さ約0.3mの堤が遺存しており、この堤上面から最深部までの深さは約0.9mである。

第4遺構面 第4遺構面では流路2条、溝状遺構6条が検出された。

SD 401 SD 301に切られているため全体の規模は不明であるが、幅約3m、深さ約1mが確認された。

SD 409 幅約4m、深さ約1mの流路である。東側、流路の底に沿って6本の杭を打ち込んでおり、護岸施設の可能性がある。杭は最も長いもので約1mで、これらは流路底より約0.5mほどが打ち込まれている。

溝状遺構 上記以外の溝の規模は下表のとおりである。

SD 406	最大幅	1.0m	最大深	0.1 m
--------	-----	------	-----	-------

SD 407	最大幅	0.6m	最大深	0.05m
--------	-----	------	-----	-------

SD 408	最大幅	1.2m	最大深	0.15m
--------	-----	------	-----	-------

SD 409	最大幅	4.0m	最大深	1.0 m
--------	-----	------	-----	-------

SD 410	最大幅	1.2m	最大深	0.25m
--------	-----	------	-----	-------

A - SD 08	最大幅	2.4m	最大深	0.2 m
-----------	-----	------	-----	-------

A - SD 08 A - SD 08は、後述する微高地Aから東へ緩やかに下り、平らな面へと移行した地点

に設けられた溝である。微高地端部からの傾斜は幅3mで、比高差が0.2mと緩やかである。微高地上から遺物が流れ込んでおり、溝を中心とした平坦面付近で多く出土した。

**17トレンチ** 17トレンチは、幅2~2.6m、全長約138mの南北方向のトレンチである。第1遺構面(T.P.20.350~20.200m)、第2遺構面(T.P.19.950~19.670m)、第3遺構面(T.P.20.205~19.670m)、第4遺構面(T.P.20.000~19.450m)、第5遺構面(T.P.19.200~18.400m)、第7遺構面(T.P.18.540~17.800m)の5時期の遺構面が確認できた。このトレンチは、調査区が南北に435mあるため、北から10m毎に1~15区に区割りを行った。

**第1遺構面** 5区で南北方向の溝を1条検出しただけであった。この溝は、現在使用されている農業用水路によって西肩の部分が削平されており、詳細な規模は不明であるが、遺存する部分から復元すれば、幅50cm、深さ30cm程度の溝と推定される。遺構の時期については、出土遺物がほとんどないため不明であるが、以前の調査結果や今年度調査の14トレンチの調査結果から室町時代以降の時期と思われる。

**第2遺構面** 今年度調査が行われた14トレンチの17~19区で検出された、飛鳥時代から奈良時代にかけての自然流路が存在する遺構面に対応する。この自然流路の西側に、建物や水田等の遺構が存在するかどうかを確認するために調査を行った。この自然流路に伴う洪水層を確認したが、遺構は検出されなかった。

**第3遺構面** 14・16・18トレンチで検出された水田面に対応する遺構面であるが、水田層は確認されたが畦畔は検出されなかった。14・16・18トレンチで検出された水田面は6世紀末頃の洪水によって埋没しており、当調査区においても同時期の洪水層を検出した。この洪水層によって、古墳時代後期の水田面は削平されたものと思われる。

**第4遺構面** 14トレンチの調査結果で、微高地Bの存在が明らかとなっている。また、前年度の試掘調査の結果から、19・20トレンチ検出の微高地Aが、明石川の東岸に沿って南側へ伸びる可能性が考えられた地点である。

**微高地B** 1~4区において14トレンチ検出の微高地Bを検出した。4区から西側は、西に傾斜し落ち込んでおり、シルト層や砂層の堆積が見られ、4区以西は後背湿地であったことが明らかとなった。

微高地Bで検出された遺構は、南北方向の溝が3条である。SD401は幅2.3m、深さ70cmで、SD402・403は、幅90cm、深さ15cmの規模である。

14区においては、西から東へ緩やかに傾斜する面を検出した。この傾斜面で弥生時代末頃の土器が出土した。微高地の端にあたると思われるが、すぐ西側は、中世以降の明石川の氾濫源であり、微高地は削平されている。19・20トレンチで検出された微高地Aとの関係は明らかではないが、前年度の試掘調査の結果から、微高地Aが南側に伸びる可能性も考えられる。今後の調査の進展が待たれる。

**後背湿地** 5区から14区は後背湿地にあたり、4か所で堤状遺構を検出した。この堤状遺構からの出土遺物はほとんどないが、微高地Bとの関係から弥生時代末頃から古墳時代前期に築造されたものと考えられる。

**堤状遺構** 6~8区で、ほぼ南北に並行して伸びる2条の堤状遺構を検出した。

**SX401** 6区で検出されたSX401は、幅約1.2m・高さ約20cmの粘土で盛土をした上に、太さ

10~15cmの枝を切断した丸木を並べ、丸木の両脇を太さ約5cmの丸木の杭を打ち込んで留めている。SX 402に比べ規模が小さいが、調査区の堆積状況から削平された堤状遺構の基礎に当たるものと考えられる。また、護岸の杭に転用したのか、木製の鉤が刺さっていた。

SX 402 7・8区で検出されたSX 402は、ほぼ埋没した弥生時代後期の自然流路の西岸付近に小枝を敷き、その上にイネ科植物を敷いて粘土を盛り、その上から太さ約15cm程度の丸木の杭を打ち込み基礎を固めている。更に小枝とイネ科植物を敷き、粘土を盛るという作業を3~4回繰り返し、土盛りが高さ約50cm程度になった時に、両肩がやや高くなる様に粘土を盛りあげている。このうえに小枝を敷き、その上にイネ科植物と思われる植物茎の束を敷いて粘土を盛り、そのうえから太さ約10~15cm、長さ50~60cmの杭を10~15cm間隔に密に打ち込んでいる。杭には丸杭の他に、丸木をミカン割りにした杭や、原本の先端のみ加工した杭がある。この後も同様の盛土が行われ、高さ約90cm以上、基底部の幅約7m・上面幅約3mの断面台形の堤を築造している。堤の両肩には、太さ15~20cm、長さ1.3~1.5mの杭を堤の傾斜に沿って斜めに打ち込み両岸を固めている。もとは、横木を用い護岸をしていたと思われるが、ほとんどが流失している。

SX 404 11区で検出された。幅約6m深さ約20cmの浅い窪みの両岸に、杭と横木で護岸をしている。東岸には杭だけが残っていた。杭と横木で護岸された西岸では、横木に柱材と思われる建築部材を転用している。

SX 405 12・13区で検出された。SX 404と同様に浅い窪みの岸を杭と横木で護岸をしている。この遺構では、東岸にのみ護岸が検出された。SX 401やSX 404と同様に前後に打ち込んだ縦杭の隙間に横木を入れている。横木には丸太材が使用され、なかには、建築部材からの転用材も確認された。

SX 404・405はそれぞれ単独の遺構のようにみえるが、両護岸間には、若干の粘土の高まりがあり、小枝や植物が敷かれていた痕跡があることから、SX 402と同様の幅9~10mの堤状遺構の基礎である可能性が考えられる。

第5遺構面 4区以西で幅約35m、深さ約1mの自然流路を検出した。流路の中程に数本の杭が打ち込まれており、井堰の可能性があるが、遺存度が悪く詳細な状況は不明である。出土遺物には、弥生時代後期半の土器の他に鍬や鋤などの農具の柄と思われるものや、杵、槽等の木製品が出土した。また、赤色顔料を粉末にする石杵なども出土している。

この自然流路は蛇行して流れていたと思われ、9区以西にも流路の痕跡が確認された。

第7遺構面 14~16トレンチで検出された、黒色シルトを耕作面とする水田面である。この水田面が西側へ、どのあたりまで広がるかが問題となっていたが、水田は1区から3区の間で検出された。3区から以西は徐々に傾斜し、落ち込んでいるようで水田坡は、17トレンチで検出された範囲が西限となるものと考えられる。

検出された水田は、2・3区においては幅35cm、高さ約10cm程度の断面が丸みをもつ台形の小畦畔によって、東西幅約3mの区画を行っているが、水田の各区画の規模は、調査区が制限されているために明らかではない。各区画には高低差はほとんどない。3区で検出された1区画は他の区画に比べて深く、浅い皿状をしており、暗灰色シルトが堆積して



fig.210 SX 401、402 平・断面図

いる。14トレンチの状況から給排水のための水路と考えられる。

#### 18トレンチ

18トレンチは全長約40m、幅約2.5mの南北方向のトレンチで、北半部（1～3区）がL字状に東に曲がり、南半部（4～6区）と接続する。

第1遺構面（T.P.20.40～20.50m）、第3遺構面（T.P.20.00～20.20m）、第4遺構面（T.P.19.90～20.00m）、第5遺構面（T.P.19.90m）、第6遺構面（T.P.19.00m）の5時期の遺構面が確認された。

#### 第1遺構面

4～5区で溝2条が検出された。いずれも幅約0.6m、深さ約0.05mである。遺物が小片のため時期は明らかでないが、中世と考えられる。

#### 第3遺構面

1～3区で水田層が確認された。水田土壤は暗灰色シルト層で、1区では東西方向の畦畔（下辺幅1.0m、上辺幅0.4m、高さ0.1m）が2条検出されたが、区画などは不明である。また2区ではこの水田層を貫流する流路（SD 301）が検出されており、南北両肩に最大幅1.0m、高さ0.15mの堤が設けられている。流路幅はこの堤間で約9m、深さ約1mである。このSD 301は14トレンチ18区、16トレンチ4～5区でも確認されており、いずれの地点においても堤が検出されている。本事業地内での総延長は約130mである。

#### 第4遺構面

3区で微高地からの落ちと溝を1条検出した。A-SD 09は幅約1.4m深さ0.1mで、溝内及び溝を覆う微高地からの流れ込み土に多量の遺物が含まれていた。また、この溝の北側には暗灰色・乳灰色・乳青灰色シルトが堆積しており、後背湿地状となっていたと考えられる。

#### 第5遺構面

3区の乳灰色シルト層中で多量の遺物が出土している。いずれも微高地からの流れ込み土に含まれるもので、明確な遺構は検出されなかった。

#### 第6遺構面

灰色亜角礫層より打ち込まれる井堰と考えられる杭列を検出した。径0.1m、長さ1.0mの杭を垂直に打ち込み、この杭を挟み込むように数本の横木がわたされている。

#### 19トレンチ

19トレンチは全長約40m、20トレンチは全長約30mで、L字状に接続する。ともに幅は約2.5mで、19トレンチは東西トレンチ、20トレンチは南北トレンチである。前述した16トレンチ1～3区、18トレンチ4～6区とともに微高地に位置しており、現況でも住宅が建つ部分は比較的の周囲よりは高く、旧地形においても明石川により形成された自然堤防上に位置する高い地盤であったと考えられる。事業地内には他に微高地が存在するため、この部分については微高地Aと称することとした。また19トレンチでは住居跡が確認されたため、一部、トレンチを拡張して住居跡の全容を明らかにする調査を行った。今年度は第1遺構面の記録作業までを行い、下層は来年度に調査を行う予定である。

#### 20トレンチ (微高地A)

ここでは古墳時代初頭（T.P.20.40～20.50m）の遺構面（第1遺構面）が確認できた。検出面での遺構の重複状況から、少なくとも2時期に区分（Ⅰ期、Ⅱ期）できるが、遺物には明確な時期差は認められない。

#### I期

1期と考えられる遺構は柱穴、土坑6基、溝4条である。

#### 柱穴

柱穴は約90基確認された。大半は暗灰色粘質土の单一埋土で、いずれも明確な柱痕は確認されていない。柱穴掘形の径は、ほとんどが0.15～0.2mで、やや大きなもので径0.3mである。約90基の柱穴が検出されたが、建物を構成するには至っていない。

#### 土坑

土坑は7基検出されたが、埋土はいずれも暗灰色粘質土の单一埋土である。

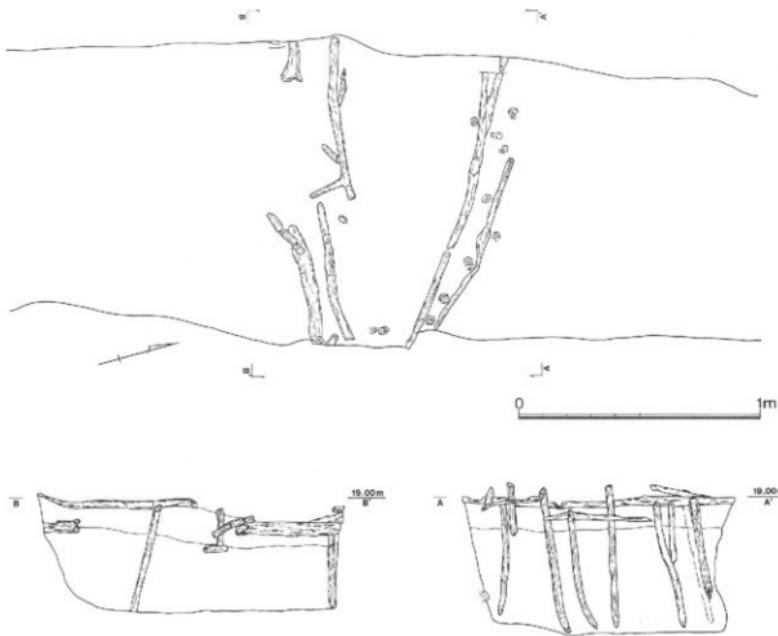


fig.211 第18トレンチ第6遺構面井塚平・立面図

- SK 01 長径 0.7m、短径 0.6m の楕円形で、深さ 0.3m である。中から土師器数点と炭化材が検出された。平面では土坑状に確認できたが、後述する SB 03 の埋土の可能性がある。
- SK 02 調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、径 0.8m ほどの円形の土坑で、深さは 0.2m である。
- SK 03 長径約 0.5m、短径 0.3m の楕円形で、深さ 0.15m である。西側は SD 03 により切られている。
- SK 04 長径 0.5m、短径 0.3m の楕円形で、深さ 0.15m の土坑である。埋土に炭を含み、遺物の出土量も多く、後述する SB 01 の埋土である可能性が高い。
- SK 05 調査区外に広がり、また SD 02 により切られているため、全体の規模は不明である。検出幅は約 0.6m である。
- SK 06 調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、長径 0.4m 以上、短径 0.4m の楕円形と考えられる。深さは約 0.1m である。炭化材を含むことから後述する SD 10 の肩部にあたる可能性がある。
- SK 08 幅 0.5m、長さ 2.0m ほどが確認された。深さが 0.05m と浅く、不定形である。遺構面である黄褐色シルト質細砂層の堆積過程による影響とも考えられる。
- 溝状遺構 調査区を横切る南北方向の溝が確認されており、最終埋土はいずれも淡灰色の極細砂で

ある。

- A—SD 01 一部拡張区においても検出されているが、南側の肩部は自然に消える。幅 0.6m、深さ 0.1m で、埋土は淡灰色極細砂である。遺物がわずかに出土している。
- SD 02 幅 1.4m、深さ 0.4m の溝で、遺物がわずかに出土している。
- SD 03 幅 0.8m、深さ 0.1m の溝で、遺物は埋土中の最下層の灰褐色礫混粗砂に多く含まれるが、小片である。
- SD 04 幅 0.6m、深さ 0.2m の溝で、遺物は土器器の底と偏平な石が中層において 4 個出土している。埋土は淡灰色極細砂一層である。
- SD 05 幅は広い部分で 1.4m、狭い部分で 0.7m で、深さ 0.3m の溝である。土器、礫とともに大量に出土している。器形の復元が可能なものも多いが、大半は、磨滅がひどく小片である。また最終埋土の淡灰色極細砂に 1 点ではあるが占墳時代中期の須恵器の杯身の破片が出土している。
- SD 06 幅 0.5m、深さ 0.1m の溝である。埋土は淡灰色極細砂で SD 05 の底部から 0.2m ほど上で底面となる。溝は SD 05 の最終の流れ時に分かれたようで、遺物は SD 05 との境あたりの窪みにかたまって出土している。
- SD 07 幅 0.9m、深さ 0.2m の溝である。埋土や遺物の出土状況から SD 05 と同様の流れであつた可能性が高く、形態は人工的に掘削されたものである。SD 05 と 07 は、ほぼ同時期に掘削されたと考えられ、SD 06 はそれらが埋没する段階に形成されたものである。
- II 期 II 期の遺構は竪穴住居 4 棟、土坑 2 基、溝 3 条である。竪穴住居は方形のものが 3 棟、円形が 1 棟である。

- SB 01 東西長 5.6m、南北長 4.6m、床面までの深さ 0.25m の隅丸長方形の竪穴住居である。両短辺に幅 1 m のベッド状遺構が造られているが、北側のものが削り出しにより構築されるのに対し、南側は盛土により構築されている。床面の中心には中央土坑があり、周囲に幅約 10cm、高さ 5 cm の周堤を巡らせている。周堤の外郭は 1.0 × 0.8m である。内側を皿状に浅く掘り下げており、皿状の底面と外側の床面に炭の掻き出しの様子が認められる。また、西側には周堤と接する形で台状の高まりがあり、SD 08 により切られているために形態は明らかではないが、東辺の一部に円形の掘り込みがみられ、石が据えられている。床面成形時の痕跡とも考えられるが、作業台や置き台の可能性もある。また、柱穴は長辺主軸に 2 本の主柱が存在し、北側の主柱はベッド状遺構を切り込んでいる。柱穴掘形は北側が約 0.8 × 0.6m、深さ約 0.3m、南側が約 0.8 × 0.5m、深さ約 0.5m である。また、ベッド状遺構の内側に径 0.15m の 3 本（南東部分の柱は SD 03 により切られる）の柱が検出されており、柱の構成は主柱 2 本、補助柱 4 本であったと考えられる。東壁中央には 1.5 × 0.8m の長方形の壁際ピット（規模や形態からすれば土坑状）があり、この部分を除いて壁溝が巡らされている。さらに西側の壁に接して張出し部が設けられており、炭化物や礫が散在する。床面との高低差は約 0.15m である。遺物は主に主柱穴と東壁際ピット内から出土している。
- SB 02 ほとんどの部分が調査区外にあるため規模は不明である。壁体上で径 0.1m の柱穴が 5 基検出されている。遺物は土器片が少量と砥石状の偏平な石が出土している。

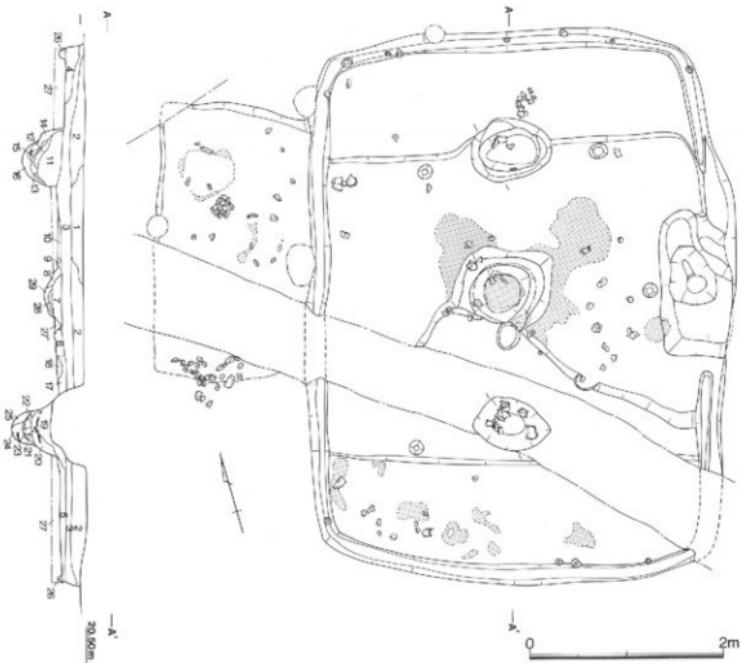


fig.212 SB 01 平・断面図

**SB 03** 径約3.0m、深さは0.2mの竪穴住居である。北壁に接して土坑が設けられており、多量の遺物と炭化材が出土している。床面では柱は検出できなかったが、壁体上面で径0.1mの柱穴が7基検出されている。調査区断面の観察から、まわりに幅約1mのベッド状遺構が存在する可能性がある。

**SB 04** 調査区外へ広がるため、規模は不明であるが、調査範囲内では東西4.4m以上、南北3.4m以上、深さは0.2mが検出できた。西辺に幅0.9mのベッド状遺構が設けられ、北辺には0.9×0.7m、深さ0.4mの長方形の壁際ピットが存在する。周壁溝が確認されており、ベッド状遺構の内側にも溝が検出されている。遺物は少量である。

**SK 07** 調査区外へ広がり、また攪乱により切られるため全体の規模は不明であるが、調査範囲内では幅1.0m、深さ0.1m、長さ1.5mが検出された。遺物は土師器の鉢の破片が出土している。

**A-SD 10** 微高地上で溝が1条確認された。幅6.8m、深さ0.3mで、断面は緩やかに窪んだ形状である。遺物の出土層位は区別しにくいが、中層から多量の遺物が比較的まとまって出土している。特に小型丸底壺や高杯が多くみられる。また、西の肩部から炭化材がまとまって検出されており、径0.1mの穴が認められることから杭状に木が立てられたと考えられ

る。

遺物は、微高地の上や微高地周辺の傾斜変換点付近からかなりの量が出土しており、ほとんどが古墳時代前期初頭から前半の遺物である。出土地区をみると、微高地の上よりも微高地の周辺からの出土量が多く、かなり流れ落ちたと考えられる。出土土器は全体的に高杯が多く、次いで小型丸底壺や椀、鉢等の小型の製品が多い。また周辺部分ではこれらの器種もみられるが、壺、甕など大型の製品が比較的多く確認されている。またSB 01、SD 10 からは手づくね土器が、SD 07 からは徳利に似た2段に球体を重ねた形状のものが出土しており、特異なものである。

21トレンチ 本事業地南端に位置する東西トレンチで、長さ約70m、幅約2.5mである。

第4遺構面 (T.P.19.10 ~ 19.30m)、第5遺構面 (T.P.19.10m)、第6遺構面 (T.P.18.40m)、第7遺構面 (T.P.17.70 ~ 17.90m) の4面の遺構面を検出した。

第4遺構面 微高地C端部と考えられる黄灰褐色シルト質細砂層上面で溝4条を検出した。

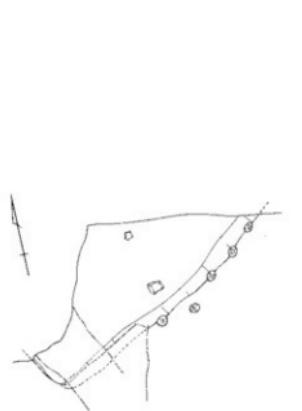


fig.213 SB 02 平面図

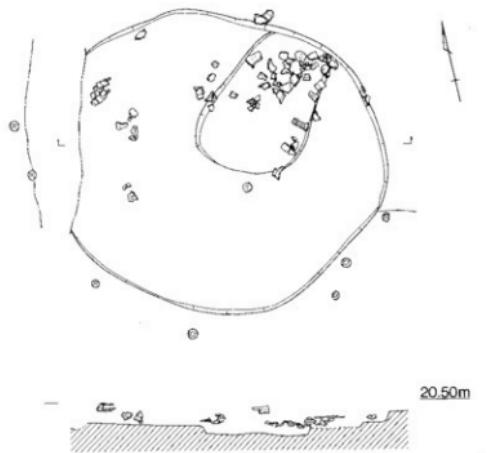


fig.214 SB 03 平・断面図

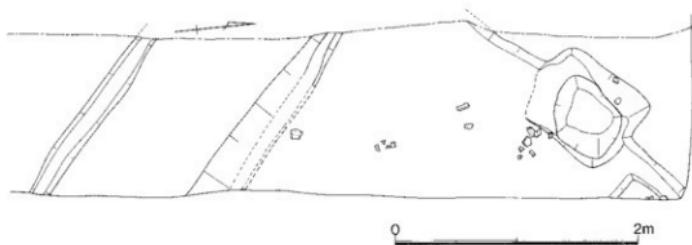


fig.215 SB 04 平面図

- C—SD 01 幅 2.8m、深さ 0.6m の溝で、中から土師器が出土している。
- SD 02 幅 0.8m、深さ 0.3m の溝で、遺物が小片のため正確な時期は不明であるが、SD 01 と同時期と考えられる。
- SD 03 幅 2.0m、深さ 0.3m の溝で、第 1 遺構面のベースにはやや茶褐色の砂が混じり、溝状になっていると思われるが、規模・形態についてはやや不明確である。小片の土師器が出土している。
- SD 04 幅 3.0m、深さ 0.6m の溝で、SD 01 とほぼ同様の規模である。埋没の状況も近似し、出土する遺物の時期にも差が認められないことから、おそらくは同時期に営まれたものであろう。土師器の甕が出土しており、比較的の残りが良い。
- 第 5 遺構面 暗灰色シルト層をベースとする遺構面で、溝が 1 条のみ検出された。
- SD 05 幅 0.4m、深さ 0.2m の溝で、埋土は明黄灰色の細砂で、遺物は出土していない。遺構の時期及び遺構面の形成時期については不明である。
- 第 6 遺構面 灰色細砂～粗砂をベースとする面で、溝が 1 条が検出された。
- SD 06 幅 3.2m、深さ 0.6m の溝で、上端は徐々に落ち込むが、中央部の幅 2.0m については逆台形に鋭く掘り込む。遺物は弥生時代中期の甕が 1 点が肩部から出土している。
- 第 7 遺構面 暗灰色シルト層をベースとする遺構面で地形的には東に向い緩やかに傾斜している。上面は淡灰褐色小礫混じり細砂により削られているが、一部で水田畦畔を検出した。
- 水田畦畔 調査区内 1 区で 2 ケ所、6 区で 1 ケ所検出した。その内 1 区の畦畔は T 字形に交わる部分である。各畦畔はいずれも幅 0.5m、高さが約 0.1m で遺存している。また、1 ～ 3 区にかけて畦畔を中心とした周辺で人の足跡が多数検出された。足跡の方向性などは判然としないが、深さは約 0.03m である。

3. まとめ 今回は幅約 2.5m のトレンチによる調査であった。南北トレンチ（14 トレンチ・約 420m）を基本として、複数の東西トレンチ（最大約 140m）によって、広範囲での旧地形の把握が行えた。

調査地内には 3 ケ所の微高地が存在しており、微高地 A（16 トレンチ 1 ～ 2 区、18 トレンチ 4 ～ 5 区、19 トレンチ、20 トレンチ）では、4 棟の竪穴住居が検出された。特に SB 01 は比較的良好な状態で遺存しており、北部九州において多く確認される平面が長方形で、両廻辺部にベッド状遺構のある竪穴住居である。この微高地はさらに範囲が広がる可能性があり、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落が営まれたものと考えられる。また微高地 B（14 トレンチ 18 ～ 21 区、17 トレンチ 1 ～ 4 区）、微高地 C（21 トレンチ）では溝や流路が確認され、微高地端での遺構の在り方や後背湿地への地形の変化などが確認できた。特に微高地 B 周辺の後背湿地には堤状の施設（SX 401・404・405）が設けられており、全体の規模などは明らかでないが、微高地付近での土地利用の在り方を示唆するものである。

さらに 14 ～ 16・21 の各トレンチでは、第 7 遺構面で弥生時代中期以前の可能性のある水田域が確認され、広範囲での水田経営の状況が明らかになった。各水田は水路や大畦畔周辺ではやや異なるものの、一筆約 8 ～ 15m<sup>2</sup> の小区分を基本としており、緩かに傾斜する自然地形を利用して上部の水田から徐々に下部の水田へ水を配る構造であったと考えられる。

## 28. 玉津田中遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

当遺跡は、平野地区開拓事業に先立ち、平成元年度の試掘調査によってその存在が確認された遺跡である。これまでに平成元年より7次の発掘調査が実施されている。今回は8次日の調査で、神戸四バイパス予定地に隣接する箇所である。

今回までの調査結果に基づいて、現代の盛土層と旧耕土までを重機により掘削を行い、これより下層から人力による調査を行った。

調査区は、南北約100m、東西約10mで、北と南に排水路を挟んでI区・II区と分けそれぞれを北・中央・南と大分割し、全体をA~V区（南北）、1~6区（東西）の5mメッシュの小分割をおこなった。



fig.216  
調査地点位置図  
1 : 2500

### 2. 調査の概要

層序は現代盛土層、旧耕土、床土、黄灰色混礫泥砂層、灰色砂泥層（中世遺物包含層）、黄褐色砂泥層（第1遺構面・弥生～古墳時代遺物包含層）、黄灰色砂泥層（第2遺構面・弥生時代遺物包含層）、褐色泥砂層（第3遺構面・弥生時代中期遺物包含層）、青灰色砂泥層、暗青灰色砂泥層（第4遺構面・最終河道）である。

検出された遺構は、概ね次のとおりである。第1遺構面では、川状遺構1条、溝状遺構13条、落ち込み状遺構14基、柱穴約250か所、掘立柱建物15棟以上である。第2遺構面では、溝状遺構12条、落ち込み状遺構8基、ピット50か所、竪穴住居1棟、土坑3基である。第3遺構面では、川状遺構1条、落ち込み状遺構1基、土坑5基などである。第4遺構面では、溝状遺構1条、落ち込み状遺構2基、ピット3か所、川状遺構1条である。

- 第1遺構面** 調査区をほぼ南北に走る幅約3m、深さ約0.5mの溝状遺構で、断面は逆鉢形を呈する。I区3か所、II区3か所で本流と同じ堆積土の幅約0.5~1m、深さ0.1~0.3mの細い溝が合流している。南端は、一旦3条に分岐し、また1条となり南東へ流れれる。出土遺物は多量である。土師器椀・皿・甕・高壺・鍋・須恵器椀・皿・甕・壺・瓦、青磁碗、白磁皿、甕、鉢、鉢羽口、木片等がある。その他特記すべき遺物として、風字硯、長方硯、硯面に範描き文様のある硯、須恵器椀の底部に黒漆の付着したものが5点ある。
- SD 101** I区北東端の北西から南西にかけて走る川状遺構である。幅約7m、深さ約0.8mの規模で、堆積土の大部分は人頭大の礫や砂利が占めており、堆積をもたらした土石流の流れが急激なものであったことを示している。この上面には、圃場整備前の旧水路があり、13世紀以降の遺物も混入している。最下層では、奈良時代末頃の須恵器壺・壺・甕、平安~鎌倉時代椀・皿・甕、室町時代以降の陶器類等である。また特記すべき遺物として、有茎尖頭器が1点出土している。
- SD 103~105** I区中央で検出された幅約0.3m、深さ約0.1mの浅い溝状遺構である。微量の須恵器片、土師器片が出土した。
- SD 106** II区北から南にかけて検出された溝状遺構で、SD 101とは並行に走る。調査区の東辺で検出されたため幅は不明である。深さは約0.5mである。土師器椀・皿・甕・鍋・須恵器椀・皿・甕などが出土した。
- SD 107** II区中央で検出された幅約2.1~3.2m、深さ約0.4mの溝状遺構で、東西端をSD 101とSD 106に切られる。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SD 108** SD 107と同じくII区中央で検出された幅約1.4~2.5m、深さ0.3mの不整形な落ち込み状の溝状遺構である。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SD 109** II区中央で検出された幅約2.8m、深さ0.7m、断面が逆台形を呈する溝状遺構である。形状から人為的に掘られたものと考えられる。しかしながら、圃場整備前の地形図から字界を示す溝に当たるものではなく、今後検討すべきものである。土師器椀・皿・甕・鍋・須恵器椀・皿・甕などが出土した。
- SD 110** II区北で検出された幅0.5m、深さ0.2mの弧状を成す溝状遺構である。須恵器片、土師器片が少量出土した。

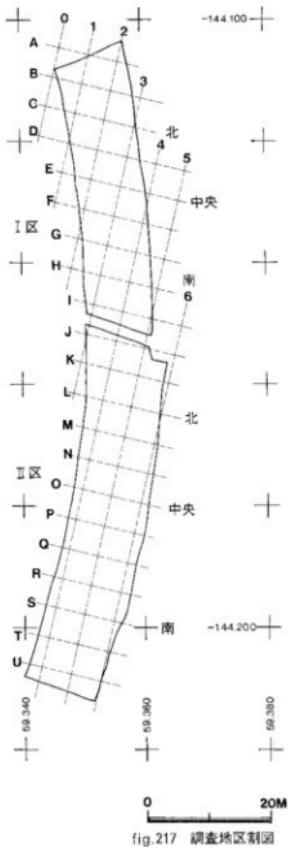


fig.217 調査地区割図

- SD 111～114 II区南で検出された幅0.3m、深さ0.1mの浅い溝状遺構である。水田などに伴う溝と考えられる。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SX 101 I区北東隅で検出された落ち込み状遺構である。SD 102の中の凹みである。
- SX 102 I区北で、縄文土器、弥生土器、石鏃、サスカイト片を含む暗褐色砂泥の舌状の堆積で

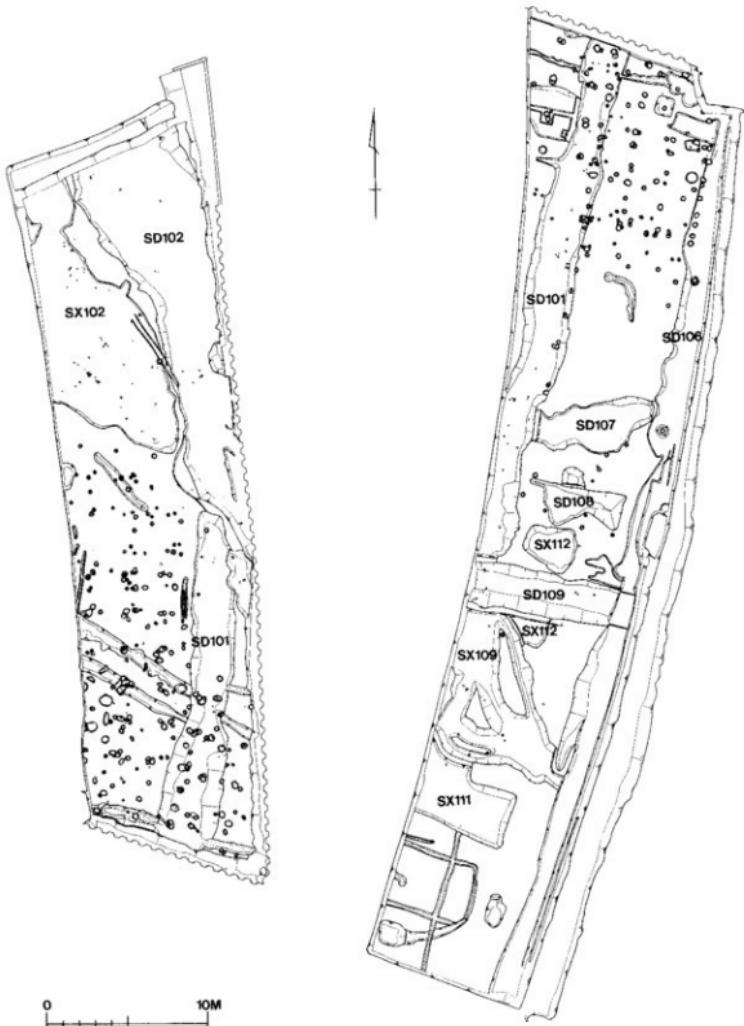


fig.218 第1遺構面平面図

ある。他の第1遺構面の時期と異なるが、検出された遺構面が第1遺構面のため便宜上SX 102と呼称する。

ここで調査区全体の地形について少し触れておくと、SD 102、SX 102付近では、地山は現地表面から0.5～1m前後と比較的浅く検出される（標高24.6m）。段丘裾部つまりSD 102、SX 102南端部では、地山は現地表面から約3m前後で検出され、2m以上の落差を持つ段丘崖が存在することが判明した。段丘崖の当初の堆積状況を確認するため、最終的調査作業として立ち廻りを行い、標高21.8mまで段丘崖を検出した。

調査区の地形として、北西から南東にかけて走る段丘崖があり、その裾部に明石川に起因する堆積物で、徐々に埋まりながら、各時期の遺構面が形成されたことが窺える。

- SX 103 I 区中央、SD 101・102の切り合い部分を覆う東西約3m、南北約6m、深さ0.2mの半円形の泥砂の堆積遺構である。須恵器片、土師器片が出土した。
- SX 104 I 区中央、SD 101の北端を切る東西約1.5m、南北約4m、深さ0.4mの不整形の落ち込み状遺構である。須恵器片、土師器片と二面視が出土した。
- SX 105 I 区南、SD 101の分岐溝（SD 101-B西）の上面で検出された。東西約3.5m、南北約0.8m、深さ0.1mの細長い落ち込み状遺構で、上記の分岐溝をほぼ覆うものである。堆積土は、褐灰色砂泥に多量の炭を含む。須恵器片、土師器片と風字硯が出土した。
- SX 106 I 区中央で検出された、平面形は溝状遺構に見える遺構である。規模は東西4.8m、南北0.6m、深さ0.1mで、須恵器片、土師器片が出土した。
- SX 107 II 区北 SD 101に切られて検出され、西端は調査区外となる。南北3.2m・深さ0.2mである。
- SX 108 II 区中央で検出された不整形の落ち込み状遺構である。規模は、東西3.2m、南北2.8m、深さ0.4mで、検出面から0.1m前後で、薄い炭層が遺構のほぼ北半にひろがる。須恵器皿・土師器皿などと共に少量の炭化材が、この炭層上面で出土した。何らかのかたちで火を利用した遺構であろうか。
- SX 109 SD 101が3条に分岐する部分から SX 111の上面で検出された、東西約5m、南北約14m、深さ0.1mの薄い堆積である。調査区全域にひろがるこの上層の包含層と異なる堆積のため分別した。
- SX 110 SD 108に南を切られた、東西1.3m、深さ0.2mの不整形の落ち込み状遺構である。少量の須恵器片、土師器片が出土した。
- SX 111 北は SD 101に切られ、西端は調査区外となる、不整形の落ち込み状遺構である。規模は、東西約6m、南北約4m、深さ0.2～0.4mで南側が深くなる遺構である。
- SX 112 南北をそれぞれ SD 101・109に切られる東西3.2m、深さ0.1mの不整形の落ち込み状遺構である。堆積土に炭、焼土を多く含み、遺構の底は少し火を受けていた。SX 108とSD 109を挟んで近接することからも、同様の性格の遺構と考えられる。
- SX 113 II 区南で検出された東西約1m、南北0.4m、深さ0.2mの小規模の不整形の落ち込み状遺構である。このすぐ南側で須恵器碗が2個体分出土したが、SX 113からは少量の須恵器片、土師器片が出土した。
- SX 114 II 区中央 SD 106に東を切られる深さ0.1mの浅い溝状遺構である。少量の須恵器片、

土師器片が出土した。

柱穴群　柱穴は、おもにⅠ区中央～Ⅱ区北に集中して検出された。Ⅰ区南では、東に段丘が迫るため少なくとも同一面での遺構の存在は、考えられない。このためⅡ区北の東西棟にひろがっていくものと考えられる。

掘立柱建物

	桁行(柱間m)	梁行(柱間m)	備考
SB101	2間(2.4)	2間(1.3)	柱穴径0.2～0.3mの 小規模な建物 南北棟
SB102	1間(2.7)	1間(2.3)	同上 東西棟
SB103	1間(2.6)	1間(2.0)	同上 東西棟
SB104	1間(2.8)	1間(2.2)	同上 東西棟
SB105	2間(2.0)	3間(2.2)	2間×3間以上 南北棟 北側柱持柱G-3P122釘
SB106	2間(2.3)	2間(2.7)	2間×2間以上 総柱 南北棟
SB107	2間(2.5)	2間(2.0)	2間×2間以上 東西棟
SB108	2間(2.3)	3間(2.1)	南西隅柱I-4P116 ホゾ穴建築材 箆状工具 横石 南北棟
SB109	1間(2.1)	2間(2.1)	総柱 南北棟
SB110	1間(2.2)	5間(2.3)	西側へ広がるか？総柱 南北棟 北東隅 地鎮遺構(I-3P105)
SB111	3間(2.5)	11間(2.3)	南北に分かれる 総柱 南北棟
SB112	2間(2.1)	4間(2.2)	北西隅柱穴砥石 総柱 南北棟 横巻石
SB113	1間(2.4)	2間(2.2)	横巻石 総柱 東西棟
SB114	3間(2.5)	3間(2.4)	東列2柱穴に礎石 東西棟 横巻石
SB115	1間(2.0)	2間(2.1)	東西棟
SB116		2間(2.5)	東側へ広がる？ 東西棟

第2遺構面

- SD 201　Ⅱ区中央～南で検出された幅1.1m、深さ0.2m、断面逆蒲鉾形を示す溝状遺構である。  
少量の土師器片が出土した。
- SD 202　Ⅱ区南で検出された幅0.3m、深さ0.05mの浅い溝状遺構である。少量の須恵器片、土師器片が出土した。
- SD 203　Ⅱ区中央 SD 201に切られる溝状遺構である。幅1.2m、深さ0.3m、断面形は逆蒲鉾形を示す。少量の土師器片が出土した。
- SD 204　Ⅱ区中央に位置し、上層のSD 107の北側肩をほぼ共有し、SD 107で北側を切られた形で検出された。幅2～4m、深さ0.5mで、少量の土師器片が出土した。



fig.219  
掘立柱建物群平面図

- SD 205 II 区北で検出された弥生時代後期の溝状遺構である。緩いS字形を描き、幅 0.8m、深さ 0.3m の規模である。完形品となる甕・壺が20個体足らず出土した。
- SD 206 II 区南で検出された SD 201 に切られる溝状遺構である。幅 0.2m、深さ 0.05m の浅いものである。
- SD 207 I 区中央～II 区北にかけて検出された幅 1.8m、深さ 0.8m 断面形が緩いV字を呈する